弘化四年四月二十二日

大納言様御養子に被　仰立〻事、

阿部伊勢守

（水野忠央、和歌山藩附家老）土佐守

（徳川治寶、元和歌山藩主）顯龍院殿（前和歌山藩主）妾腹に被致出生候菊千代事、至極丈夫に被生育候付、紀伊殿養子に被致度被存候、左候はゝ、嫡子に被相成、安心被致候、右〻段、可及御談旨、被申付候、

（徳川治寶、元和歌山藩主）一位様より御達、

顯龍院殿妾腹に被致出生候菊千代事、至極丈夫に被生育候付、紀州殿養子に被成度、被存候付、被任其意候、依之被申達候、

右〻通、内談〻儀、及取計候事、尤跡々〻振にゐは、御用御賴〻御老中方、幷月番御老中方にも御内談させ有之候得共、當月は伊勢守月番にゐ、同人は御用御賴〻仁に付、同人に計内談取計之、

三月十日

一右〻通候處、今日伊勢守宅に土佐守相越候様、前日直に呼出一參り候付、則罷越候處、左〻書取添、前顯内談書相渡一候事、

御書面〻趣、御勝手次第被仰立候様、可被申上候事、

上意ヲ以テ菊千代ヲ養子トナス

四月十日

一右に付、今日表向被　仰達に相成、則伊勢守宅に土佐守罷越、右御達取計之、

四月廿二日

一今日

上使阿部伊勢守・牧野備前守を以、

菊千代様事、

大納言様御養子被　仰出之、

紀伊大納言殿

上意書左〻通、

御内意〻通、菊千代殿事、紀伊殿御養子被仰出候、依之

御使被遣候、

右一通

見出一に

覺

別紙〻通、被　仰出候に付ゐは、爲御禮今日紀伊殿御登

城被成候様可相達候事、

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

四月廿二日

一右に付、卽日、

菊千代様御事、

上使を以、御養子被

仰出候、此段

御同所様に可申上との御事、

四月廿二日

右一通

右同文言、

但

御簾中様に可申上と認之、

右兩道

御簾中様御用人に

右〻通、申上〻儀、取計之、

〔和歌山〕徳川家譜〕○維新史料編纂會所藏本

○齊順　正二位行權大納言　初清水中將兼式部卿　謚顯龍院　實家齊公七男

女子　夭

女子　夭

女子　夭

女子　夭

○齊彊　從二位行權大納言　初清水中納言　謚憲章院　實家齊公二十二男

慶福

女子　夭

龍千代　夭

女子　夭

弘化四年四月二十二日

女子　實尾張大納言齊荏女、松平上總介慶熾室
慶福　實齊順男、參議從三位　天
辰次郎　天
女子　天

茂承　正二位行權中納言
初頼久
實彈正大弼頼學七男

〔徳川菊千代略譜〕○南紀德川史所載

菊千代實母ノ略歴

諱慶福　後家茂　御幼名菊千代、
顯龍公御嫡　憲章公御養子、
御實母　松平六郎右衞門女　みさと　實成院、

一天保三辰年七月朔日、御次被召出御側詰之事、
一同五午年七月十八日、御中蔭被　仰付、
一同十四卯年十一月廿四日、若年寄格被　仰付、御切米金五拾兩七人扶持、
一弘化三午年九月十四日、此度ノ御儀ニ付、剃髪願候得共、先摘髪ニテ可罷在、御切米御扶

持方其儘、
弘化三午年十二月十五日、　菊千代様至極御丈夫ニ御生育、御滿悅ニ付、格別之　思召ヲ以、大上蔭被　仰付、御切米金百兩十人扶持被下、
一嘉永四亥年十二月十日、此度御元服、御官位被　仰出候ニ付、向後御内證之御方同格被　仰出、向後御手前ニテハ實成院殿ト被稱、
一金三百兩拾五人扶持御定金米可被遣旨被　仰出、
一嘉永六丑年十月十三日、向後　實成院様ト可稱旨被　仰出、御定銀七百廿兩銀六拾貫目ノ歩賦米九拾石被進、

御順左之通、

實成院様　左京大夫様

一安政六未年四月廿四日、　公邊ヘ御達ノ上、他向ヘハ　公方様御實母實成院方ト被稱候事、
一同年九月十一日、御登　城、　公方様ヘ御目見、御懇ノ　上意、種々御饗應御拜領物被成、
一萬延二酉年二月十八日、　御本丸ヘ御引取、同日實成院殿ト被　仰出、

弘化三午年閏五月廿四日、於江戸御誕生、

同年八月廿三日、　中納言(齊疆)様憲章公ヨリ御名被進、菊千代様ト奉稱、

同月廿八日、御七夜御祝儀御整ニ付、御名ノ折紙鰹節壹箱、於大奥　中納言様ヨリ御直ニ被進、

顯龍院様御遺腹ニ付、御誕生卽日ヨリ五十日御遠慮、七月九日ヨリ御遠慮被爲解候様、　中納言様ヨリ被　仰進、依テ御七夜御祝延候也、

同年九月廿八日、御色直幷御箸揃御祝儀御整被遊、

同四未年四月廿二日、　上使ヲ以御内意之通、　大納言様憲章公御養子被　仰出、

同年五月朔日ヨリ六日マテ、江戸表ニテ御堤御建初、御家中一同拜見、

同五申年三月十一日、御髪置御祝儀御整被遊、

〔愼德院殿御實紀〕○續德川實紀所載

五月七日、御側小笠原若狹(信喜)守御使して、紀伊大納言齊彊卿に檜重、菊千代のかたに菓子をおくらせらる、

五月十九日、菊千代の方養子仰せ出されし御祝として、戸田山城(忠温、老中)守御使して、紀伊大納言齊彊卿に二種一荷、菊千代のかたに卷物十、紀伊一位・大納言齊彊卿北のかたにおの〳〵

三種二荷を進らせらる、大納言齊彊卿は、謝してまうのぼられ、卷物十・金馬資をさゝげて御對面あり、御手づから熨斗蚫を贈らせらる、菊千代のかた・一位にはおの〳〵使して、卷物十・三種一荷また二種一荷をまいらせらる、

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

五月十九日

二種一荷	右大將様ゟ	御使戸田山城守
一種一荷		御使松平和泉守
卷物十		紀伊大納言殿
三種一荷	同	同人
二種一荷	同	同人
		德川菊千代殿
二種一荷	同	同人
一種一荷	同	同人
		紀伊一位殿
	同	同人
	同	同人
		紀伊殿御簾中

将軍祝品ヲ贈ル

弘化四年四月二十二日

右ゟ菊千代殿御養子被　仰出候爲御祝儀、今朝被遣之、

御座〻間

御太刀金馬代
卷物十
右大將樣ゟ
同斷

菊千代殿御養子被仰出候御禮

紀伊大納言殿

右御對顏、

御手自御熨斗蚫被遣之、

二種一荷

御太刀馬代
卷物十
三種一荷
右大將樣へ
御太刀卷物十

紀伊一位殿

右菊千代殿御養子被　仰出候爲御禮、以使者被差上之、於躑躅〻間謁伊勢守、

徳川菊千代殿

○高麗環雜記ニモ略々同一内容ノ記事アリ。

〔諸用留〕○内閣記錄課所藏本

○五月

扣　伊勢守

紀伊殿より

松平一郎兵衞渡

養子緣組御禮ノ爲祝儀獻上ノコト

菊千代殿事、養子被

仰出候付、右御禮被申上候節、紀伊殿より

公方樣　右大將樣ゟ獻上物、御簾中樣ゟ進上物〻儀、如何可被致哉、宜御差圖賴入被存候、

付札

公方樣ゟ
御太刀金馬代
卷物　二十
右大將樣ゟ
御太刀金馬代
卷物　十
御簾中樣ゟ
卷物　十
干鯛　一箱

右〻通、被獻候樣可申上候、

紀伊一位殿より

同文言、一位殿より御差圖〻趣、紀州ゟ申遣度、

付札

公方樣ゟ

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

二　種　二荷
右大將樣ゟ
二　種　一荷
御籠中樣ゟ
一　種　一荷
右〻通、被獻上候樣可申越候、
紀伊殿より
同文言、紀伊殿〻籠中より
付札
公方樣ゟ
二　種　一荷
右大將樣ゟ
一　種　一荷
御籠中樣ゟ
一　種　一荷
右〻通、被差上候樣可申上候、
菊千代殿より
同文言、菊千代殿より

付札
公方樣ゟ
卷　物　十
三　種　二荷
右大將樣ゟ
卷　物　五
二　種　一荷
御籠中樣ゟ
二　種　一荷
右〻通、被獻候樣可申上候、
扣　伊勢守
紀伊一位殿より
紀位一位殿より
菊千代殿、養子被
仰出候爲御祝儀、
公方樣　右大將樣より以
上使、紀伊殿・一位殿・菊千代殿被致拜領物候ゑ、一位殿於紀州承知〻上、

松原一郎兵衞渡

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

公方様　右大將様　御簾中様に御禮品〻儀、如何可被致哉、御差圖〻趣、紀州に申遣度奉存候、

付札

飛札御差越可被成候、

御簾中様には、在府〻者を以、月番御留守居迄、被仰入候様可申越候、

紀伊一位殿より

同文言、紀伊殿〻簾中に被致拜領物候ハ、

付札

同斷、

紀伊一位殿より

菊千代殿養子被

仰出候爲御祝儀、

御簾中様より御使を以、紀伊殿・一位殿・紀伊殿〻簾中・菊千代殿に被致拜受物候ゝ、一位殿承知〻上、

公方様に御禮品〻儀、如何可被致哉、御差圖〻趣、紀州に申遣度奉伺候、

付札

養子緣組ノ爲和歌山藩主ヨリ老中以下ヘ贈品ノコトアリ

同斷、

扣　伊勢守

紀伊殿より

今度、菊千代殿事、養子被　仰出候爲祝儀、紀伊殿・菊千代殿より左〻通、可被饋ゝ被存候、此段申達候様被申付候、

松原一郎兵衛渡

紀伊殿より

卷物五　御老中方

兩種充　松平和泉守殿

京都　所司代衆

卷物三　大坂　御城代衆

一種充

御本丸西丸　若年寄衆

同斷充

御本丸西丸　御簾中様　老女

銀三枚充

弘化四年四月二十二日

同二枚充　御本丸西丸御客應答

同斷充　御籠中様中年寄

同斷充　御本丸西丸御籠中様表使

同三十枚　御本丸惣女中

太刀金馬代充　菊千代殿より

一種　御老中方

太刀金馬代充　松平和泉守殿

同斷充　京都所司代衆

大坂御城代衆

御本丸西丸若年寄衆

銀二枚充　御本丸西丸御籠中様老女

同一枚充　御本丸西丸御客應答

同斷充　御籠中様中年寄

同斷充　御本丸西丸御籠中様表使

右〻通、

付札

御書面〻通、御贈被成候様可申上候、

（朱書）「右三通、九日持歸、」

濱松藩主井上正春（河内守）卒ス（二月十二日）

〔上總鶴舞井上家譜〕（維新史料編纂會所藏本）

正春（河内守正甫ノ子、幼名武丸、龜丸、）文政二年十一月朔日、初テ見參シ、同三年四月十六日、家ヲ繼キ、六万石、同年十二月十六日、敍從五位下、河内守ト改ム、同十二年六月廿八日、御奏者ノ事ヲ承ハリ、

是日、嫡子英之助（正直、後河内守）家ヲ繼グ。

天保五年四月八日、寺社奉行ヲ兼、同七年三月十二日、上野國館林ノ城ヱ移サル、同九年四月十一日、大坂城代トナリテ敍從四位下、役知一万石ヲ賜ル、同十一年十一月三日、宿老ノ職ニ昇リ、侍從ニ進ム、同十四年正月十四日、就病氣ニ職ヲ辭シ、弘化二年十月晦日、遠江國濱松ノ城ニ移サル、同四年二月十二日、卒ス、年四十二歲、其子英之助正直、同年四月廿二日、家ヲ繼キ、六万石、嘉永三年十二月十六日、敍從五位下、河内守ト改ム、

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

三月四日

上使大久保與三郎

井上河内守（正直、濱松藩主）

右病氣ニ付、爲　御尋被遣之、

英之助襲封

上使差遣

〔濱松藩主井上正春屆書〕○内閣記錄課所藏本　諸用留所載

○三月四日幕府ヘ

（朱書）「病氣大切〻旨、申聞置候書付

三月四日

井上河内守

口上覺

私儀、疝瀉罷在候處、去月中旬より寒熱有之、持病〻癇症相發、「今朝ゟ別ゟ差重、段〻草臥强、及大切申候、此段被御聞置可被下候、以上、

三月四日

井上河内守

〔濱松藩主井上正春願書〕○諸用留所載

○三月五日幕府ヘ

帶札

跡式願

高六万石

三月五日

（英飛、先手鐵砲頭）小出丹宮同道

（鐵學、奏者番）土岐伊豫守持參

井上河内守

遠江國濱松城主

井上河内守　未四十二歲

嫡子　井上英之助　未十一歲

次男　井上金吾　未十一歲

三男　井上良之助　未八歲

分知不奉願候、

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

私儀、從當正月初旬疝瀉罷在候處、從去月中旬時候相障、寒熱有之、持病〻癇症相發、折〻差塞、色〻養生仕候得共、追日差重、快氣可仕躰無御座候、相果候ハ、嫡子英之助ニ家督無相違被下置候樣奉願候、以上

弘化四丁未年三月五日

四　人　殿

井上河内守印

手揮候付印判計相用申候

三月五日

小出丹宮持參

井上河内守」

〔朱書〕「容躰書」

容躰書

私儀、當正月初旬より疝瀉罷在候處、去月中旬より時候相障、寒熱有之、持病〻癇症相發、折〻差塞、出來不出來御座候ニ付、色〻養生仕候得共、追日不相勝、食事段〻相減、草臥强、次第ニ差重、快氣可仕躰無御座候、療治請候御醫師名前別紙書付〻通御座候、以上、

三月五日

井上河内守

〔朱書〕「相詰候醫師名前書」

右〻通、相詰罷在候、以上、

三月五日

三月五日

小出丹宮持參

井上河内守」

〔朱書〕「療治請候醫師名前書付」

覺

此節服藥仕候、

多紀樂眞院

野間壽昌院

御目見醫師

高井元益

井上河内守

三月五日

小出丹宮持參

井上河内守」

多紀樂眞院

野間壽昌院

御目見醫師

高井元益

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

右〻通療治請申候、

大膳亮章庵

眞田信濃守家來
篠原良意

井上鎌之助家來
乃美雲貞

右容躰爲見申候、

以上

三月五日

井上河内守

〔朱書〕「相詰候一類名前書付

三月五日
小出丹宮持參

當病
井上河内守」
松平伊豆守

土岐伊豫守

當病
織田兵部少輔

酒井對馬守

右〻通、相詰罷在候、以上、

三月五日

〔朱書〕「右五通五日出、翌日持出、」

〔諸用留〕○内閣記錄課所藏本

三月五日

病氣差重候段、達

上聞、爲　御尋被成下

上使、御懇〻蒙

弘化四年四月二十二日

岡野大學頭

瀧川十次郎

井上欣之丞

井上虎之允

井上猪三郎

井上河内守

井上河内守

名代井上虎之丞

上意、從
右大將樣茂御懇〻蒙
上意、冥加至極難有旨、御禮以名代申聞之、
（朱書）「六日持出、」

〔濱松藩屆書〕○藩用留所載

○三月六日幕府へ
（朱書）「井上河内守卒去〻旨屆」

三月六日
井上虎之允」

井上正春卒ス

井上河内守儀、病氣養生不相叶、昨夜亥刻過死去仕候、此段御屆申上候、以上、
三月六日
井上虎之允

〔濱松藩世子英之助屆書〕○藩用留所載

忌服屆寫

三月六日
井上英之助

同姓河内守儀、昨夜亥刻過死去仕候付、私儀左〻通忌服請申候、
忌五十日（三月五日ヵ 四月廿五日迄）

服十三月（三月五日ヵ 來申三月迄）
右〻通御座候、以上、
三月六日
井上英之助

〔弘化年錄〕○東京帝國大學所藏本

五月朔日
一今巳上刻　御表ニ
公方樣　右大將樣　出御、月次〻御禮相濟、
御白書院
家督〻御禮
井上英次郎（英之助カ）

金貳枚
綿二十枚
御馬一疋
右大樣へ
御太刀馬代
金三枚

〔奏者番牧野康哉日記〕○雜新史料編纂會所藏本

五月朔日、○中略、
一御白書院ニ　兩上樣　御一同　出御、○中略、當番○中略、大目付衆〻後ロを通り、大廊下ニ相越、進物番ヵ井上英之助〻太刀目錄受取、鳥渡披見、小溜ニ持參、御披露人松紀伊守殿（松平信篤、奏番番）

に相渡、元席に復坐、○中略、

一御用番伊勢守殿、御下段隅御柱際に御居直り着座、夫々り被伺
御前、自分に會尺有之候間、得と御時宜以多〻、直に井上英之助進物金臺持候進物番を
誘引、金臺進物番持出、御下段御閾〻外上々り二疊目に差置、廻り立候を曲尺に、次〻進
物番を誘引、綿臺進物番上々り三疊目に差置、廻り立候を曲尺に、御披露人松紀伊守殿
ヲ誘引、同人御太刀目錄持參、諸大夫〻疊目に差置、御披露構を見受、英之助名代松平伊
豆守（大河内信璣、三河吉田藩主）を誘引、同人諸大夫〻疊目に罷出、披露、御禮申上、（名代故上意御取合無之、）直引、御披露人松紀伊
守殿にも御太刀目錄被持引、進物番綿臺引、金臺引候進物番罷出引之、○中略、

五月朔日

御白書院

御太刀一腰
一、金三枚
二、綿二十把
御馬一疋 御背

家督〻御禮
三、松紀伊
四、井上英之助
名代 松平伊豆守

彦根藩主井伊直亮、相模警備ノ爲、大砲ヲ鑄造センコトヲ幕府ニ稟ス。

大砲鑄造打合ノコト

〔彦根藩家老木俣長閑書翰〕（○伯爵井伊直忠所藏本 御備場一件帳所載）

○四月四日同藩中老岡本半介宛

以書付申達候、然と御備場御用御鐵炮鑄立〻儀、（正路、幕府鐵炮方）井上左太夫殿に追〻御賴可被遊、先差懸
り十挺御賴被遊候、尤
此方樣にも、御國に海岸も無之事に付、此度〻御用辨に可相成御筒無之候得ば、何ぶに應
シ、御賴も可被遊事に付、差懸り此度〻御間に合可申筒ゟ先に御鑄立御賴被遊度、左太夫
殿にも御功者〻儀に付、得と御城使に申含、彼方に相任セ、忽御用立候筒ゟ御世話被成候
樣、御賴〻御使相勤、込入入魂相賴候樣御申渡可有之、且又ホンヘン筒〻儀も難相分候得
共、一說にも、二人持位にる自由に持運ひ相成候趣に相聞候得共、鑄筒ゟ違ひ、取扱等手
輕キ趣に候間、是又左太夫殿に承合、彌御用辨宜敷事に候ハヽ、何挺計も被仰付候ハヽ可
然哉、彌五八・六之丞考意申出候樣、御達可有之候、此段可申遣旨、被　仰出候、以上、

四月四日

岡本半介樣　　木俣土佐

〔彦根藩士 稲垣彌十郎等書翰〕（○伯爵井伊直忠所藏本 御備場一卷留所載）

○四月六日同藩中老宛

弘化四年四月二十二日

公儀秘事鐵炮師國友大三郎鐵砲見積書ヲ差出ス

弘化四年四月二十二日

被　仰渡候ニ付、公儀御鐵砲張國友大三郎方ニ罷越、拂筒見分仕候處、何ゟも出來方大抵宜敷、相應〻作人と相見申候、筒數餘程御座候内、御用筒ニ可相成分相撰、代金精〻致省略、書付差出候樣申付置候處、別紙差出候間、愚考〻趣、別紙ニ附札を以申上候、猶御賢考御座候樣仕度奉存候、尤大筒鑄立被仰付候御儀ニ御座候ハヽ、右〻者ニ被　仰付候ハヽ大底ニ出來可仕と奉存候、此段申上候、以上、

四月六日

山本運平
山下兵五郎
稲垣彌十郎

岡半介樣

覺

一唐銅拾貫目玉　　下ケ札
狼煙筒　壹挺
但長七尺五寸
重サ五百貫目餘
代金五百貳拾兩

此筒狼煙筒ニも丈夫成方ニゐ、出來方も宜敷、御用立可申と奉存候、尤筒表惣體毛彫雲形有之、火皿先ニ澤瀉紋所有之、唐銅仕立〻筒ニゐ御座候、代金四百兩位ニゐ御買上ケニ相成候ハヽ可然哉と奉存候、

荻野流

一唐銅百目玉抱筒　壹挺　　下ケ札
但臺金具附
惣目方六貫五百目
代金十六兩

此筒相應〻目方ニゐ、格好釣合も宜敷、御用立可申と奉存候、鎮鍮仕立〻筒ニゐ御座候、代金十五兩位ニゐ御買上ニ相成候ハヽ可然哉と奉存候、

一同斷五拾目玉　　下ケ札
抱筒　壹挺
但臺金具附
惣目方六貫目
代金拾五兩

此筒玉目割と ハ重キ方ニゐ、少〻不釣合ニ相見候得共、追ゐ玉目相增候節と、七十目玉迄ハ御用立可申と奉存候得と、拾三兩位ニゐ御買上ケニ相成候ハヽ可然哉と奉存候、

一鐵張筒三拾目玉　　同
抱筒　壹挺
但臺金具附
惣目方三〆五百目
代金拾三兩貳分

此筒相應〻筒ニゐ、格好釣合も宜敷、御用立可申哉と奉存候、拾壹兩位ニゐ御買上ニ相成候ハヽ可然哉と奉存候、

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

一同斷拾匁玉筒　三挺　同
内唐銅筒　壹挺
但臺金具附
壹挺ニ付
代金五兩貳分
右百目玉ゟ拾匁玉迄筒長サ二尺三寸
一同斷六匁玉筒　壹挺　同
但臺金具附
筒長サ二尺五寸
代金四兩壹分
目方壹〆貳百四拾目
新筒
一同斷三匁五分玉筒　貳挺揃
但臺金具附
筒長サ三尺三寸

此六匁筒・三匁五分筒共夫〻大體出來方宜敷、六匁筒目方壹貫貳百四十目、三匁五分筒壹貫四十目計有之、御用立可申哉と奉存候、新筒三兩位ッ、、古筒壹兩貳歩ッ、位ニる御買上ケニ相成候ハヽ可然哉と奉存候、併以下小筒〻向も、彦根表ニ多分〻員數御座候御儀ニる、追〻御差下シニ相成候御趣ニ候得も、得と御考被爲在候上ニる、御買上ケニ相成可然哉と奉存候、此筒一挺八兩ニるも高價ニ付、御見合ニる可然奉存候、

代金八兩三分
一鐵張筒拾匁玉筒　貳挺
但臺金具附
筒長サ二尺五寸
二尺四寸
代金拾六兩
一同斷六匁玉筒　八挺
但臺金具附
筒長サ貳尺五寸
代金貳拾四兩
内壹挺臺金具
仕直シ代金三歩
惣體先目當段見ニ
直シ代銀八匁
一同斷四匁玉筒　壹挺
但臺金具附
弘化四年四月二十二日

此筒夫〻目方壹〆貳百目ッ、、御座候、相應〻筒ニる御用立可申哉と奉存候、八挺〻内、新筒貳挺、古筒四挺宜敷、新筒〻分壹挺ニ付、代金三兩位ッ、、古筒〻分壹兩三歩位ッ、、ニる御買上ニ相成候ハヽ可然哉と奉存候、尤古筒〻向も未損等も相見不申、相應御用立可申哉と奉存候、

弘化四年四月二十二日

筒長サ三尺五寸

代金三兩壹歩

田付流

一同斷三匁五分玉筒　四　挺

但臺金具附

筒長サ三尺二寸

代金十兩

右〻通、御直段〻儀、精々出精仕候、以上、

御秘事御鐵炮師

國友大三郎

未四月

〔彦根藩士〕山本傳八郎等書翰〕〇伯爵井伊直忠所藏本御備場一件帳所載

〇四月十五日同藩中老宛

此度大銃新調被仰付候御用途ニ、七千兩迄〻處ハ追〻可被仰付、殘三千兩〻儀ハ、此度〻御用、何ニ御遣ひ被遊候ゟ可然哉、存寄御尋〻趣奉畏候、右ハ先達ゟ中、拙者申上ニ、此度御村替ニ被仰付候海岸〻者共ニ、御拜領金〻内、　御憐愍〻以

拜領金一萬兩處分ノコト

思召、被下置候ハヽ、自然〻節ニハ、天晴御用立、御爲方ヲ奉存候段、申上候通、右御用途殘三千兩ハ、其儘被指置、孰も　御參府〻上、御願被遊、御備場御巡見も可被遊候ニ付、其節頂戴被仰付候ハヽ、御外聞御實用共、可然御儀ハ奉存候得共、此度御備場ニ可被差越御家中〻者共、未右樣〻

御憐愍筋御座候御儀も承知不仕、自然新御領分計御取扱宜敷相成、前後仕候ゟハ、却ゟ御家中〻人氣ニも拘り、御不爲ニも可相成ハ奉存候間、先此儀差扣不奉申上候、御武器要用〻品、數〻可有御座候得共、海岸御手當ニハ、第一鐵砲ヲ承り候ニ付、一万兩不殘鐵炮鑄立被　仰付候ハヽ、可然御儀ハ奉存候、尤一万兩ニゟ、御備場御鐵炮御手當御行屆ハ申ニハ無御座候得共、一時ニ一万兩御出し、御鐵炮御鑄立被　仰付候ハヽ、流石御大家ハ世上ニゟ申唱候樣可相成、

公邊ニハ御屆も出候事ニ付、御役人樣方ニも氣味能事ニ可被　思召、左候得ハ、花實共ニ宜御儀ハ奉存候、可相成ハ、最早御伺不被成、何卒壹万兩不殘鐵炮御用途ニ被　仰付候樣仕度奉存候、井上樣ニ不殘御賴ニ相成候得ハ、與力等被附置候御費用相懸り申候ニ付、外御鐵炮師、其外ニも上手〻鐵炮師御座候ニ付、右〻者共篤ハ御取調〻上、被　仰渡可然御儀ハ奉存候、此段申上候、以上、

弘化四年四月二十二日

拜領金ハ凡テ鐵砲鑄造ニ充當スベシ

弘化四年四月二十二日

四月十五日

岡　半介様

御城使中

山本傳八郎

〔彦根藩屆書〕○伯耆井伊直忠所藏本彦根藩備場記錄所載

○四月廿二日幕府へ

一御名内御聞置書　　壹　通

阿部伊勢守様御勝手ニ持参仕、御用人高木三太ニ、御備場御用ニ付、大筒鑄立方、井上左太夫様ニ御頼ニ付ゐ〻御聞置書〻趣申達、相渡候處、委細御承知被成候段、右同人を以被仰出候、以上、

四月廿二日　　山本運平

西内藏允様

一五貫目玉ホンヘン　　貳　挺

一三貫目玉筒　　壹　挺

一貳貫目玉筒　　貳　挺

一壹貫目玉筒　　五　挺

〆拾　挺

右ゝ、井伊掃部頭儀、今般相模國御備場御用ニ付、大筒書面〻通、井上左太夫様ニ、鑄立方

鐵砲鑄造ヲ依頼ス

御頼被申候、此段入御聞置候様被申付越候、以上、

四　月　　御名内

山本運平

幕府鐵炮方井上左太夫ヘノ注文書

○五月三日幕府へ

一御名内御聞置書　　壹　通

海岸御警備御月番牧野備前守様御勝手ニ持参仕、御用人名兒耶定之丞ニ、御備場御用ニ付、大筒鑄立方、井上左太夫様・田付主計様ニ御頼ニ付ゐゝ、御聞置書〻趣、申達、相渡候處、委細被御承知、慥ニ御落手被成候段、右同人を以被仰出候、此段申上候、以上、

五月三日　　安中半右衛門

土佐様

御聞置書左〻通、

一拾貫目玉狼煙筒　　壹　挺

一五貫目玉ホンヘン　　壹　挺

一貳貫目玉筒　　貳　挺

一壹貫目玉筒　　四　挺

弘化四年四月二十二日

同田付主計ヘノ注文書

弘化四年四月二十二日

一八百目玉筒　六挺
一五百目玉筒　六挺
一三百目玉筒　貳挺
一貳百目玉筒　壹挺

此分、井上左太夫様ニ鑄立御賴被申候、

一五貫目玉ホンヘン　壹挺
一貳貫目玉筒　壹挺
一壹貫目玉筒　壹挺
一五百目玉筒　貳挺
一三百目玉筒　四挺
一貳百目玉筒　七挺
一百目玉筒　壹挺
一貳拾目玉筒　貳拾挺
一貳匁玉筒　六拾貳挺

此分、田付主計様ニ鑄立御賴被申候、

〆百三拾挺

右ハ、御名今般相模國備場御用ニ付、大筒書面ゝ通、井上左太夫様・田村主計様ニ、鑄立御賴被申候、此段入御聞置候様被申付候、以上、

五月　御名内　安中半右衞門

三月三日　井伊掃部頭　家來

〔彥根藩伺書〕○内閣記錄課所藏本　諸用留所載

○三月三日幕府へ

掃部頭此度御備場御用ニ付る追ゝ多分ゝ鐵炮指下度儀ニ付伺寫

井伊掃部頭、此度相模國御備場御用ニ付るハ、追ゝ多分ゝ鐵炮被指下度、依之御關所證文相願可被申候得共、指懸り候節ハ、指付相下ー可被申儀ハ可有御座候間、兼る御達置御座候様被致度、此段奉伺候、以上、

三月三日　井伊掃部頭内　山本運平

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

（朱書）
「四日出、即日持出、四月朔日、令附札持歸、宅ゟ留守居呼、安中半右衛門ゟ喜内渡之、」
○欄外朱書
書面鐵砲廻ー方ー儀、爲用意、兼ゐ差下候節ハ、各證文ー儀、可申聞候、尤異國船渡來も有之、急場ー節ハ、出格ー事ニ付、自分置證文を以、差下候樣相心得可申候、

〔彦根藩備場記錄〕○伯爵井伊直忠所藏本

三月十日

一御　證　文　貳　通

御用番
牧野備前守樣ニ持參仕、御用人菅沼助八郎ニ、彦根表ゟ江戸御屋敷ニ、鐵砲被差下候ニ付、御證文被差出候段、御口上取繕申達、相渡候處、委細被成御承知、御連印ー上、追ゐ御渡可被成旨、右同人を以被仰出候、以上、

三月十日　　吉　用　茂　助

岡　半　介　樣

覺

一鐵　砲　五　挺

鐵砲五挺今

但内

百　目　筒　貳　挺

拾　匁　筒　三　挺

右ゟ、從近江國彦根江戸屋敷迄、陸地差下申候、今切御關所無相違相通候樣、御裏印被成可被下候、以上、

弘化四年丁未二月十八日

阿部伊勢守殿
牧野備前守殿
青山下野守殿
戸田山城守殿

御　名御印御書判

切關所通過證ノ下附ヲ請フ

即日御裏書相濟、

表書ー鐵砲五挺、關所無相違可相通候、斷ゟ本文有之候、以上、

山　城　印
下　野　印
備　前　印

幕府許可ス

弘化四年四月二十二日

鐵砲百六拾三挺今切關所通過證ノ下附ヲ請フ

弘化四年四月二十二日　伊勢印

今切關所番中

覺

一鐵砲　百六拾三挺

但内

百目筒　貳挺
六拾目筒　壹挺
貳拾目筒　壹挺
四匁筒　百五拾挺
三匁八分筒　五挺
三匁筒　三挺

右之、從近江國彦根江戸屋敷迄、陸地差下申候、今切御關所無相違相通候樣、御裏印被成可被下候、以上、

弘化四丁未年二月廿五日

御名御印御書判

幕府許可ス

阿部伊勢守殿
牧野備前守殿
青山下野守殿
戸田山城守殿

即日御裏書相濟、御渡、

表書ゝ鐵砲百六拾三挺、關所無相違可相通候、斷之本文有之候、以上、

山城印
下野印
備前印
伊勢印

今切關所番中

四月十五日

一證　文　貳通

御用番戸田山城守樣に持參仕、御用人鳥居半太夫に、彦根表より鐵砲御差下ニ付、御證文ゝ趣、

弘化四年四月二十二日

弘化四年四月二十二日

御口上取繕申達、相渡候處、委細被成御承知、追る御連印こ上、御渡可被成旨、右同人を以被仰出候、以上、

四月十五日　　杉原重之進

岡半介様

覺

一鐵砲　三拾四挺

但内

四百目筒　壹挺
三百目筒　壹挺
拾匁筒　壹挺
四匁筒　三拾挺
三匁筒　壹挺

鐵砲三十四挺今切關所通過ノ下附ヲ請フ

右ゝ、從近江國彦根江戸屋敷迄、陸地差下申候、今切御關所無相違相通候樣、御裏印被成可被下候、以上、

弘化四丁未年四月六日

阿部伊勢守殿
牧野備前守殿
青山下野守殿
戸田山城守殿

御　名御印御書判

覺

一鐵砲　三挺

五百目筒　壹挺
貳百目筒　壹挺
百目筒　壹挺

鐵砲三挺右同斷

右ゝ、從近江國彦根江戸屋敷迄、陸地差下申候、今切御關所無相違相通候樣、御裏印被成可被下候、以上、

弘化四年丁未年四月八日

阿部伊勢守殿

御　名御印御書判

翌日御裏書相濟、左こ通、

翌日御裏書相濟、左こ通、表書こ鐵砲三拾四挺、關所無相違可相通候、斷ゝ本文有之候、以上、

山城印
下野印
備前印
伊勢印

今切關所番中

弘化四年四月二十二日

牧野備前守殿
青山下野守殿
戸田山城守殿

表書ゝ鐵砲三挺、關所無相違可相通候、斷も本文有之候、以上、

山城印
下野印
備前印
伊勢印

今切關所番中

飯山藩へ領内震災救恤金トシテ金三千兩ヲ恩貸ス

二十三日壬申　幕府、飯山藩主本多助賢豐後守ニ、領邑震災ニ依り、金三千兩ヲ貸與ス。

〔愼德院殿御實紀〕○續德川實紀所載

四月廿三日、本多豐後守が所領信濃國飯山、地震によて亭宅大破、家中在町破損により、請ふまゝに金三千兩の恩貸あり、

〔老中達〕○内閣記錄課所藏本　弘化年錄所載

四月廿三日

領分地震ニ付、居城向其外及大破、可爲難儀ら被　思召候、依之金三千兩拜借被　仰付之、

右於波〻間、老中列座、山城守申渡之、

本多豐後守

（高麗環雜記　野口孝榮　弘化三丙午四丁未歲記）

〔老中達〕○帝國圖書寮所藏本　胡路護隔宣所載

此度大地震ニ付、拜借〻覺

四月廿三日

領分地震ニ付、居城住居向其外及大破、家中町在共悉破損ニ付、拜借〻義、相願候趣、達御聽、可爲難義と被思召、依之金三千兩拜借被　仰付之、

右於波之間、老中列坐、山城守申渡之、

○天弘錄・弘化年表・柳營秘書ニモ略々同一内容ノ記事アリ。

本多豐後守

（聞見錄）

二十四日癸酉　賀茂祭。

〔公卿補任〕

四月廿四日、賀茂祭、近衞府使左權少將政季（大宮）朝臣、傳奏橋本中納言（實久）、奉行光愛（御原）、

賀茂祭

〔大宮御所日記〕○宮内省圖書寮所藏本

四月廿四日、癸酉、陰、○中略、

一今日賀茂祭之、御内證御使、藤木主税大允相勤、

御撫物壹箱ッ、、御初尾金貳百疋ッ、御備〻事、右御使勤方、如例年、仍略之、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

弘化四年四月二十四日

四月廿四日、癸酉、陰晴不定、申初剋小雨、暫時晴、此日賀茂祭之、予申沙汰、仍寅半剋、着直衣、白生單、淺黄綾奴袴紋藤丸檜扇・帖帛如例、小雜色四人折烏帽子、萌木上下、黄單、差小刀、白張三人内一人持傘、召具參内、小時奉行右少辨參（柳原光愛）上、相共申沙汰雜事、卯終剋、於内侍所參内殿、少内記職孚自簾下奏　宣命、入筥、内侍取之奏聞、直内藏寮使助重國召簾下賜之、予・光愛朝臣等檢知之、小時使々參上、予・光愛朝臣奏之、

辰刻出御

辰初剋、　出御催、近衞使左權少將政季朝臣立弓場、舞人倍從相從、發物音、光愛朝臣出逢政季朝臣奏事由、光愛朝臣經上戸、候年中行事障子邊、小時　出御、予候詰如例、光愛朝臣召由（使カ）、次左少將朝臣經明義・仙花等門、降長橋居圓座、藏人二人居衝重、光愛朝臣勸盃、陪從發歌笛、進東庭舞求子、了大比禮返退出、次頭左中辨俊克（坊城）（宋書）四字不詳御袙自臺盤所簾下出之、被左少將朝臣、〻〻直降長橋、徒跣、進立東庭、拜舞了、着沓退去、次覽餝馬、置唐鞍、轆隨身二人引廻東庭、三匝、了小時進

進發

發催之、自右衞門陣整行列、先檢非違使、二人、次山城國介常敬、次内藏寮御幣、三棒、同史生、二人、次馬寮使左允、源友明、次琴持、次近衞使車、次舞人、六人、次近衞使左少將政季朝臣、僮僕風流等有別記、次陪從、六人、次内藏寮使助重國、參下御社、予・光愛朝臣進發之事近衞使申示、自右衞門陣退出、於清和院外檢知、各於此門外騎馬、渡了乘輿、在後列參御社、於下社先予・光愛朝臣等下輿參社頭、在御服所邊、次近衞使解除、了參進、陪從發歌笛、昇舞殿、解劍、兩段再拜、讀　宣命、了亦再拜、社司取幣參神前、返出傳神宣亦詞神祿等、了降殿被入休幕、次馬寮使引廻御馬、三匝、此後予・光愛朝臣等向宿所、近衞使東遊了被向宿所、午終剋上

讀宣命

御社催參向、小時各參向、予・光愛朝臣等先下輿參社頭、在土屋、近衞使參進、一如下社、但内藏寮使倍步參進、解除了直昇橋殿、作法一如下社、但奉納宣命、返詞後降殿、御馬之儀如下社、了予・光愛朝臣入休幕、近衞使東遊了被入休幕、申初剋、乘尻騎馬可下南仰社司、小時予・光愛朝臣出二鳥居、一鳥居内東方居兀床、使々各出二鳥居、次寮御馬向社頭馳、二疋、次宮本馬十二疋、同上、次予・光愛朝臣退出、直參内、付議奏祭禮無異了旨言上、付勾當掌侍申恭賀、次參殿下同上申入、了直歸家解齋了、于時酉初剋之、無異無事勤仕祝着之外無他、今日一會委有別記、

〔橋本實麗日記〕（東京帝國大學所藏本）

四月廿四日、癸酉、晴、未斜暫時小雨、今日賀茂祭也、近衞府使左少將政季朝臣、衣躰召具等色目別記、

〔野宮定功日記〕（宮内省圖書寮所藏本）

四月廿四日、癸酉、霽陰、　賀茂祭之、近衞使左權少將政季朝臣四十二才、尋常束帶、騎唐鞍、引馬倭鞍、僮僕色目未聞得、可尋、

〔勸修寺顯彰日記〕（孝明天皇紀所載）

四月廿四日、今日賀茂祭也、卯刻前參内、尋常束帶、召具供、傳奏奉行被參居、侍中各參集、卯半刻許、使以下御裝束、諸司各具傳奉被言上、先是宣命奏有之、於參臺殿附内侍被奏ト云々、少時被始之旨被仰出、直ニ出御

之旨也、早參各候南廊、奉行被候于鳴板邊、少時出御、（先是使被立弓場了、）動御簾奉行平伏、入上戸召使、使入明義・仙花等門、昇長橋絶間著圓座、次六位居前物、二、次奉行獻盃、六位取瓶子、此間陪從舞人等入同門進庭中、獻盃了奉行被候早參座、次舞、（求子、）訖舞人陪從等退入、次頭左中辨取勅祿賜使、（紅打袙、）使賜祿降長橋、（徒歩、）進庭中拜舞、訖經本路退入、次飾馬御覽、入同門牽立庭中、三匹之後牽退、次入御、早參各歸所了、

進發被催之後、各退出、同伴出清和院門、於門外（南方居胡床、）列見（如例、）列訖之後、分散歸宅了、巳刻許、

〔雅俗日簿〕（○山科言成日記　宮内省圖書寮所藏本）

四月廿四日、今日賀茂祭也、予前番惣詰、卯剋之、附惣詰帳了、雖曇天終日不降雨、近衛使（大宮左少將）政季朝臣闕腋（袴劍、）乘唐鞍（櫳隨身、一人狛杆干、一人反鼻、）引馬（櫳隨身、一人鴛鴦、一人菊閉、）隨身鑾繪（二藍末濃袴、）手振（麴塵褐冠、）馬副（紺褐、雜色蘇芳黃單、附櫻枝、）執物（同、白紅梅枝、）風流傘（白紅梅唐垣帽額附柳、）童二人（朽葉上下、附藤丸、不附物忌、）委細不及見、可尋記、

辰剋比出御簾中、（先之總詰候渡廊邊、零駕障子邊、）

使立弓場向于無名門、近衛發歌笛召御前、使參進、昇長橋一獻、舞人舞求子、了賜祿（袙一領、）使取之、進河竹臺邊、拜舞退出、次（乘科）餝馬御覽、（議奏伺定云々、了入御云々、）

辰刻出御

入御

〔萬里小路博房日記〕（○東京帝國大學所藏本）

四月廿四日、癸酉、曇天暑氣增長、　加茂祭、依當番御惣參仕、卯過奴袴著用、辰刻出　御、惣詰作于破禰馬外、入御〻後、入魂退出、（一人殘申合、）更參內、（午前、）當番御前御闘拜領小御所也、（御學問所依御修覆也、）

近衛使

老少將政季朝臣

內藏使

助　重　國（九條家宇鄕）

檢非違使

左少尉章甫（勢多）

舞人

右大志藤光敦（小佐治）

近　廣　好　良

則　賢　好　學

行　業　近　抽

傳奏　橋本中納言光愛

奉行

〔橋本實麗日記〕（○東京帝國大學所藏本）

弘化四年四月二十四日

二月一日、辛亥、晴、午後雨今日賀茂祭使〻被仰出云〻、近衛使左少將政季朝臣云〻、

二日、壬子、晴、大宮羽林被來謁之、賀茂祭使參向之間之事被示談、報所存旨、且家君(橋本實久)思召伺追〻可申入相答、且又彼朝臣九條家御門流之間、當家相談之事可被伺定旨、申入了、巳剋參內、當番也、直宿仕、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

四月一日、庚戌、晴、孟夏佳朔、幸甚〻〻、巳剋斗、參殿下亭、有申入子細、賀茂祭事之、次參內、今日賀茂祭勅祿勸盃人躰之事、予藏人辨相共伺之、飛鳥井中納言附之、勅祿不爲(司力)俊克朝臣、勸盃可爲光愛被仰下、其余申沙汰有之、委有別記、午剋斗、出御于御三間、御對面如例、依御學問所御修理之、未剋斗退出、參殿下亭、勅祿勸盃人躰被仰下事申入了、

石清水臨時祭勅使任命

二十五日甲戌　石清水臨時祭。特ニ外警ヲ祈禳ス。

〔公卿補任〕

四月廿五日、石清水臨時祭、相模國肥前國夷船來着、依之宣命被載辭別、使宰相中將(野宮定穀)、奉行愛長朝臣(甘露寺)、同夜、於社頭御神樂、

〔宣　命〕○宮內省圖書寮所藏本示羊記所載

宣命

同辭別

イ欄外朱書

宣命　有辭別、且依代始、加吉日良辰乎稱定氏之八字、○書業

天皇我詔止掛畏岐石清水尒御坐世留八幡大菩薩乃廣前尒恐美毛申賜倍止申久去天祿元年利與始天奉出給布宇都乃御幣乎吉日良辰乎擇定氏參議(イ、參議從二位行左近衛權中將)左近衛權中將藤原朝臣定祥乎差使氏令捧持氏東遊走馬調備氏奉出賜布掛畏岐大菩薩平久安久聞食氏天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐尒夜守尒日守尒護幸倍給比天下國家乎毛平久安久守幸賜倍止恐美毛申賜者久止申久近者相模國御浦郡浦賀乃沖尒夷乃船乃着波奴禮其來由乎尋留尒交易乎乞止奈牟申須夫交易波昔利與信乎不通留國尒濫尒許多万布古止者國體尒毛拘利奴禮波輙久許倍岐事尒毛非止許多万波須衣糧乎支濟給比舶船者飛帆天却還奴又肥前國尒毛來着奈牟奴止聞食須利乎貪留乃商旅加隙乎伺乃姦賊加情實乃知利難岐乎如何尒也波爲牟止寤天毛寐天毛忘多万布時奈志掛畏岐大菩薩此狀乎平久安久聞食氏再比來留止毛飛廉風乎起志陽侯(イ、侯)浪乎揚天速尒吹放知追退計攘給比除給比四海無異久天下靜謐尒寶祚長久久黎民快樂尒護幸給比恤助給倍止恐美毛申給波久止申

弘化四年四月

(イ、四月廿五日)

○イ欄外朱書　カセノカミ　見于日本紀　○晉飛廉　陽侯　神功皇后卷　業

〔示　羊　記〕○野宮定穀日記　宮內省圖書寮所藏本

四月廿六日、○中略、

弘化四年四月二十五日

(菅葉　橋本實麗日記　野宮定功日記　遠近橋　德大寺實堅武家傳奏記錄)

外患祈攘ノコト

去年イギリス船來舶、仍武家爲防禦備、其騷亂如戰國〻由、風說區也、然る無異散失了、雖然其應復（マヽ）〻間、又可來着歟、非無疑〻由聞之、仍今度被載辭別云〻、但此文躰非無不審者之、

〔野宮定功日記〕（○宮内省圖書寮所藏本）

四月廿六日、○中略、

宣命有辭別、其謂去、近年夷船來着、乞交易、不可濫許〻由令說得、乃雖引退、非交易而已〻事歟、隔旬月或一季屢來着海畔、英夷國〻船云〻、武家堅固雖致要害、不安堵〻間、被祈申也、抑此祭、文化再興以來、南北隔年被行之、去年依亮陰被停北祭〻間、今年北、明年南被行歟〻由、有沙汰、然る依件事早爲被祈申、先石清水祭被遂行之、宣命繼左大内記（桑原）爲政朝臣作（草〻寫之）進之、

〔示羊記〕（○野宮定祥日記　宮内省圖書寮所藏本）

四月廿五日、甲戌、天陰、自卯半剋許雨下、亥剋許休止、今日石清水臨時祭也、使參向〻事、去月蒙仰、依代始被用公卿、仍子剋出寢所修飾、了拜諸神（日來所奉拜之）、祈請使無異勤仕〻事、寅剋前着束帶、河鯖三位被刷、訖參内、入陽明・建春・宣陽・和德等門、經御後入無名門、出神仙門、自殿上西二間昇、先於沓脫下揖、沓隨身取之、不着座、出下戶、參便所、告參入〻由於頭辨、又向役所謁殘番（東坊藏人長）新相公、即入休所、

内〻番所南間、（實橋光成）新亞相（近衛忠熙）面會、問云、御禊〻時着殿上哉、予云、不着座、但自殿上可降也、又問、轉盞如何、予云、内府公御時宜伺定可治定之、亞相公・内府公御心得、使受盃飲了〻程、令目給、使參進於座前、飲之、更盛酒轉盞思食也、但此間右大將於被着垣下座之、可有煩〻間、右大將着座居衝重了〻後、使參進〻思食之云〻、爲兩說〻間、可爲此通答了、此卿爲門流〻間、所被尋問之、辰剋過出御〻旨、職事來告、即向殿上方、出下戶、自西二間降、隨身進沓、着沓揖、入神仙門、出無名門、向月花門南廊、庭中隨身擁傘、小時出御了云〻、即進弓場、東一間柱内、簾巡北、着御御禊御座、藏人頭献御笏、次供御贖物、此間〻事不見得、次宮主献大麻、御吻了返給、宮主給大麻、着庭中座、依雨儀、仁壽殿西簷下假設屋如例、次予入明義門、出仙花門、行事密〻示其期、經南殿北軒下、到假屋軒下北折、經御脇路間屈行、着圓座、自北方着之、先一揖、不脫沓、一揖引寄裾、次舞人引立御馬於長橋馬道、次宮主申祓詞、了宮主退出、次撤御贖物、陪膳頭愛長朝臣、役供（柳原）光愛、次予揖起座、不脫沓〻間、更不着、揖自左方進、跪案下插笏、但懷中、乍跪先取西幣、以左手取之、右手相添、置中、次取東幣、以右手取之、左手相添、置中、次三捧取束、以左右手捧持、如正笏、立兩案中央、向坤、次御拜、兩段再拜、訖乍捧持御幣跪、先三捧置中、次取一捧置東、次又一捧置西、了拔笏、左廻經本路退入、出明義門向南廊、次入御、此間内府忠熙公、元右大臣也、然る左大臣兄公、依所勞危急一昨日被辭申、替之、令奏宣命給、仍向弓場、行事示案内、立西一間西面、藏人藤原助胤告召由、即入無名門、到小板敷下經軒下參進、揖脫沓、懸左膝昇、刷裾候、北面、不揖、大臣座上也、大臣被氣色、受之昇長押上、大臣座上西面、一揖候、大臣賜宣命、以下方賜之、即置笏右、聊膝行、以左右

手取之、副身以左爲上、持退於初所、取副笏一揖、乍跪降長押、於小板敷上左廻、降着沓、小舍人可進沓於、然不直、一揖右廻、經本路出無名門、東面立、西一間、目行事藏人、〻〻進來、取放宣命、以左手賜之、藏人取之、退又入南廊休息、先是奉仕庭座御裝束、次出御、青色御袍、公卿參進、入仙華門、仍進立弓場先是行事藏人來告公卿進了後、東一間、藏人所座北依雨儀也、舞人立予西、陪從立月花門北廊北一間以南、北上東面、次行事藏人告召由、卽入明義・仙花等門、經長橋絕間・南殿北軒下、東行北折、經陪從座後、自同座北入兩座間、使舞人座与陪從座間也、自陪從座北入兩座中、南行到座後、前座南第一程、揖懸右膝、着座一揖、了引寄裾、次舞人・陪從・人長等着座、次一献、頭愛長朝臣着予座上氣色、予不逃足受之、飲了更入酒勸之、予置笏右、以左右手取盃、以右手取放盃、下居在左手、飲之、了棄澆濁、鹽器、更入酒傳一舞、有容朝臣、了取笏、初取盃時不氣色、依位色違也、此間愛長朝臣起座退入、陪從勸盃藏人左少辨顯彰、次二献、勸盃內大臣着予座上、自垣下座東被進、揖氣色、予逃右足受之、飲了更入酒被勸之、予置笏取之、飲了入酒傳一舞、有容朝臣受盃置帖上平伏、此間內府起座、被着垣下座、此後舞人以下起、揚盃巡行、予自初不動座、又不平伏、侍從胤保廣橋・陪從基安右野朝臣等依家禮降座後平伏、次內府前居衝重、次箸下、內府下箸給、予置笏、取匕立飯外方、取箸立同內方、更取箸入飯於汁器取上箸取副、食之、如形、了如舊返置立箸、此間陪從唱一歌、又置插頭臺長橋、次三献、右大將勸盃一如二献、但自垣下座西斜被進來、又勸盃、了被復壁下座、次置重坏圓座、使前一枚、四舞前一枚、陪從前一枚、次

重坏、予前新中納言藤大寺公純卿、四舞前右兵衛督持明院基延卿、陪從前俊克朝臣、訪慈頭左中辨、先新黃門氣色、予逃足受之、飲了入酒勸之、予拔箸取盃、飲了棄澆濁、更入酒傳一舞、四舞陪從同時勸之、一重了又勸之如初、了又勸之、予傳一舞、了直々足立箸、勸盃〻人起座〻後、可直足立箸於、三重了先令瓶子取退、次取殘坏押入圓座下、被起座起座〻時押破坏之、次內大臣起座、經南殿北軒下到長橋馬道、取插頭花、藤、來予前跪給、予拔箸直足低頭、大臣插予冠、不指得賜手、予以左右手取之、以左手取花本、以右手取花末、插冠左、然る不插得〻間懷中、了直足立箸、次〻賜了、先人長起座、自下蔀次第起座退入、予先拔箸、次拔匕、揖起座、乍跪着右沓左足踏地立、更着沓、揖右廻、經本路退入、出明義門向南廊、此間撤庭座御裝束、小時出御〻旨、行事藏人告之、卽進立弓場東一間柱內、舞人同立予西、陪從猶如先立北廊砌上、唱一二歌、次行事藏人告召由、于時歌未終〻間、待歌了進了、卽予氣色、陪從入明義・仙花等門、經南殿北軒下、東行北折、經御前間屈行、更西折立假屋乾方、委見指圖、立定揖引寄裾、陪從立其東、少退、人長立其末、又退立、各立定了舞人參進、舞駿河哥先是列立南殿軒下、西上北面、了退初所、右袒、更進舞求子、了退初所指紐退入、次陪從自下蔀退入、乍歌大比禮歌退入、次予揖右廻、經本路退入、經階下軒廊日花門廊等、出同門、向大臣宿休息、聊羞食、于時午剋前云〻、小時可進發旨、行事藏人催之、卽列建春門內、西上北面、密〻居胡床、先是於內侍所調急事、先內藏官人、次舞人、於匣小路以東騎馬、次予出建春・陽明等門、於大宮大路邊騎馬、先取袍前插之、懸平緒於劍柄、含露革於鍔、賜笏於馬副、〻〻懷中之、不露持、南行西折、於南門御覽〻間、其間副南築地令步、出坤角門、

俗稱蛤門、烏丸南行、到松原西行、於天神社止、御幣櫃自此所分散、於油小路南五條西山本世孺宅也、駄餉、未剋許云〻自此改着衣冠、奴袴・紅單・赤帷・柏夾、密〻乘輿、經四塚・烏羽・淀等、到八幡入高坊、于時秉燭程之、告參着〻由於執奏、廣橋、上下羞食〻後着束帶、此間一社傳奏告可參集宿院〻由、仍着了〻後催、僮僕入宿院北門、到南廊休所、于時舞人一人〻外無人、暫ゐ追〻參集、卽一社傳奏令從者立列、于時陪從兩三人雖不具、時已欲及亥〻間、所催云〻、一舞於南門外騎馬〻比、予出休所、於南門外騎馬、近年依程近雖不騎馬、今年代始〻間可騎云〻、到二鳥居下〻馬、馬繫宿院東馬繫所、經二鳥居・大坂・三鳥井・馬場等、到南門下手水、門下西邊主了入門、水司設之、先是內藏官人史生入樓門、舁居御幣櫃於舞殿南砌中央、金鑄士二了停立樓門下、依雨儀、人在後、雜色四人又在後、留石階下、自余從者止南門外、入樓門、副東、撿校以下出迎、門西方、相揖西面、〻後右廻、着東廊座兩揖如常、引寄裾、北面座、隨身一人自東門方廻來、直沓退、候南廊東方、次加陪從・所作陪從・人長等入南門、列立南外廊東方、舞人引立馬於南門下、次內藏官人參進、跪御幣櫃邊、史生取出御幣三捧、授官人、〻〻捧御幣、跪舞殿南第一間、社司來取之、安置幣殿中央八脚案上、近年使着東廊以前有此事、今夜亦同前、次掃部寮入東門、經東廊砌、敷宣命座於舞殿南第二間、退入、次神主捧官幣立北一間、此間撤幣殿案、次予揖起座、着沓立向揖、右廻西行、自舞殿南進、着宣命座、於座後脫沓、兩揖如常、安座引寄裾、先是主殿官人奉仕立明、翫殿南二間、東方北樋、內藏官人來座左方、奉宣命、予以左手取之取副笏、目官人、〻〻退下、次再拜、先拔足起、〻時先右足居時先左足、次插笏於左腋、以宣命如持笏右手持之、以左手插劍足緒間、次以左右手披宣命、當前披之、押合差上目程、更少引下讀之、

了卽卷整之、當前端一二折許〻程打懸左手、拔取笏、如初、取副宣命、起再拜、了安座、次召神主、不目前進來、如何、於座前左方、取放宣命、以左手取放之、笏猶持右手、以左手授之、文下方爲神主方、神主取之、參寶前、此間內藏官人取幣物、參神前、次神主藏官幣於內殿、次神主申反祝、拍手、予應之、先置笏於右方、不逃足、神主初度、了予拍之、次神主、次予拍之、今度打交了、天保度不然、指先ヲ合テ只掌ヲヤヲラ〳〵打、不令有音、了取笏揖起座、乍跪着右沓、左足踏地、立更着沓、揖左廻、經本路復東廊座、一如初、次陪從吹小調子、唱一二歌、此間舞人昇石階、列立東外廊、此間掃部寮撤宣命座、次加陪從一人入東門佇立、所作人吹駿河歌、次予揖起座、着沓立向、揖左廻、氣色于加陪從、經舞殿東砌上、立北一間、頗寄北、與柱平頭立、揖引寄裾、加陪從以下發駿河歌、經東廊砌上・舞殿砌上等、立予南、聊引退列立、次舞人進出、舞駿河舞、了退東外廊、右袒更進、舞求子、了退入廻廊東入東門、陪從爲先下蔦退入、經本路、次予揖左廻、經本路退、復東廊座、但密〻入東北廊休幕、次掃部寮敷神宴座於舞殿、次主殿官人率火炬師、參神前、舞殿北、炬火、次予出休幕、經砌并舞殿南、經神前間屈行〻、入南第一間入自西方、北行、經陪從座前、至座後揖脫沓着座、北第一東面、揖直足引寄裾、次舞人・陪從東西相對着座、西本東末、次召人相分着座、次人長着末方半帖、次掃部官人一人持膝突候砌上、次人長進神前、申可焚火由并可賜膝突由、主殿官人焚副火、掃部官人數膝突、次人長申令立男共才可試由、自稱唯、此間自下蔦起座、立東西廊砌上、一舞起座〻後、予揖起座、着沓揖右廻、經召人座南、立西廊砌上、東上北面、但密〻入休幕、次人長召笛、試了復座、次召篳篥、次召和琴、次召本末歌、各試了人長復座〻後、予復座、

先是密〻出休幕、次神宴、阿知女作法、採物、榊、韓神、早韓神、榊〻間人長進神前舞、〻了復座、次人長進神前、召才男共、先召予、其詞、マツリコトマウチ君左ノ近イマモリノツカサ、卽揖起座、着沓揖右廻、經初路到兩座中央、南方平伏、向神前了左廻復座、但不復座、便入休幕、次一舞、次行事藏人、次本末歌等也、早歌中間密〻復座、不兩揖、早歌了〻後、顧右不逃足、仰可奉仕星由於第一加陪從、基安朝臣、其詞、星ツカンマツレ、訖又密〻入休幕、于時天明也、朝倉〻間密〻復座、內〻起座復座等、各經西廻廊、其駒〻間人長進神前舞、〻了復座、次自下蔦起座、經本路退入、舞人出樓門、次予起座、兩揖如常、復東廊座、一如初、此間舞人馳御馬、馳了下馬、五石邊、列立南門外西方、北上、次陪從發歌笛、小調子、依雨儀於南門下發、予卽起座、兩揖如常、出樓門、立南門下、於此所懸裾於劍、陪從立南門下東西、唱山城歌、依雨儀也、了舞人進行、次人長、次予、雨儀無還列、然る依申行、人長列予前、陪從在後、到三鳥居、人長留在後、經大坂於二鳥居外騎馬、到宿院、南門外下馬入門、於東廊砌上立胡床、相待參集、各參集〻後、行事藏人告可分散由、卽出北門歸高坊、于時辰剋許也、

〔野宮定功日記〕○宮內省圖書寮所藏本

四月廿五日、甲戌、天陰、卯半許後雨灑、午半許後數降、入夜止、

是日石清水臨時祭也、依代始、及當月被擇吉辰者也、嚴君勅使〻事、去月蒙仰給、子剋御目覺、御修飭〻後御束帶、河鰭三位來臨、被裝之、了寅下剋許令參　內給、予先之沐浴、了着衣冠奴袴、相從參　內、隨身四人雜色四五輩奉相從、自余未合期、追可來集仰含了、自陽明・建春等門御參、廻承明門前、自虎間方令參內〻方給、先至藏人所、令告御參〻由於愛長朝臣給、其後御坐於休所、以內〻番衆所爲其所、于時舞人各參集、天曙〻比、庭座公卿以下濟〻參集、悉皆事具了云〻、良久無音、及辰剋有　出御催、先之雨始灑、仍御禊可爲雨儀、其後雨休ぬ、庭座可爲晴儀、若猶於雨下ぬ、勸盃限三献、不可及五献〻由、奉行觸之、是先例之、卽經渡廊入下戶、自殿上西二間、令降給、不令着座給、隨身進御沓、入神仙門、隨身相留、趨去持朱傘入月華門參弓場方、無名門等、自弓場方御南行、隨身擁御傘、至月華門南廊、於北第一間立胡床、敷毯代、其上立几床、懸豹皮、御坐〻東面、以南北上東面、舞人・陪從・人長等居胡床、內府以下公卿着殿上、此間主上着御々裝束、左金吾・八條參議、三位奉仕之、小時御服了有出御〻告、行事告之、嚴君卽令進立弓場給、東第一間柱內下御裾、御揖、隨身候南殿西軒下、一御馬引立於第三間軒下、與柱平頭、馬部取口、有容朝臣相副立、馬右方之、依雨儀狹少、御馬斗之、加陪從・所作陪從等列南殿西砌下、北上西面、小舍人舁御琴在上頭、久住立其前、次　出御、執柄褰御簾、着御々座、愛長朝臣供御笏、次供御贖物、愛長朝臣供之、次宮主入仙花門、就長橋東妻献大麻、愛長朝臣傳取献之、令御吻給、陪膳持退返給之、宮主給之着座、雨儀露臺代下構假屋、其中央南面立案、安御幣、北南面敷宮主圓座、其北寄東方南面敷使圓座、其次行事大江俊常進來告申、卽嚴君經明義・仙華等門長橋絕間等南殿北砌下東行、入於假屋、經御幣案東至圓座後、南面御一揖、懸右御膝、下脫沓給、着圓座給、御一揖、引寄裾、不安座給、次有容朝臣取御馬口、經同路引立、次宮主申祓詞、了退出、次引出御馬、次陪膳撤御贖物、次嚴君御一揖起座、又御一揖、乍着御沓、自左方進出、

御幣御拜

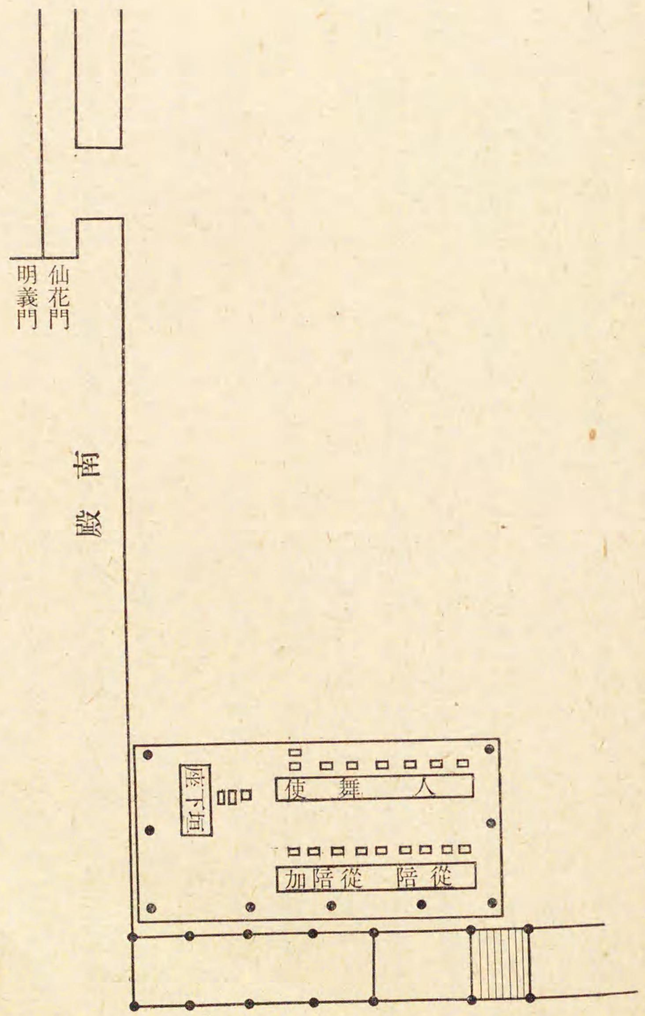
跪案下、插御笏、先西御幣、次東御幣等置中、次以左右御手取束三捧、捧持立給、次御拜兩段、再拜、此間陪從發物聲、御拜了嚴君跪置御幣三捧、次一捧如元置東、次一捧置西、了拔御笏、揖左廻、經本路御退入、令佇立於弓場邊給、須直歸於本所南廂給、然る宣命無程且泥中御往反有煩〻間、可佇立給〻旨、行事申〻故之、次愛長朝臣參進、

入御

賜御笏、次　入御、次所司撤御幣幷御座以下、此間內府以藏人藤原助胤召大內記爲政朝臣、仰可進宣命〻由、有辭別、載奥、卽進之、入筥、次以藤原助胤召愛長朝臣、　奏聞之、了返給、此間嚴君令立無名門外給、西一間奥柱平頭西面、次內府以藤原助胤召使、助胤出無名門告申、嚴君入無名門聊北行、青瑣門前、依雨儀之、更西折至小板敷下、御一揖脫御沓、昇小板敷繆御裾、御一揖北面候給、內府被氣色〻後、昇長押、內府座上巽方之、斜向乾給、繆御裾御一揖〻後、賜　宣命、置御笏、右方、聊御膝行、以左右御手取之、御膝退、取副御笏御一揖、降長押小板敷等、召御沓一揖右廻、經本路令立於無名門外西一間給、東面、行事大江俊常進寄、卽取放　宣命、以御左手賜之、行事賜之退去、於西二間邊召內藏官人預之、了嚴君至月華門南廊御休息、次內府召內記返給筥、此間所司奉仕庭座御裝束、于時雨猶洒〻間、雨儀御裝束之、此間　主上着御々裝束、高倉前亞相（永雅）・大藏卿（豐岡治資）等奉仕之、長朝臣供御插鞋、着御々倚子、次愛長朝臣出殿上、告召〻由、次內府以下公卿降殿上、經無名・明義・仙花等門、着壁下座、此後嚴君進立於弓場給、東一二間有藏人所座、令立其前之、內方給、依雨儀下御裾、無御揖、舞人立其以西軒下東上北面、陪從立南殿西砌下、北上西面、次愛長朝臣奉仰、出無名門告召由於行事、〻〻進來

再ビ出御

告申之、卽嚴君御參進、其路如御禊時、着庭中座給、假屋內、



賜宴一獻

經垣下大臣座後幷陪從座後幷北前等、至座後、一揖脫御沓、令着座給、一揖御安座、以左御手繆裾給、次舞人・陪從等參進着座、次一献、愛長朝臣取盃、立弓場二間、南面、取盃、藏人取傳之、具瓶子取、所衆、就嚴君御座上、氣色、嚴君不逃御足、受之給、愛長朝臣飲酒、更令盛酒勸之、嚴君逃御足、置御笏、右方、以左右御手取之、不氣色於一舞給、以右御手取盞、尻居在左御手、令飲之給、棄澆濁於鹽器、令盛酒、瓶子取自御後右方酌之、載尻居、以兩手授一舞給、聊居向給、取笏直御足給、愛長朝臣退去、舞人次第流盃、資宗(日野)取盃、立弓場三間取之、與愛長朝臣相連參進、着陪從座上勸之、進退同愛長朝臣、次第流盃了、次二献、內府起壁下座、家禮人先之起座、出明義門、出兩門、立弓場二間、藏人所座前、南面、光愛立三間柱下、北面、勳光(裏松)立其次、西之、北面、政季(大宮)朝臣立其次、北面、所衆又立其次、造酒司持來盃、光愛取之進內府、造酒司進瓶子於勳光、又進盃於政季朝臣、酒部授瓶子於所衆、次內府被目於勳光、相具參進、就嚴君御座上、舞人以下低頭致禮、家禮人降座平伏、被勸之、其儀如一献、政季朝臣就陪從座上勸之、各次第流盃、嚴君令傳於一舞給〻後、內府被着垣下座、北面、次長說(清岡)居衝重二合於內府前、於弓場受之、內藏寮史生傳之、依雨儀、執柄不着垣下座給、次內府箸下、不被目、嚴君以下應之、先置御笏、右方、取匕立飯外方、伏之、次取箸、立飯前右方、更取箸、入飯於汁器、取上之、取副箸、令喰之給、如形了、如元立箸給、此後不令取笏給、次陪從發物聲、此間藏人藤原助胤立插頭花臺於長橋東妻、內藏寮置弓場中間地上、卽取之參進、次三献、右大將起壁下座、出兩門、立弓場東一間、南面、長說立中間、北面、公總(花園)朝臣立其西、北面、所衆一人又立

三獻

挿頭花ヲ賜フ

入御

其西、北面、次藤原助胤進盃於右大將、造酒司史生傳之、造酒司進瓶子於長說、同司取盃進公總朝臣、酒部取瓶子授所衆、次右大將引率長說、參進勸嚴君、公總朝臣勸陪從、其儀如一二献、拔箸逃御足受之給、令飲給、了直御足立箸、依雨儀無轉盞〻儀、勸了幕下復壁下座、依雨儀不着垣下座、代始可有四献五献、依雨儀被停之、次敷重盃料圓座三枚、使前出納敷之、第四舞前・加陪從前等所衆敷之、次賜重盃、(德大寺公純)新中納言起壁下座、出兩門、立弓場東一間、右兵衞督同起座、出來立同二間、俊克朝臣立同三間、以上各南面、勳光・長說・所衆等立三間以西、各北面、藏人取重盃、土器、進於黃門・武衞・貫首等、造酒司史生傳之、造酒司取瓶子、進於勳光・從前圓座、勸之、其儀如三献、三重了瓶子取退去、次黃門以下勸盃人起座、殘〻土器入圓座下、起サマニ破之如例、退去、兩卿復壁下座、次顯彰(勸修寺)就插頭花臺下賦之、內府拔箸匕起座、舞人以下禮節如初、家禮公卿先出弓場如初、跪顯彰傍、受藤花歸進、至嚴君御座前、拔箸逃御足、差出御頭給、不令取笏給、被插御冠、不得插之、賜御手、嚴君御手自插之給、又不得插給、被入御懷中、了直御足立箸、內府退去、經兩門・無名門等、復殿上給、次右大將以下平宰相等次第起座、受櫻花賜舞人、不經座後、經使前至其人前、了復殿上、但內府以下密入內〻方休息、次顯彰取束山吹花、賜第一加陪從、了退去、陪從次第相傳賜之、次人長起座退去、於弓場內藏官人賜挿頭花、山吹、次陪從、次舞人各爲先下蔭、退去、次嚴君拔箸、次拔匕、共置箸臺、取御笏、一揖御起座、乍跪召御沓、一揖右廻、經本路御退去、次　入御、嚴君於本所居胡床御休息、予奉挿御挿頭花御巾

三度ヒ出御

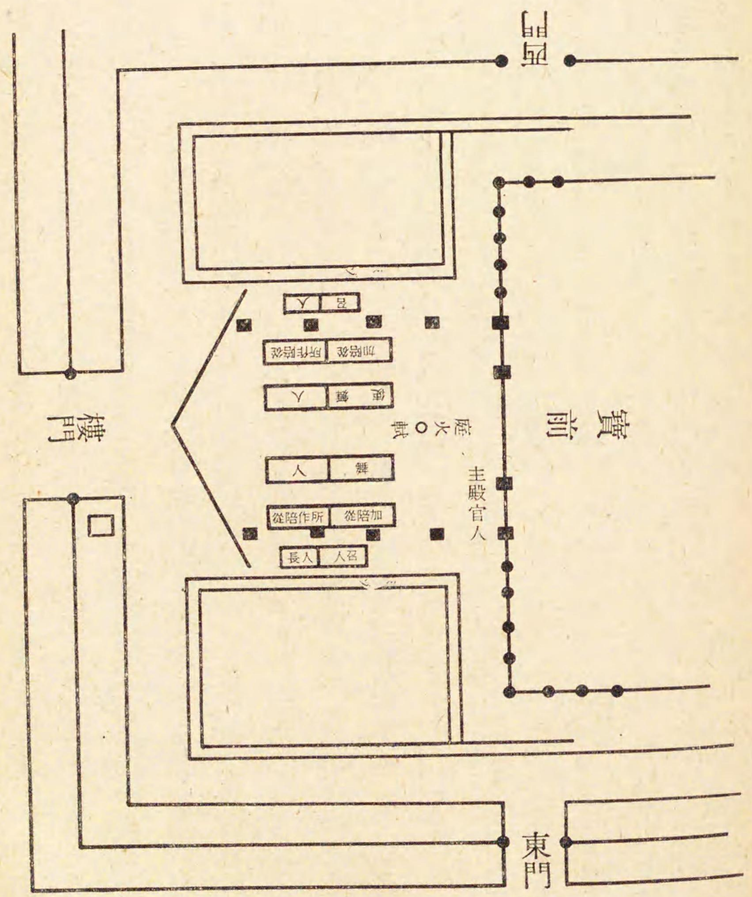
子左方、指于揚緒、密〻以糸綴付之、此間所司奉仕舞御覽御裝束、小時更　出御、執柄以下公卿自上戸參進、着御前圓座、貫首以下侍臣入明義・仙花等門、着壁下座、此間嚴君令進立弓場給、如御禊時、陪從列立於月華門北廊砌上、北上東面、御琴在上頭、舞人群立其南邊、廊內、如何須進立於弓場之、違本儀〻間、予趨寄問之、有容朝臣云、糸鞋泥中難步行、且廊砌上陪從列立〻故、難通行、仍陪從參進〻後、經砌上可向弓場者、次陪從發哥笛、次愛長朝臣奉仰、出兩門、告召由於行事、〻〻來嚴君御前告之、于時陪從一二歌唱了、卽嚴君率陪從、乍唱參進、琴在第一、御　入兩門御參進、其路如初、於御路御屏行、令立於假屋內乾角給、南面立定御一揖、跪ゐ令繕御裾給、陪從列立以東、加陪從一列、所作陪從一列、並西上南面、次舞人二人相並、於弓場結替、經同路參進、列立於假屋內南頭、西上北面、八拍子〻後、進出中央、假屋內上首立南、舞駿河、舞了退於初所、南面跪袒褐、右、北面立直、次再進出、今度上首立北、舞求子、了退於初所、南面跪指紐、了北面立直、陪從發大比禮〻間、舞人自下蔦退去、次陪從乍反大比禮哥退出、爲先下蔦、次嚴君一揖左廻、經本路御退出、次　入御、次公卿退出、嚴君直經階下、隨身四人出相從、日花門、向大臣宿所御休息、先之舞人皆至此所休息、開破子、奉羞食、親昵人〻來訪被世話、予同羞食、了御出於內侍所、被整急事、河鰭三位被來被刷御衣裳、懸御裾於劍、小時一會列奉行來、催進發、于時未許怒、舞人列於建春門內南邊、西上北面、御馬一〻在傍、嚴君令列上頭給、頗西隅宣陽門代土戸際之、隨身馬副雜色取物舍人等在其後、轆居飼舍人等在陽明門外馬傍、立胡床、御坐之、結御表袴、雨數降深泥甚難澁、于時早內藏寮六位舞人等騎馬進行〻程

勅使行列

之、舞人爲先下蔦、出建春門、於陽明門內匣小路以東、騎馬進行、了嚴君出建春門、經匣路上給、隨身猶擁御傘、僮僕經匣路北、陽明門等、二三許丈猶御東行令留給、馬牽來此所、自今朝引入於白川家門內、令繫之、兼日令入魂於彼家、爲令不驚逸之、進發催〻程、引出、立陽明門外南腋去東一許丈北向引立之、撤鞍覆、懸居飼左肩、結右脇、賜御笏於第一馬副、不露持入懷中、懸平緒垂於御劍柄、挿御袍前、脫淺沓御騎馬、予奉着御靴、御騎馬以前、可令着改之給、然ゐ深泥不便〻間、存略儀、密〻此時令着給、御騎馬〻場所本儀大宮大路之、然去折南三四許丈御南行〻後、當時人宿〻邊、可令騎馬給、深泥一步も御步行難儀〻間、雖不叶古儀、密〻早令騎馬給了、有心人見聞定嘲哢者歟、走雜色二人前行、市女笠、次轆隨身上首左府生藤原武職取上手綱、在御馬右方、手笠、下蔦右府生身人部淸廣取下手在左方、手笠、次御馬、不令着履、於蛤門外可着緒履、次居飼、在右方、市女笠、舍人、在左方、手笠、插御鞭、如刀崔左腰、次馬副六人、二行、手笠、次隨身四人、二行、手笠、上首相副御馬左、奉擁傘、出蛤門後、白丁奉指之、又隨身遠路淺沓難儀〻故、自蛤門外令着藁沓、次雜色、二人相並、三重行、手笠、寂末者持御淺沓、但密〻入笠籠了、次取物舍人、四人相並、右第一菅傘、白丁一人相副共之、第二雨衣、第三行縢、第四深沓等持之、各手笠、雨儀撤物具〻由見舊記、然ゐ全忘却、是麁忽甚之、片手持笠、片手持物具、其躰殊見苦於、後悔〻、次列外白丁六人、一人持胡床、但用几床、一人掛豹皮於左肩、一人持毬代、但經　御覽所前〻間、步道傍、南、又此間着市女笠〻者皆撤之、自余雜具悉自閑道令廻蛤門外之、令進行給〻後、予乘輿、陽明門通北行、朔平門前西行、大宮御門前南行、自宜秋門前西行、出中立賣門、烏丸南行至蛤門外、于時列未出終、仍暫相待、行列悉進行〻後、追從列末、烏丸南行、松原西行、到西洞院、於天使社邊分散、赴油小路五條或人宅、醫師山本永吉、休息、嚴君脫御束帶、令改御衣冠柏夾給、注奥、開破子、上下羞

食〻後、御乘輿、網代、令出立給、油小路南行、西折至東寺門前、更南行、羅城門前西行、自四塚鳥羽街道南行、通行淀領内、淀川橋三ヶ所、去年洪水〻時及破壞未修造、仍乘船渡之、於神幸道半途秉燭、酉許着宿坊高坊、家僕二人、今朝發足罷向、調備諸事、以使節告御到着〻由於執奏許、（廣橋光成）新亞相（基忠）參向、息拾遺舞人（公遠）向、皆在大乘院、上下羞食、其後河鰭三品來臨、息拾遺舞人參向〻間、爲見訪被參向、在拾遺宿所、被裝御衣裳、戌許宮本告申事具〻由、卽出高坊、先之雨止了、於門外御乘馬、走雜色二人持箱提灯、馬副四人・隨身四人取松明在御前、馬副二人取松明在御後、雜色兩三又取松明、至宿院北門前、御下馬、此後轡馬副・居飼・舍人等副御馬、廻東廊外、至南門外邊、入北門、隨身雜色等相從入、經頓宮、東斜到南門西廊、立胡床御坐之、廊東一間之、北面、依雨儀廊内板敷上、作御淺沓昇給、隨身雜色等在砌上邊、舞人以下在其以西、陪從并地下官人等及西廊之、每柱注其人名、執奏新亞相在南門東廊、令從者催登山〻儀、了被登山、次出南門、行列、先御幣、官人相從、次和琴、次舞人、爲先下蔦、於門外騎馬、次嚴君、同於南門外御騎馬、列如北門外、南行、經絹屋殿東、至二鳥居前御下馬、此後馬引歸初所、轡馬副等皆歸高坊、明日早旦可來集於此所仰含了、經二鳥居・大坂・三鳥居自此所隨身〻外雜色以下傍行、馬場等、雨儀、御馬不引入南門内、馬部引立於南門前、仍舞人群立馬場邊、西邊經其前令進行給、內藏官人・史生入樓門、令衞士二人舁居御幣櫃舞殿南砌中央、舁居了各退下、佇立樓門階下東邊、陪從入南門、舁東門前石階砌上、南行折西、立樓門東外廊、北上西面重行、吹調子唱一二歌、依用殿上和琴、所作人立位次、小舍人二人舁之、先之執奏新亞相着東回廊座、南第一間、次嚴君於南門西掖軒下御手水、晴儀五石北邊之、主水司役之、次入南門、經敷石上北行、隨身猶取松明相從、舁石階、隨身留石階下、下御裾、入樓門、撿校以下出迎、令對揖給、了右廻、至東廊西一門、御一揖脫沓、懸膝舁板敷御着座、自前居廻給、御一揖安座、繆裾給、此間予誘引隨身、入東門令候閑所、東回廊砌上、隨身一人參進直御沓、此間馬部引御馬、列立南門外、內藏官人入樓門參進跪、史生取出御幣三捧、授官人、官人東面、史生西面、官人捧之、參進跪舞殿南第一間、社司來取之、安幣殿中央八脚案上、傳了官人退、跪南砌、令舁退辛櫃〻後、立門外壇上、次掃部寮自東門方進來、經東廊砌上、敷宣命座於舞殿南第二間、主殿官人取松明立東西砌、次神主捧官幣、立北一間、東方斜向神前、此間社司撤案、次嚴君一揖御起座、降板敷、召御沓、左廻歸向、一揖右廻、西行御參進、令着座給、進宣命、受之令取副於笏給、進宣命了官人出樓門退下、此間馬部引立御馬於南門外、不見及、次嚴君逃御足、起御再拜、次插御笏、左御腋、以兩手披宣命、押合差上、當御目程、更聊引下令讀之給、此間撿校以下降座、宣命有辭別、子細注奥、了卷整、拔取御笏、如初令取副給、起御再拜、了直御足給、次神主藏官幣於內殿、次嚴君召神主、〻〻進來御座前、以左御手取放宣命、授之給、神主參寶前、此間內藏官人進案下、取幣物參神前、不見及、次神主歸出、申反祝、此間舞人昇石階折東、列立東外廊砌上、不見及、拍手、嚴君先置御笏、應之給、二度、不令有音、ヤ了令取笏給、神主退去、次御起座、兩揖如初、隨身參進、直御沓如初、次掃部寮撤宣命座、此間加陪從・所作陪從等入東門、立東回廊砌上、社頭巽方、發駿河歌、次嚴君御起座、兩揖如初、御氣色於第一加陪從、西行折北、經舞殿柱外北行、令進立於北一間砌上給、西面、立定御一揖、令引寄裾給、次加陪從・所作陪從等乍歌經廊砌上・舞殿柱外等、立其次、北上西面、八拍子〻後、舞人二人相並、入樓門、

進立舞殿、上首立西、舞駿河舞、了自上首退、立初所、右袒再參進、今度上首立東、舞求子、了退出、立初所指紐、了入東門、向東北廊休幕、次陪從爲先下蔦、經本路退去、同向東北廊休幕、次嚴君一揖、經本廊并東廊砌上、令入於東門以北〻廊內休幕給、隨身雜色侍候、予相從入此所休息、開劃子補徒然、宮本辨備湯茶煙草盆、次掃部寮敷神宴座於舞殿本末相分、北上相對、本座西方之、主殿官人着軾、焚庭火、次嚴君出休幕、經廊砌上舞殿南、造合間之、雖神前隔庭火〻間、不及平伏云〻、但御屈身令渡給、自西方入南一間、經陪從座前北行、令着本座上頭給、至座後一揖、脫御沓着座、一揖〻後安坐、繕裾給、東面、次舞人陪從次第相分一舞在末、着座、次召人相分着、本末各二人、次人長着末方座末、半帖、次人長起座、自舞殿南方、經使舞人前、進立庭火前、仰云、トノモツカサ〳〵、御火白ク奉レ、主殿微唯加薪、次人長申令立男共可試才由、自微唯、次使以下召人等爲先下蔦起座、退立於東西廊砌上、樓門內東西脇之、嚴君御兩揖如初御起座、經陪從座前・南一間等、出於砌上南行、令立樓門西廊給、此後密經西廊北廊等砌、令入休幕給、次人長仰云、カモツカサ〳〵、膝突タマヘ、オノコメス、掃部寮微唯、先之持軾候東廊砌上、持參軾、敷庭火前、次人長召笛、(山井)景典參進着軾、所作了令候本方、次召篳篥、季(安倍)良朝臣參進、同所作了令候末方、人長季資雖父子不禮、次召和琴、久(多)佳至東廊、自取和琴、先之小舍人二人舁和琴、置東廊西第二間、參進奉仕之、了令候本方、次召本歌、俊(綾小路)賢朝臣加陪從第一基安朝臣可爲本拍子、然る舞人俊賢朝臣依爲師家取本拍子、神樂二三首訖〻後、授基安朝臣、參進、奉仕了候本座、次召末歌、隆(鷲尾)賢朝臣參進、奉仕了候末座、此間嚴君出休幕、經西廊令立初所給、次人長申御神態可仕狀、自稱唯復座、次嚴君御復座、次舞人以下復座、次神



宴、阿知女作法・採物・榊・韓神等了人長立庭火前、召才男共、先召使、其詞マツリコトマウチキミ、左ノ近イマモリノツカサ、嚴君御起座、（兩揖如常）召御沓、經舞人座末、於兩座中央南方向神前御平伏、了左廻西行、又密經西廊入休幕御休息、次召一舞、次行事舞人、次召本末、皆名ヲ召、次人長復座、次小前張阿知女作法薦枕篠波、（依夜闌略此歌）次雜歌千歲早歌、此間嚴君御復座、（于時天曙）早歌了拔御足顧右方、仰可仕星〻由於基安朝臣、（其詞ホシツカマツレ、）了直御足、此後又密令入休幕給、次吉〻利〻得錢子（是又略之）、木綿作朝倉、此間嚴君御復座、次其駒等了陪從・召人・人長等起座、（爲先下萬）經東廊、出東門、次舞人（爲先下萬）、起座、出樓門・南門等、騎御馬、南行至三鳥居、陪從・人長等立南門下、（東西相分、相對立）此間嚴君御起座、（兩揖如初）令復東廊座給、（兩揖如初）次舞人向南門自上蔦馳御馬、了於五石邊下馬、列立南門外西方、北上、次一社傳奏立還列、先舞人、（爲先下萬）御馬一〻在前、次陪從發歌笛、小調子、次嚴君起東廊座、（兩揖如初）左廻、出樓門降石階、（懸御裾於劍、先之隨身出東門令候階下）令立南門下給、（陪從〻列〻中央）陪從歌山城、（依雨儀、三段皆於門下哥終）終舞人進行、次人長、次御使、（隨身四人從御後、自余僮僕傍行）次陪從等經馬場、出三鳥居、（此後人長相留加後列）經大坂、出二鳥居、於此外御騎馬、（先之儀馬副・居飼・舍人來集於此所）至南門外御下馬、入南門、令參會於宿院給、（初所、須叟廣橋侍從被告可退散〻由、即自北門御退出、令入於高坊給、于時辰半剋前、天霽陽烏現、

〔橋本實久日記〕（○東京帝國大學所藏本）

四月廿五日、甲戌、陰、辰剋後雨、此日石清水臨時祭之、（爲代始之間、被撰日時）卯剋斗着衣冠參內、小時日時勘文奉行頭右大辨愛長朝臣付內侍奏聞、辰剋斗有出御催、（予候詰）小時出御、於朝餉着御々服、（予內々候御前）陪從發歌笛、出御于廣廂、御禊、了使宰相中將定捧御幣、御拜等如例、事了入御、次內大臣忠於殿上被奏宣命草、（有辭別、近年東夷西戎入津乞交易之有聞、天下泰平之事被載宣命）御覽了返給、被仰清書、直清書奏聞、御覽了返給、內府召使宰相中將賜之、庭座御裝束了、（雨儀之間、露臺代軒下設座）此間着御靑色御袍、（予內々候御前）了出御、（關白年中行事障子邊被候）次召公卿內大臣以下、着壁下、次使・舞人以下參上如例、勸盃重抔等亦如例、（降雨之間、四五獻・傳盞等被止之、但重抔、新中納言・右兵衞督、使舞人等勸之）賜插頭花後退入、了入御、撤庭座御裝束、小時舞御覽出御、召公卿納言以上、候簀子圓座、參議候長橋圓座、次使率舞人參上、舞了大比禮返退出如例、午半剋斗使以下參社頭、予此後退出、直參桃花、元服習禮事有之、戌剋斗歸家、

今日使

宰相中將定祥（乘關白馬繼證身）

舞人

左少將有容朝臣　侍從俊賢朝臣　侍從胤保

侍從公達　藏人中務丞大江俊常（行事）　藏人左將監丹波賴永

陪　從

右京大夫基安朝臣　　左少將隆賢朝臣　　宮內少輔長延朝臣

加陪從

雅樂助季良朝臣　　左　將監景典　　左　將監久住

左　將曹忠彥

人　長

安　倍　季　資

參仕公卿

大　臣 政通公・忠熙公　大納言 家厚卿・忠香卿　中納言 言知卿・公純卿　參　議 基延卿・行弘卿

同殿上人 奉行 愛長・俊克・政季・公總・雄光等朝臣、顯彰・資宗・光愛・勳光・長說・源常德・藤原助胤

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

四月廿五日、甲戌、雨下、今日石清水臨時祭也、依代始被擇日時、被行今日、使宰相中將定、舞人左少將有容朝臣・侍從俊賢朝臣・侍從胤保・侍從公述・藏人中務大丞大江俊常・藏人典藥助丹波賴永、加陪從右京大夫基安朝臣・左少將隆賢朝臣・宮內少輔長延・隼人正俊、（有脫カ）理不及替云々、所作陪臣筆簗季良朝臣・笛景典・和琴ク住・付哥忠彥・人長安陪（倍カ）季資等云々、今日御禊已下有出御、庭座依雨

儀被止二献云々、又於社頭神宴之節、本拍子俊賢朝臣被取云々、依有舊例、爰日被申請云々、

今日散狀

公　卿

內大臣 忠凞　　右大將 家厚　　一條大納言殿　　山科中納言 言知

新中納言 公純　　右兵衛督 基延　　平宰相 行弘

殿上人

政季朝臣　　公聰朝臣　　雄光朝臣　　勳光

長　說

奉行職事　　愛長朝臣

使已下注先了、今日宣命有辭別ニ注了、

○示羊記・萬里小路博房日記・菅葉等ニモ略々同一內容ノ記事アリ。

〔萬里小路博房日記〕○東京帝國大學所藏本

四月廿五日、甲戌、陰雨終日、八幡臨時祭也、殘惣詰也、卯刻奴袴着用、辰刻過、御禊出御、惣詰同昨日、且門（內カ）府公御出迎也、御里齊之處、御斷申入、於建春門御出迎、經御後、門（內カ）ゝ方ニ御參向、巳下刻庭座被始、依代始五獻之處、依雨儀如平常、但重盃公卿人取之、舞

御覽、巳半刻過 被始、進發未一點、於建禮門西見物如例、未半刻退出、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記 宮內省圖書寮所藏本

四月廿五日、今日石清水臨時祭也、(山科言知)家公庭座公卿御出仕、予御禊御服奉仕、御前八條三位也、予、移鞍餝〻 義爺帶、丑半剋比參內、移鞍出役小林右馬允同剋出役 高倉家出役岡本主鈴云〻、家公寅剋前御參云〻、予參內、直謁于奉行、移鞍鍵受取、賜出役、此間移鞍唐櫃運送于諸大夫間云〻、令番頭代催促了、御禊料三疋分、一四五、先令餝立、拂曉御禊料餝立出來〻旨、屆于予、〻奉行ニ屆申了、(出納ニモ屆申云〻)家公・予等束帶了、家公尋常御束帶、丸鞠・沃懸地御劍、予御服〻間不帶劍、內藏頭移鞍見習參內了、移鞍、辰半剋前各餝立出來云〻、其旨屆于奉行、ヲモヅラ一六鎖、自餘餝ナリ、鞭三四用私鞭、無拜借云〻、○中略、從辰前剋降雨、辰剋過新宰相被出御服云〻、先之懸裾於上手、飛鳥井中納言誘引、先洗手、參常御殿、內侍被渡御服、夏御神事方、不被加青色、賜殿上人實愛朝臣、忠愛〻〻、於朝餉御服重替了、頃之出御云〻、八條三位・予等候渡廊、諸卿並使卿等着殿上云〻、頃之御服奉仕〻人被召御前云〻、予亂位次參進、御前卿被參御服奉仕了、予裾謬下、八條被懸畏了、奉仕了退去、候渡廊邊、此間使下殿、到弓場邊〻、出御廂御座、召使、〻參進着庭中座云〻、雨儀鋪設、作法雨儀云〻、御禊御拜等了、一舞率御馬云〻、依雨儀一舞已云〻、入御 宣命草清書等奏聞、被返下、上卿召使、〻昇小板敷、有沓揖云〻、上卿欲賜 宣命〻時、使昇長押賜之、依公卿之云〻、使賜之下殿、在揖云〻、出弓場、召

行事、下給 宣命、行事召出納賜之云〻、依公卿渡行事於、於殿上人使者直賜出納於、八條三位・予脫束帶、奉行依御用多、別段退出事、不被示、以前令沙汰、入御〻比、可脫束帶申入置、計程脫束帶退出、流例之、庭座御服高倉前大納言・大藏卿等候零駕障子〻邊云〻、頃之鋪設改云〻、庭座始、予密〻拜見、依雨儀、雖御代始三獻、作法如恒、重土器、使前新中納言公純、四舞人前右兵衛督基延、陪從前俊克朝臣、頭左中辨

雖公卿無揖、右兵衛督基延陽明御流、而重盃取盃被擬如何、陽明御流ハ欲取盃〻時、擬取盃、於重盃者如此、可尋、

了插頭、內府公令起垣下給〻時、舞人已下平伏、於使者無禮、依持 宣命云〻、插頭〻時、猶同斷、內府來使前、令插冠左給、藤、不得插〻間、令授手給云〻、左廻令退歸給、無揖、右大將・一條大納言等同內府、家公三舞人插頭櫻、冠右ニ令插給、以下各插之、各左廻退入、於平宰相ハ右廻退、如何、一說過御前右廻〻說雖有之、舞人十人〻時〻事於、當時舞人六人〻間、座不過御前、可爲左廻歟、可尋、使以下退出、爲先下萬、頃之舞御覽鋪設、 出御、召男共、先之諸卿着簀子座、參議着長橋、使參弓場、隨身擁傘立一間、陪從列立西廻廊、北上東面、一歌了召使、〻引率陪從、經明義・仙花等門、經軒下、南殿ノ北軒下、立假屋乾、有揖云〻、陪從參着、了舞人參進、駿河舞求子、大ビレ退出、陪從使等退出、休息便所云〻、午剋許進發、列見公卿、內府公・右大將・新中納言等云〻、予午剋過退出了、行列雖見及不慥覺、猶可尋記、

〔土山武宗日記〕○宮內省圖書寮所藏本

四月廿五日

一依御代始且異國船漂着、公卿　勅使、
　　野宮宰相中將定祥朝臣

〔武家傳奏達〕○東京帝國大學所藏本德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○四月二十六日京都所司代へ

昨廿五日、石清水臨時祭無滯被遂行候、仍申入候、以上、

四月廿六日

坊城――
德大寺――

酒井――

〔京都所司代通達書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○四月二十六日武家傳奏へ

昨廿五日、石清水臨時祭無滯被遂行候、仍被仰聞、致承知候、以上、

四月廿六日

德大寺――
坊城――

酒井――

〔示羊記〕○野宮定祥日記宮內省圖書寮所藏本

四月廿六日、乙亥、天晴、未下剋驟雨、小時止、辰下剋許上下食餌、了就歸路、經昨日〻路入五條世孺宅、羞食、于時午剋許了及未剋前歸家、直着衣冠奴袴參　內、向役所、以表使伺　天氣、了退出、次參大宮御方、伺御氣色、又參桃花・博陸等、伺御氣色、及未剋過歸家、降松堂前庭、不解衣冠、取笏敷半帖、拜春日社以下日來所拜諸神、祈謝無異勤仕〻事、抑予去月以來所惱難解熱〻所、去十四日推出仕、廿三日已來大暑如平日、殊當日今日等心神爽然、一事無違亂勤仕〻條、全神明加護仰ゐ猶有餘者也、○中略、

初右大臣被仰下、然ゐ兒左大臣自去十四日所惱、或腫物或疫症、其說不分明、到廿二日俄及危急云〻、仍廿三日被辭申、替內大臣被　仰下了、又俊有依同事辭申、替不被仰下、唱歌卒尔依非可傳習歟、』政季朝臣昨日勤仕祭使、今日勤庭座所役、連日尊卑相違、希有〻事也、昨日敕祿袙今日爲引倍木着用、有興事之、又雄光朝臣分配四献陪從勸盃也、然ゐ依雨儀爲三献且重坏公卿〻間、不勤一役、空着束帶參仕、不便〻事歟、

予裝束

冠　垂纓、冠掛紙捻、設揚緒、　袍　縫腋、古形轡唐草、　半臂　黑染薄物、三重菱紋、放襴、

下襲　裾長八尺、　表袴　固文藤丸、　赤帷

紅單衣　赤大口　飾劍（赤滑裝束、）
紫綾平緒（紋櫻、）　有文巡方帶（文雲、）　金魚袋
帖紙（白檀紙、）　笏（摸法性寺殿形、）　檜扇
襪　淺沓（騎馬〻時着靴、）

分散〻後幷歸京〻時

冠（柏夾、冠懸紙捻、）　縫腋袍　奴袴（薄色固文藤丸、）
赤帷　紅單衣　野劍（銀造、紫革裝束、）
鹿皮尻鞘（但密〻畧之、）　半靴

〔野宮定功日記〕（○宮內省圖書寮所藏本）

四月廿六日、乙亥、霽夕陽陰、暫時御休息、羞朝喰〻後、令着衣冠柏夾赤帷紅單奴袴給、巳前許御乘輿出高坊、令赴歸路給、予同乘輿相從、通行本道、午剋過歸京、至醫師山本宅、（自小枝至此所、御乘馬、）披割子羞食、上下各食餌、了出此家、未半許御歸館、一事無異、去月下旬以後御所勞、追日御減快、廿三日始御浴湯〻處、猶以御快復、心神殊御爽朗、令勤仕給、恐悅不斜、專神佛所加護也、可仰〻〻、予歸京〻旨以使屆德大寺許、（月番武傳、）昨日發足了時告其旨、（爾示舍僕了、）嚴君御發足御歸京等〻事不及相屆之、申前許嚴君（御奴袴、）參內大宮御方等、令伺御機嫌給、又御參博陸・桃華等御許、予切袴、申剋參內（議奏表使、）、大宮御方（御帳、）博陸・桃華等、小時歸宅、心氣疲勞如繩、（○中略、）

庭座公卿

右府依所勞一昨日理替、内大臣（忠照）　右大將（家厚）　一條大納言（忠香）　山科中納言（言知）
新中納言（公純）　右兵衞督（基延）　平宰相（行弘）

所役殿上人

政季朝臣　公總朝臣　雄光朝臣　勳光
長說　使

宰相中將殿

舞人

有容朝臣（左少將）　俊賢朝臣（侍從）　胤保（侍從）　公述（侍從）
大江俊常　丹波賴永

加陪從

基安朝臣（右京大夫）　隆賢朝臣（左少將）　長延朝臣（近衞家中川宮內少輔）

前日理、無替人、二條家
俊有　北小路隼人正

所作陪從

簞笥　安倍雅樂助　笛
季良朝臣　景典　山井左將監　久和琴
歌
忠彦　多左將曹　住　多左將監

人長

安倍季資　安倍右將監

〔武家傳奏達〕○東京帝國大學所藏本德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○正月三日京都所司代へ

印封

南北臨時祭〻儀、昨年十一月、賀茂臨時祭可被行處、諒闇年〻例ニゐ不被遂行、當三月、石清水臨時祭順年、尤諒闇終後〻事ニ候間、右樣〻舊例、於其筋御取調ニ相成候處、御代始〻節去、多分

御卽位後臨時祭被行候趣ニ候得共、　御卽位以前被行候例茂相見候故、兩例何ゟを可被採用哉、元來石清水臨時祭去、平將門亂逆〻事有之時、被退治〻後、爲報賽、朱雀天皇御代、天慶五年ゟ去毎年被行候處、中絶ニゐ御再興〻

儀、　光格天皇年來

御懇願、文化十年、御再興ニゐ、素〻亂逆治平を被祈候より相始候譯柄ニ候處、近頃異國船來〻儀も候、旁右祭式月無延引被行候方、於關東可爲御都合方ニ茂候ゟ、此段全其元迄及御示談候樣、關白殿被命候、且如例祭祀被遂行候方ゟ被存候去、右御用途繰合無差支候哉、及御相談候事、

正月三日

〔京都所司代通達書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○二月武家傳奏へ

南北臨時祭〻儀、昨年十一月、賀茂臨時祭可被行處、諒闇年〻例ニゐ不被行、當三月、石清水臨時祭順年、尤諒闇終後〻事ニ候間、右樣〻舊例、於其筋御取調ニ相成候處、御代始〻節去、多分

御卽位後臨時祭被行候趣ニ候得共、　御卽位以前被行候例茂相見候故、兩例何ゟを可被採用哉、近比異國船渡來〻儀茂候、旁右祭式月無延引被行候方、於關東可爲御都合方ニ茂候ゟ、祭祀被行方〻儀ニ付、關白殿被命候趣、且如例祭祀被遂行候方ゟ存候去、右御用途繰

即位前石清水臨時祭施行ノ理由

合無差支候哉〻旨、先達る被及御相談、則關東に相達候處、右御入用出方、差支ゑ無之候、尤祭祀被行方頃合〻儀、於關東何ゟ〻方ニ相成候ゑ御不都合〻儀ゟ無之候間、御所向御都合次第、當三月被行候ゑ不苦段、御兩卿に御達可申旨、年寄共より申越候事、

二　月

〔三條實萬日記〕○孝明天皇紀所載

弘化四年正月七日、當春石清水臨時祭、爲即位以前之間、不可被行、先例兩端云々、然而比年西洋船來著事之體、不穩之趣有沙汰、今雖屬靜謐、不慮之備可有之也、於件祭ハ根元將門亂虐之時、爲服賽被始行之者、今爲鎮護早可被行之歟、爲即位以前之間、不可爲代始之儀歟、猶以代始之儀、可爲公卿使歟、先此子細內々以所司代被尋于關東云々、然間今春可被行歟、內々示給旨、殿下被命了、於被行者爲代始、可被擇日次也者、可爲四月歟、執柄輕服三月中有其憚、御拜以下被奉扶持之儀、有其恐、每度及四月事爲例、然者及四月可被行歟之旨、同被命了、

〔武家傳奏達〕○東京帝國大學所藏本德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○三月五日京都所司代へ

就

御代始石清水臨時祭〻儀、

御即位以前候得共、賀茂祭以後被遂行候舊例候間、當四月、賀茂祭以後、石清水臨時祭可被遂行候、爲御心得申入候、以上、

三月五日

酒井——　坊城——

德大寺——

〔京都所司代通達書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○三月五日武家傳奏へ

就

御代始石清水臨時祭〻儀、

御即位以前候得共、賀茂祭以後被遂行候舊例候間、當四月、賀茂祭以後、石清水臨時祭可被遂行旨、爲心得被仰聞、致承知候、以上、

三月五日

酒井——

德大寺——

坊城——

〔示羊記〕○野宮定祥日記 宮内省圖書寮所藏本

三月七日、丙戌、天晴、○中略、石清水臨時祭使以下、同朝臣○甘露寺愛長朝臣、被伺、内覽濟由、以常丸上、後剋殿下御點〻通〻旨、令傳　仰給、同辨申渡了、伺條〻可爲如伺、以常丸被　仰出、同申渡了、

使

予　　俊賢朝臣　　胤保公述

舞人

有容朝臣　　俊賢朝臣　公述　丹波頼永等　有別願申上了

大江俊常　　丹波頼永

加陪從

基安朝臣　　隆賢朝臣　　長延朝臣　　俊有

公卿

右大臣　　右大將　　一條大納言　　山科中納言

新中納言　　右兵衛督　　平宰相

殿上人

政季朝臣　　通富朝臣　　雄光朝臣　　勳光

長說

所作陪從

季良朝臣　　景典　　久住忠彦

人長

安倍季資

等也、又臨時祭日時、内勘文御點〻通被仰出、清書勘文明日可申渡、執奏にも可申渡旨、殿下令傳仰給、頭辨申渡了、

來月廿五日甲戌　　時卯　自余日時略之、

又宣命可被載辭別、近年東夷西戎舶來入津請交易、以後無入津、四海無異、靜謐〻趣ヲ以、作進可申渡、同被命、同辨申渡了、殿下立后當朝舊例爺　宣旨〻日也、然る今度無令申慶賀給〻事、以舊例令伺給、以駿河言上、可爲伺〻通被申出、殿下申入了、

（生島朝子、御差）

四月一日、頭愛長朝臣送御教書云、

石清水臨時祭

弘化四年四月二十五日

弘化四年四月二十五日

使可令參向給者、依
天氣、執啓如件、
四月一日　　右大辨愛長
謹上宰相中將殿

懸紙云、

追執啓、可爲來廿五日、
剋限丑半剋可令參給候也、　　右大辨愛長

表裏云、

謹上宰相中將殿

卽送請文云、

石清水臨時祭
使可參向之狀、謹以所請如件、
四月一日　　參議定祥

禮紙云、

追申、可爲來廿五日、　　參議定祥

石清水臨時祭日時治定

剋限丑半剋可參仕〻旨、令存知候也、

表裏云、

請文　　參議定祥　上下捻之、不結之、

〔武家傳奏達〕○東京帝國大學所藏本德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○四月四日京都所司代へ
石清水臨時祭
來廿五日
右〻通、御治定被
仰出候、仍申入候、以上、
四月四日　　坊城
酒井　　德大寺

〔京都所司代通達書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○四月四日武家傳奏へ
石清水臨時祭
弘化四年四月二十五日

弘化四年四月二十五日

來廿五日

右〻通、御治定被

仰出候、仍被　仰聞、致承知候、以上、

四月四日　　酒井――

德大寺――

坊城――

〔示羊記〕○野宮定祥日記　宮內省圖書寮所藏本

四月四日、癸丑、天晴、　臨時祭騎用馬、可申請關白所存之、但於不被許之迷惑〻間、密〻令定功就式部少輔義脩朝臣、令內談〻處、內〻可申伺云〻、後時於申請之可借給時宜〻旨、以狀示送、仍直令定功參殿下、申請之、（爲念一紙令持參、）

石清水臨時祭使依　參向、御馬御隨身等拜借願存候事、

卽令義脩朝臣申入〻所、被對一條家被斟酌〻間、卒爾難被許容、當時院不御坐、桃花亦未大臣、旁無是非時節〻間、無左右可借給〻旨、有御返報、深謝申退出了〻旨、歸來申之了、今日定功向花山院〻間、此儀令噂了、

〔菅　葉〕○五條爲定日記　宮內省圖書寮所藏本

五條爲定由緒書

四月十日、己未、微雨、行于東坊城家、談柱下作進、

石清水臨時祭　宣命〻事、以使附由緒書于德大寺家、如左、

五條正三位式部大輔爲定　　未四十四歲

家領高百七拾貳石餘

內

五拾三石餘　山城國葛野郡　西京村

五斗三升餘　同國同郡　朱雀村

六拾石四斗貳升　同國同郡　御所〻內村

五拾石　山城國乙訓郡　鶏冠井村

八石　同國同郡　大山崎庄

一父　五條故少納言爲貴

一母　家女房

一祖父　五條故前大納言爲德

一祖母　廣橋故准大臣伊光女死

弘化四年四月二十五日

一室　廣橋大納言光成女死
一男子　壹人　紀伊大納言大上﨟綾小路
一女子　壹人
一同　東坊城宰相聰長
一叔父　新善法寺權僧正劭清室
一姑　東坊城從五位上夏長
一從父弟　青蓮院宮院家上乘院少僧都寶嚴
一同　貳人
一同　三人
一從父妹　寶鏡寺御室小上﨟建聖院
一同　大宮御所女中小式部局
一同

弘化四丁未年四月
德大寺大納言樣御內　五條式部大輔殿內
竹中外記印

物加波周防守殿
滋賀右馬大允殿
坊城前大納言樣御內
高須縫殿殿
山本將監殿

〔野宮定功日記〕○宮內省圖書寮所藏本

四月十六日、乙丑、快霽、臨時祭日爲奉相訪、可參向〻間、御暇〻事注一紙、辰斜向德大寺亭、武傳月番、謁雜掌、出之、宜預商量〻旨、請之、承諾云〻、次向坊城亭、同謁雜掌、宜商量〻事請之、一紙ハ屬德大寺〻由、述之、被諾了、

奉書紙四折美乃紙包

石淸水臨時祭參詣仕度存候、自來廿五日到廿六日、御暇〻事願度存候、宜預御沙汰候也、

四月十六日　定功

德大寺大納言殿
坊城前大納言殿

未半許德大寺以使招僕、被示渡云、參詣御暇〻事商量了、勝手可申願者、申前許參　內、向

議奏役所、申石清水參詣自來廿五日到廿六日御暇申請〻由、新相公(東坊城聰長)承諾、以表使可申願者、以表使附勾(梅園兄子)當內侍申請之、小時歸出、無御用可參詣〻旨、報之、次向役所、又謁新相公、屆依請被許〻由、了退出、向德大寺・坊城等亭、述謝詞、(不謁雜掌、言慥、)次向河鰭亭面謁、祭日御衣紋〻事請之、被領掌了、

〔示羊記〕○野宮定祥日記　宮內省圖書寮所藏本

四月十七日、丙寅、天晴、午剋過小白雨雷鳴、巳剋過詣護淨院、次向三條亭、謁三品(公睦)羽林・亞(實萬)相、臨時祭參向記借用〻事請之、亞相面會被許容、小時言談〻後歸家、

臨時祭習禮

四月十九日、戊辰、天陰、間陽烏迷現、朝〻間〻事商量、及午剋退出、午下剋參桃花(一條季)、臨時祭習禮也、如形習禮了、申下剋歸家、

臨時祭內見

四月廿二日、辛未、天晴、今日臨時祭內見之、仍巳剋許參內、告頭辨、候役所、午下剋許被始內見、了暫又候役所、小時社頭內見於南殿被行之、事了申剋過退出、

〔野宮定功日記〕○宮內省圖書寮所藏本

四月廿二日、辛未、天陰、巳許後霽、　是日臨時祭內見之、巳前許令參給、申許御退出、石清水參詣發輿歸京等日限、以一紙告武傳許、(出德大寺家、)

就石清水參詣、來廿五日發足、廿六日歸京候、仍御屆申入候也、

四月廿二日　　定功

德大寺大納言殿

坊城前大納言殿

〔武家傳奏達〕○東京帝國大學所藏本　德大寺實堅武家傳奏記錄(二條往來)所載

○四月二十四日京都所司代へ

臨時祭ニ付、石清水參向〻面〻幷公卿殿上人奉行職事等、別紙書付進之候、以上、

四月廿四日

酒井――　　坊城――

石清水臨時祭　　德大寺――

使

野宮宰相中將

舞人

六條少將
廣橋侍從
北小路極蔔
加陪從
石野右京大夫
中川宮內少輔
所作陪從
安倍雅樂助
多左近將監
人長
安倍右近將監
庭座公卿
近衛內大臣
一條大納言
德大寺中納言
綾小路侍從
河鰭侍從
小森丹藏人
鷲尾少將
山井左近將監
多左近將曹
花山院右大將
山科中納言
持明院右兵衛督

石井宰相
殿上人
甘露寺頭右大辨
大宮少將
三室戸右衛門佐
勸修寺左少辨
裏松左兵衛佐
細川差次藏人
奉行職事
甘露寺頭右大辨
以上
坊城頭左中辨
花園丹波權介
日野權右中辨
柳原右少辨
清岡大膳大夫
藤嶋新藏人
（朱書）「切ろム」
野宮宰相中將
六條少將
綾小路侍從

右〻面〻、明廿五日發足、廿六日可有歸京候事、

四月廿四日

石野右京大夫
鷲尾少將
廣橋侍從
河鰭侍從
北小路極藺
小森丹藏人
社傳奏
廣橋大納言

持明院右兵衞督
河鰭三位
野宮少將

右〻面〻、臨時祭ニ付、參詣〻御暇被申請、明廿五日、八幡ニ參向、廿六日、可有歸京候、爲御心得申入候、以上、

二條齊信辭任ノコト

二條齊信薨去廢朝三日

四月廿四日

酒井——

坊城——

德大寺——

二十六日乙亥 左大臣二條齊信從一位 當官及隨身兵仗ヲ辭ス。是日、薨ズ。廢朝三日。

〔公卿補任〕

左大臣從一位 藤齊信 六十四月廿六日、辭左大臣隨身兵仗等、

〔武家傳奏達〕○東京帝國大學所藏本德大寺實堅武家傳奏記錄(二條往來)所載

○四月二十六日京都所司代へ

二條前左府薨去〻旨、及披露候、依之從今日至明後廿八日三ヶ日〻間、廢朝候、爲御心得申入候、以上、

四月廿六日

酒井(若狹守殿)

坊城(前大納言)

德大寺(大納言)

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月二十六日禁裏附へ

明　樂（大炊守殿）　　德大寺――

內　藤（安房守殿）　　坊　城――

二條前左府殿薨去ゝ旨、及披露候、依之從今日至明後廿八日三ヶ日ゝ間、廢朝候、仍爲心得相達候、尤酒井若狹守（忠義、所司代）ゟ茂申達候、以上、

四月廿六日　　承知ゝ旨返書來ル、

〔京都所司代通達書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○四月二十六日武家傳奏へ

二條前左大臣殿就薨去、從今廿六日明後廿八日迄三ヶ日ゝ間、廢朝被

仰出候旨、被仰聞候、仍洛中洛外三ヶ日ゝ間、鳴物停止候樣、町奉行共ゟ申付候、爲御心得申進候、以上、

四月廿六日

德大寺――　　酒　井――

鳴物停止三日

坊　城――

〔禁裏附上申書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月二十六日武家傳奏へ

德大寺――　　明　樂――

坊　城――　　內　藤――

以手紙啓上仕候、然ゝ二條前左府殿薨去ニ付、（從脫カ）今日至明後廿八日、日數三日、鳴物停止、尤普請ゝ不苦候旨、酒井若狹守ゟ申越候ニ付、此段爲御承知申上候、以上、

四月廿六日

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月二十六日禁裏附へ

明　樂――　　德大寺――

內　藤――　　坊　城――

預示令披見候、然ゝ二條前左府殿薨去ニ付、今日より到明後廿八日、日數三日、鳴物停止、尤普請ゝ不苦候旨、酒井若狹守ゟ申來候ニ付、示ゝ趣令承知候、以上、

四月廿六日

〔禁裏附上申書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月二十七日武家傳奏へ

德大寺——　明樂——

坊城——　內藤——

以手紙啓上仕候、然ゝ二條前左府殿薨去ニ付、廢朝被　仰出候ニ付、酒井若狹守爲伺　御機嫌、參內可仕哉否、相伺可申旨、若狹守ゟ申越候ニ付、此段申上候、否貴報被仰知可被下候、以上、

四月廿七日

所司代天機奉伺ノ爲參內ノ可否ヲ問フ

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月二十八日禁裏附へ

德大寺——　明樂——

坊城——　內藤——

預示令披見候、然ゝ二條前左府殿薨去ニ付、廢朝被　仰出候ニ付、酒井若狹守爲伺　御機嫌、可被參內哉否、問合可被申入旨、若狹守ゟ申來候由、示ゝ趣令承知候、右ゝ參內不及候、此段可被申入候、以上、

參內ニ不及

四月廿八日

〔示羊記〕○野宮定祚日記　宮內省圖書寮所藏本

四月二十六日、乙亥、○中略、左大臣、今日被辭左大臣實去廿二日夜既及大事云ゝ、入夜有薨奏、卽自今夜廢朝三ヶ日ゝ旨觸來、

〔野宮定功日記〕○宮內省圖書寮所藏本

四月廿六日、乙亥、○中略、齊信公、今日被辭左大臣幷隨身兵仗等、入夜有薨奏、自今夜三ヶ日廢朝也、生年六十歲也、

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

四月廿六日、乙亥、陰晴不定、○中略、左大臣去十三日比ヨリ所勞ゝ處、此比ニ不令勝給、至今日大切ゝ由、依之左大臣隨身兵仗等被辭之、愛長朝臣奏之、予傳奏了、今夜宿仕、戌剋斗前左大臣今日申剋薨去ゝ旨、武傳卿被言上、予奏之、依之自今日至來廿八日、廢朝、可下御簾被仰下、武傳卿申傳、其余雜事申沙汰之、

〔橋本實麗日記〕○東京帝國大學所藏本

四月廿六日、乙亥、晴、左府終不叶養生薨去云ゝ、依之自今日三ヶ日、廢朝之旨、自番頭被示

了、

〔萬里小路博房日記〕○東京帝國大學所藏本

四月廿六日、乙亥、梅雨、夕霽、二條前左府薨去ニ付、自今日廢朝三日、

〔柳原隆光日記〕○宮內省圖書寮所藏本

四月廿六日、乙亥、晴陰、○中略、

齊信公辭左大臣隨身兵仗等、又明日諸司代（所司）酒井若狹守參　內被止、齊信公於薨奏、依可有廢朝歟、○中略、

一一條大納言息藤原實良、來廿八日可有元服之處、依齊信公薨去被延引、今日更來月二日被伺改云々、

晡時退出、依前左府齊信公薨去、自今日三ケ日被仰廢朝、

〔土山武宗日記〕○宮內省圖書寮所藏本

四月廿六日

一二條前左大臣殿薨去ニ付、從今廿六日至明後廿八日三ケ日〻間、廢　朝〻旨、被　仰出、

一同上ニ付、從今日三ケ日〻間、大宮御所被止物音候旨、被　仰出、

同月廿七日

一二條左府殿薨去ニ付、從今日明後廿八日マテ、日數三日、唱物停止、尤普請ハ不苦候旨、相觸候段、酒井若狹守殿被申越候段、御附衆被達觸有之、

〔菅　葉〕○五條爲定日記　宮內省圖書寮所藏本

四月廿七日、丙子、陰晴相交、午後遠雷數聲、欲雨不雨、自堤三位回文到來、就二條前左大臣薨去、從昨日三ケ日廢　朝〻旨、爲心得橋本中納言被申渡昨日、由被示、廢　朝〻義ヲ傳奏觸有之候間、當番心得ニ被申渡候事故、不及觸出旨、去冬議卿被示候間、予相番中ニヲ不觸出候、

〔日　記〕○福岡藩記錄　候爵黑田長禮所藏本

五月五日、雨、

△二條左府樣御違例〻處、先月廿六日薨去〻旨、御到來ニ付、左〻書付月番彥兵衞より大目付ニ相渡之、

二條左府樣御違例〻處、御養生不被爲叶、先月廿六日薨去〻旨、御到來有之候、右ハ殿樣御養母方御伯父〻御續ニ付、定式〻御忌服殘日數可被爲請〻處、長崎　御越座中〻儀ニ付、御承知〻上一日御遠慮被遊ニる可有之候、依之今

日ゟ左〻通停止〻事、

普請　三日

今五日より七日迄

鳴物　十日

今五日ゟ十四日迄

一就右中老御筋目番頭御次廻諸役人中、式日出仕〻面〻、今五日爲伺御機嫌出殿、御用人迄相伺可申候事、

一諸士勤休共左〻日限〻内、爲伺　御機嫌御館ニ罷出、御帳ニ付可申候事、

五月五日

同　六日

同　七日

右〻通、被相觸候事、

五月五日

今日及晩刻承知〻向ゟ、御機嫌伺今日不及出方、明日相伺候樣、可被申聞候、

竹内清太郎以下賞賜ノコト

二十八日丁丑　幕府、勘定組頭竹内清太郎（保德○後下野守）等ヲ相模・安房二國ニ派遣シテ、猿島（相模國三浦郡）・千駄崎（同上）・大房崎（安房國平郡）三砲臺築造ノ事ニ當ラシム。

是日、清太郎等、江戸ヲ發ス。

〔弘化年錄〕（○内閣記錄課所藏本）

四月廿四日

金三枚　時服三

金貳枚　時ふく貳ツ、

相模安房御備場御臺場目論見、其外爲御用罷越候ニ付、被下之、

右於御右筆部屋椽頰、伊勢守（阿部正弘、老中）申渡之、主膳正（大岡忠固、若年寄）侍座、

金貳拾兩

同斷ニ付被下之、

右於躑躅間、同人申渡之、侍座同前、

御勘定組頭　竹内清太郎

御勘定　小島礒之助

宮田菅太郎

御勘定吟味方改役並　石力勝之助

御徒目付組頭格

御徒目付

同拾兩　吉川一郎兵衛

同斷ニ付被下之、

右於同席、若年寄中出座、越中守申渡之、（本多忠徳、若年寄）

〔泰平年表嗣記〕（○帝國圖書館所藏本）

四月廿四日、御勘定組頭竹内清太郎金三枚時服二、御勘定小嶋礒之丞・宮田菅太郎金貳枚、時服二宛、御勘定吟味方改役並力石勝之助金貳拾兩、御徒目付組頭格御徒目付吉川一郎兵衛金拾兩、其外小役人、相模・安房御備場目論見、其外爲御用罷越候ニ付、御暇拜領物被仰付之、

〔彦根藩留守居上申書〕（○伯爵井伊直忠所藏本　御備場御達御尋御答留所載）

相房兩州臺場檢分ノ爲幕吏出張ス

○四月十四日同藩中老へ

一御勘定御奉行様・同御吟味役様・御目付様方、御城中ゝ口ニ御呼出ニ成、御勘定方并御徒目付・御小人目付衆出席、相州・房州御備場御臺場御見分御目論見、且御備場ニ引渡爲御用被相越候衆、別紙名前書壹通、御勘定宮田菅太郎殿被相渡候間、則懸御目申候、尤御請印仕候ニ付、御答等被　仰遣候ニて相及不申候御儀ヶ奉存候、

一右ニ付、出立ゝ頃合、内々承合候處、先凡當月廿八日頃ニも相成可申旨、被申聞候、此段申上候、以上、

四月十四日　山本運平（彦根藩留守居）

岡半介様（岡本半介、彦根藩中老）

別紙名前書左ゝ通、

相・房州御備場新規御臺場見分目論見并御備場引渡立合御用

御勘定組頭　竹内清太郎

御勘定　小嶋礒之丞　宮田菅太郎

同吟味方改役並　力石勝之助

同下役　鈴木鎌助

御普請役　上川傳一郎

相房兩州臺場檢分役人決定

〔川越藩城使書翰〕○前橋市立圖書館所藏本川越藩相州五番記錄所載

御城中〻口に御勘定奉行石河土佐守殿（政平）・松平河内守殿（近直）・御勘定吟味役佐々木脩輔殿（顯愛）・御目付松平式部少輔殿（近憲）・小出織部殿（英美）・御勘定吟味役羽田龍助殿（利見）より御呼出に付、罷出候處、御勘定宮田菅太郎殿・同吟味方改役並力石勝之助殿・御徒目付組頭格吉川一郎兵衛・御小人御目齋（付脫カ）藤茂八郎・大野平作御出席、別帋御書附菅太郎殿ゟ被渡之、

一右罷出候序、御勘定小嶋礒之丞殿・宮田菅太郎殿ゟ被申聞候と、當九日御達申候御拜借筒數玉目等取調〻義、未御出來不相成候哉、右御差出不相成候に付、御地所御引渡シ差出候間、早〻差出候樣被仰聞之候、

右〻通御座候、以上、

石川忠之助
御徒目付組頭格
吉川一郎兵衛
御小人目付
齋藤茂八郎
大野平作

四月十四日

相・房州御備場新規御臺場見分目論見幷御備場引渡立合御用

○以下人名前掲ト同樣ニ付キ之ヲ略ス。

四月

小笠原源次

幕吏出張ニ付出役格合ノコト

〔彥根藩城使上申書〕○伯爵井伊直忠所藏本御備場一卷留所載

○四月二十四日同藩中老へ

相州表御備場見分幷御臺場爲御目論見、御勘定方幷御目付、江戸表來ル廿八日出立、被相越候由に付、御徒目付吉川一郎兵衛に其節對談致シ候出役〻者、格合及問合候處、此方樣と御持場に可相成御臺場も御座候間、御物頭〻御格合に付壹人幷御留守居〻内に壹人出役致シ可然由被申聞候、右に付、御物頭壹人出役〻儀、御達御座候御儀と奉存候、御城使と彌五八出役先ゟ引歸シ相勤候樣、且御目付大筒方等も出役被致可然御儀と奉存候に付、是又見分先ゟ彌五八同樣引歸シ被相勤候樣、被仰渡候ハヽ可然哉と奉存候、御目付と別人被差越候方にも可有御座哉、猶御目付存寄も御尋御坐候ハヽ可然奉存候、此段申上候、以上、

留守居物頭各一名城使ハ中居彌五八

四月廿四日

西内藏允樣

御城使

弘化四年四月二十八日

〔彦根藩城使書翰〕○御備場一卷留所載

○四月二十四日同藩浦賀勤務城使中居彌五八宛

一浦賀表中居彌五八方ゟ左ゝ通、今便申遣ス、

以書付得御意候、然ゝ兼る御承知御座候御備場ゝ内、
此方様御持場ニ可相成御臺場御取建御目論見御見分爲御用、御勘定方・御目付方今日御暇
被仰出候ニ付、出立日附等承り合候處、來ル廿八日江戸表出立、別紙休泊附ゝ通、廻村有之
候趣ニ御座候、尤
此方様御臺場御目論見ゝ義ゝ、來月二日ゟ七日迄三崎町逗留被致候趣ニ付、其節
此方様ニゝ御持ゝ御臺場も有之候儀ニる、右場所ゝ義ニ付る御談も有之候間、御物頭ゝ
格合ニる壹人、御城使壹人位出役有之候方ゝ被存候由、被申聞候間、御物頭出役有之候得
ゝ、御目付幷大筒方も出役被致可然ゝ奉存候ニ付、其旨内藏允方ニ書上差出候、右ニ付、貴
様御儀幷御目付・大筒方共、乍御苦勞浦賀表ニ御引歸シ御出役御座候様、内藏允ゟ相達候
義ゝ奉存候、御物頭ゝ右日限迄ニ爰元出立、浦賀表大黑屋義兵衞方ニ旅宿致、御待合可申
手筈ニ可仕候、左様御承知可被下候、右ゝ段不取敢可得御意、如斯御座候、以上、

四月廿四日　　御同役

中居彌五八様

検分役人饗應ノコト

猶以本文ニ付、於場所御取扱筋等も御座候哉、得御意候様御申越ニ付、此度大和守様ニ
る、ゝ御取扱振り、承合候處、御出役中、於場所贈物御座候迄ニる、外ニ御取扱等無御座、
逗留ゝ振合ニ寄、輕御品ゝ贈方も可有之哉、其模様次第ゝ由申來候間、右御贈り物ゝ御
物頭被相越候節相頼、當方ゟ相廻シ可申間、大和守様衆御打合ゝ上、御取計御座候様致
度奉存候、輕キ品ゝ儀も若御取扱御座候ゝ如何様共、於其地御取計被下度候、右ゝ趣も
得御意候、以上、

検分役人ノ日程

四月		休	泊
廿八日	品川	川崎	
廿九日	程ヶ谷	金澤町屋村	
五月			
朔日	横須賀	浦賀	

通、

弘化四年四月二十八日

二日ゟ　七日迄　三崎町
八日ゟ十三日迄　浦賀
十四日　大津
十五日　竹ヶ岡
十六日　元名
十七日ゟ廿二日迄　一部村
廿三日　多々良村
廿四日　洲崎村
廿五日　多々良村
廿六日　一部村
廿七日　元名村
廿八日　竹岡村
廿九日　富津村
朔日　木更津村
二日　八幡村
三日　檢見川村
四日　新宿
五日　江戸著
六日

以上

〔勘定奉行達〕○伯耆井伊直忠所藏本御備場御達御答御尋留所載

○四月二十五日彥根藩へ

四月廿五日

一御勘定御行樣・同御吟味役樣・御目付樣ゟ御城中〻口ゟ御呼出之ゐ、御勘定方幷御徒目付・御小人目付衆出席、別紙御達書壹通、御口達覺書壹通、御勘定組頭竹内清太郎殿被相渡候間、則差上候、此段申上候、以上、

四月廿五日　御城使

西内藏允樣

御達左〻通、

臺場檢分ノ行程

相・房州新規御臺場見分目論見として、來ル廿八日江戸出立、五月朔日浦賀町著、翌二日より見分取懸、千駄崎・猿島目論見濟〻上、竹ヶ岡に渡海、大房崎見分濟、洲崎迄罷越、夫ゟ海岸通り陸路歸著〻積、日限〻義、於場所追々相達可申候事、

弘化四年四月二十八日

弘化四年四月二十八日
折表ニ
口達〻覺

御臺場取立方見込〻趣、於場所相尋可申候、御備場引渡頃合〻義ヶ、追ゐ御達可申候事、

出席名前左〻通、

御勘定組頭
竹内清太郎
御勘定
小島磯之丞
御勘定吟味方改役並
力石勝之助
御徒目付
吉川一郎兵衛
御小人目付
齋藤茂八郎
大野平作

〔彦根藩城使書翰〕○伯爵井伊直忠所藏本御備場一卷留所載

○四月二十六日同藩浦賀勤務城使中居彌五八宛

一四月廿六日立、浦賀表ニ〻御飛脚ニ、左〻通申遣ス、

以書付得御意候、然ヶ御備場〻内御臺場御目論見爲御見分、御勘定方・御目付方御越御座候段、御達御座候間、猶又彼地出役〻儀、於御城吉川一郎兵衛ニ承り合候處、昨日迄ハ御物頭も壹人出役有之可然趣、被申聞候處、今日御勘定方御打合有之候得ヶ、先此度ハ御臺場御目論見迄〻儀ニ付、彼地出役〻儀ヶ御城使壹人幷大筒方〻者壹人被相越候得ヶ宜候由、昨日〻評義ヶハ相違い〻ヶ候段、被申聞候間、御物頭・御目付ハ出役不及旨、内藏允方ニ申達置候、依之乍御苦勞貴樣幷大筒方〻衆御引返〻、御出役有之候樣仕度候、則今日御達〻御書付寫貳通御廻シ申候、將又御見分順〻御模樣承り合候處、來月朔日浦賀ニ著可致旨、同二日三崎町ニ被相越、是迄〻御臺場御見分、夫ゟ浦賀表ニ御立戻り、夫々御取調〻上、同七日迄〻内ニ千駄崎・猿島御見分御座候趣ニ御座候、右ニ付、來月朔日迄ニ浦賀表ニ御出張、御待合御座候得ヶ都合宜候由、被申聞候、猶内藏允方ゟ御達可有之候得共、右〻段可得御意、如斯御座候、以上、

幕吏出張ノ際出役ハ城使並ニ大筒方各一名ニ決定ス

檢分役人日程

四月廿六日　　御同役

中居彌五八樣

弘化四年四月二十八日

尚々本文〻儀ニ付ると、當方ゟ被相越候者無之故、於場所御贈物〻儀、則受取、飛脚〻者ニ相渡御廻申候間、御受取可被下候、尤干鯛一折も澁紙包ニ致シ、御廻申候得共、外様と御同様ニ御取扱、若代料等も御取計ニ御座候得と、其通御取扱可被下候、先右〻趣も得御意候、以上、

以別紙得御意候、然ゝ御出役先ニおゐて、俄ニ御贈方等御取扱御座候義も可有之哉と奉存候間、御振替を以、金子三拾兩受取御廻申候、御落手可被下候、右〻段も得御意候、以上、

御同役

四月廿六日

中居彌五八様

休泊

廿八日　品川川崎

廿九日　程ヶ谷　金澤町屋

朔日　横須賀　浦賀

二日ゟ七日迄　三崎町

下ケ札

此間承り候節、休泊附此通被申聞候處、昨日承り候ニと、二日一日三崎ゟ参り、直ニ翌日浦賀ニ立戻り被取調候趣、被申聞候、

八日ゟ十三日迄　浦賀

十四日　大津

依之少シ日割〻處、相違いと〻候間、爲念付札ニる得御意候、

別紙を以得御意候、然と一昨日も得御意候通、御足輕拾人〻内六人、彌今朝出立爲仕候間、其御地著〻上と、何角不都合無之樣奉願候、依之別紙名前書御廻シ申候間、乍御面倒改藏・操藏兩人〻内ニ御差出被下候樣致度、此段も得御意候、以上、

四月廿六日

中居彌五八様

御同役

名前書左〻通、

中村文内　末四十一歳
尾崎勘三郎　同三十六歳
村田榮三郎　同三十五歳
遠藤安次郎　同二十八歳
北村清太郎　同二十五歳
中澤宇三郎　同三十五歳

右ゝ通御座候、右ゝ内中村文内・尾崎勘三郎兩人ゝ者、取締申付置儀ニ御座候、

四　月

〔川越藩城使上申書〕○前橋市立圖書館所藏本川越藩相州五番記錄所載

○四月二十五日同藩家老へ

一從江戸小笠原源次立歸、御用ゟ〱て着ゝ處、左ゝ趣申來之、

御城中ゝ口ニ御勘定奉行石河土佐守殿・松平河内守殿・御勘定吟味役佐々木脩助殿・御目付松平式部少輔殿・小出織部殿・御勘定組頭羽田龍助殿ゟ御呼出ー二付、罷出候所、御勘定組頭竹内清太郎殿・御勘定小嶋礒之丞殿・同吟味方改役並力石勝之助・御徒目付吉川一郎兵衞・御小人目付齋藤茂八郎・大野平作出席、左ゝ趣兩樣清太郎殿ゟ御達之、

相・房ゟ新規御臺場見分目論見ゟ〱て、來ル廿八日江戸出立、五月朔日浦賀町着、翌二日ゟ見分罷越、千駄崎・猿嶋目論見ゝ上、竹ヶ岡ニ渡海、大房崎見分濟、洲崎迄罷越、夫ゟ海岸通陸地歸着ゝ積、日限ゝ義ゟ、於場所追ゝ相達可申候事、

口達ゝ覺

御臺場取建方見込ゝ趣、於場所相尋可申候、御備場引渡頃合ゝ義ゟ、追る御達可申候事、

右ゝ通り御座候、已上、

四月廿五日

〔川越藩相州五番記錄〕○前橋市立圖書館所藏本

伊藤源五兵衞

四月廿七日

一御休泊割、左ゝ通申來、并極内ゝ左ゝ趣、加瀨崎十郎ゟ申來候段申來之、

休泊割

休泊共別帳ニ有之ニ付、略ス、

右日割ゝ通見分ゝ積、尤見分ゝ節、雨天ハ日送りゝ積、

右ゝ通ニ御座候、

尙以、浦賀着日ゝ處ハ、其場所ニる慥ゝ義ゟ可申上候得共、先ッ御心得迄ニ申上候、

極　内

別紙休泊ゝ通ニる、新規御臺場千駄崎・猿島・大房崎御取建ゝ義、其御方樣并彦根樣・忍樣御立會ゝ衆ニ御見込ゝ趣御尋申上、御答次第ニ地所

公儀ニる御取建、其余御建物等ハ　御自普請ゝ積り、

公儀御普請仕立方ゝ義、一式地元村受ゝ積、御備場其外共御請取方ゝ義ゟ、其場處大筒等拜借ゝ分ハ其儘居附、御書附を以御渡ゝ積、尤御受取日限ゝ義ゟ、郷村御引渡後、

臺場地所ハ幕府ニテ築造建物ハ警備諸藩ニテ負擔ノ由

御受取渡〻積り、

四月廿八日

一左〻趣、夫〻に申聞之、

矢頭庄左衛門に

相・房ゟ新規御臺場見分爲目論見、御勘定組頭始、來ル廿八日江戸出立、五月朔日浦賀着、翌二日ゟ夫〻御見分有之ニ付、御取扱左〻通、宜被取計事、

但御休泊附爲心得相廻之、

一御着〻節、町屋村御領分境へ爲御馳走小代官一人差出〻、及御相拶、夫より御跡を慕ひ罷越、御領分中御休泊に罷出、御用向有之哉相伺候樣可致事、

一右ニ付、御領分境ゟ御案内組〻者幷村役人始露拂等可被差出事、

御案内

組貳人　御勘定組頭に

組壹人　御勘定貳人に

組壹人　吟味方改役並

同壹人　御徒目付に

同壹人　（吟味方改役下役壹人御普請役壹人同見習壹人）

同壹人　御小人目付貳人に

一御領分中御通行筋家並手桶可差出置、夜ニ入候ハヽ行燈可差出事、

一浦賀に着〻うへ御歡小笠原源次御使者相勤候事、

源次口上振

今般猿嶋に新規御臺場御取建ニ付、御越御苦勞被存候、無御滯御着珍重存候、右御歡使者を以申述候、此段兼る申付越候、

一同斷〻節、

御目見已下〻面〻にも、小嶋養右衞門同斷可相勤事、

一三崎に御出〻節ハ、津久井村御領分境に小代官一人爲御馳走罷出、町屋に出張〻通、御跡を慕ひ三崎迄罷越、諸事差支無之樣宜取計事、

一御案内組〻義幷露拂等町屋に着〻節通〻事、

通行筋各家ヨリ手桶夜間ハ行燈差出スコト

川越藩使者口上

三崎ニテノ

此日湯漬出ニ相成、金澤幷横須賀ニる被下候事、

一三崎ニる御湯漬被下候間、手當〻義宜被取計事、

弘化四年四月二十八日

検分役迎接ノコト

領境へ迎接ノ爲出役村役及ビ露拂ヒ人數

御湯漬手當

大津ニ於ケル川越藩贈品目錄

弘化四年四月二十八日

但上下人數左〻通ニ有之事、

御勘定組頭　竹内清太郎殿

御勘定　小嶋儀之丞殿

吟味方改役並　宮田官太郎殿

同下役　力石勝之助

御普請役　鈴木鎌助

上川傳一郎

御勘定

同　七人　内侍三人

（吟味方下役　御普請役　同見習）小者壹人ヅ、

御小人目付小者壹人ヅ、

御徒目付組頭格

同　四人　内侍貳人

同　五人　内侍貳人

吟味方改役並

御小人目付小者壹人ヅ、

一大津ニ御着〻上、左〻通、御目錄小笠原源次を以被相贈候間、宜被取計之、御目見已下〻義も、小嶋養右衞門を以被相饋候事、

（干鯛一折　銀三枚）

銀三枚ヅ、包の〻

五百疋

三百疋ヅ、

猿島ニ於ケル寄船並ニ手當

五百疋

三百疋ヅ、

一猿嶋御見分〻節、寄船〻義、御船奉行申談、宜被取計事、

一同所ニおゐて、陣張ニる切飯御重詰御茶御菓子多葉粉等手當〻義宜被取計事、

但御刀掛可相廻事、

同見習　石川忠之助

御徒目付　吉川一郎兵衞

御小人目付　齋藤茂八郎

大野平作

一右同斷〻節、小笠原源次・佐々倉又八郎・小倉源八下役召連罷出候事、

一爰元御見分萬端相濟、御出立前ニ、御湯漬被下候間、手當〻義宜被取計事、

一右〻外差支無之樣可被取計事、

御船奉行ゟ

近〻夫〻

公御役人御見分ニ付、猿嶋御見分〻節、御手船差出、不足〻分ハ町在奉行申談、宜被取計之、尤其節船手役始差出差支無之樣可被申付候、

小倉源八ゟ

弘化四年四月二十八日

弘化四年四月二十八日

近〻　公御役人猿嶋御見分ニ付、其節罷出、御尋〻義も有之候ハヽ小笠原源次・佐々倉又八郎義も出張致居候間、申談、御答〻義不都合無之候、宜被取計事、

一右〻節、大工・黒鍬等職人共爲用意召連、罷出可申事、

一右ニ付明神前へ、陣張手當可被申付事、

一　間　竹内清太郎殿
一　間　吉川一郎兵衛
一　間　鈴木鎌助
一　間　上川傳一郎
一　間　石川忠之助
一　間　小嶋礒之丞殿
一　間　宮田菅太郎殿
一　間　力石勝之助
一　間　齋藤茂八郎
一　間　大野平作

検視役ニ對スル答書打合ノコト

大工黒鍬等ヲ同伴ス

明神前陣張手當

一右〻外、供〻分并御留守居始陣張〻義、程能可取計事、

一上〻分假手水場手當可被申付事、

佐々倉又八郎へ

近〻猿嶋

公御役人御見分ニ付、其節罷出御尋〻義も有之候ハヽ小笠原源次・小倉源八も出張致候ニ付、申談、不都合〻義無之樣、御答〻義、宜被取計事、

公儀役人迎接諸役へ心得ヲ達ス

有賀惣兵衛ニ申遣

公御役人來ル二日城ヶ嶋・安房崎御臺場見分被致候間、幕打餝手桶可被差出事、

一同所ニ御渡海〻節、船手當〻義、宜被取計事、

一御臺場ニ御茶多葉粉盆菓子等用意可致置事、

安福要人ニ

公御役人來ル二日三崎ニ御越、城ヶ島・安房崎御臺場見分被致候ニ付、爲御心得申達候事、

一右ニ付、御番士居席ニ罷在、御見通ヿニ相成候節ハ、御時宜仕候事、

一右ニ付、當番宅待〻面〻も出番候樣、御申聞可有之事、

一右御見分〻節、小笠原源次・佐々倉又八郎・小代官等罷出候事、

矢頭庄左衛門ニ

一三崎・城ヶ嶋・安房崎御臺場見分〻節、當番〻大筒方居席ニ罷在、御見通ヿニ相成候節ハ、御時宜致候樣可被申聞事、

三崎物頭ニ

一右同斷、組〻者共下座致候樣可申付事、

弘化四年四月二十八日

一右ニ付、左〻通觸差出之、

公儀役人通行ニ對スル心得ヲ觸示ス

此度猿嶋新規御臺場爲目論見近〻
公御役人御越有之ニ付、御逗留中御旅宿近邊ニ成丈不罷越樣可被致候、自然罷越
候共、專心得可有之事ニ候、
一公御役人通行〻節、途中ニ〻る御役人ちゃ見受候ハヽ、成丈相外ー、自然差掛り候ハ
ヽ、無禮無之樣可被致候、
一火〻元〻義、別る入念候樣、末〻召仕共にも可被申付置候、
一右ニ付、大方御歩行目付并横目足輕繁〻廻勤可致候、
右〻越、仲眞支配方へ可被相觸候、以上、

四月廿八日　　兩人

各中

五月六日

一明七日、觀音崎・十石・籏山御臺場見分被致、品ニ寄猿嶋をも見分被致候、御勘定方始左
〻通連名を以、小笠原源次方迄御案内申出候旨、申出之、

公儀役人迎接ノ心得ヲ達ス

以切紙被啓上候、然ゟ明七日、船ニる觀音崎に罷越、御臺場見分、夫ゟ籏山・十石崎に
相廻り、品ニ寄猿嶋にも見分罷越候積ニ有之候、右可得御意、如此御座候、以上、

吉川一郎兵衛
力石勝之助
宮田菅太郎
小嶋礒之丞
竹内清太郎

小笠原源次樣

尙以、雨天ハ日送り〻積ニ有之候、以上、

一右ニ付、御取扱を始、左〻通夫〻に申遣之、

矢頭庄左衞門に

明七日　公御役人觀音崎・十石・籏山御臺場見分被致候ニ付、御領分境に小代官
壹人出張申付、夫ゟ御跡を慕、御臺場〻〻に相廻り御用向可相辨事、
一右ニ付、御先拂御案内組〻義ゟ、是迄〻振を以可被申付事、
一右ニ付、三御臺場に刀掛を始、毛氈茶多葉粉盆菓子其外入用〻品〻可相廻事、
一右ニ付、走水觀音別當所ニおゐて、御湯漬被差出候間、手當〻義、宜被取計事、

弘化四年四月二十八日

一三御臺場に立番足輕貳人ツヽ可被差出事、

番頭心得

番頭に

明七日　公御役人觀音崎御臺場見分被致候に付、爲心得當番組士に御申聞可有之候、

一右〻節、組士居席に罷在、御見通ー相成候節ハ、御時宜致候樣、御申聞可有之事、

物頭心得

堀中　亘に

右同斷、籏山御臺場見分被致候に付、右同斷當番〻番外に御申聞可有之候、

御作事心得

矢頭庄左衞門に

右同斷、觀音崎御臺場見分被致候に付、右同斷、當番役方大筒方へ可被申聞候、

一十石御臺場役方大筒方兩人出張可被申付候、

物頭に

一右同斷、三御臺場見分被致候に付、當番足輕下座致候樣可被申付候、

但十石に上番役方大筒方兩人出張申付候間、爲心得番人に可被申聞候、

御作事に

右同斷、三御臺場見分被致候に付、掃部等〻義、宜被取計候、

一右に付、三御臺場に幕打候樣、且又足輕下座致候に付、下座鋪〻義宜被取計候、

一右に付、餝手桶差出候樣可被致候、

小笠原源次佐々倉又八郎に

右同斷、三御臺場見分に付、出張可被致候、都る〻義不都合無之樣、宜被取計候、

小笠原源次等心得

五月八日

一今九時ゟ　公御役人三御臺場見分被致候旨、小笠原源次申出之、

一右に付手當〻義、一昨日委細申聞置候通、宜取斗旨夫〻に申聞之、

一觀音別當所にる御湯漬被下候事に申聞候所、同所にるハ差支〻趣に付、走水村におゐて御湯漬差出候事に相成、御休所〻義、左〻通宿割申付之、

大泉寺　竹內清太郎殿　覺榮寺　小嶋礒之丞殿

宇野武左衞門　力石勝之助　飯嶋惣左衞門　石川忠之助

權左衞門　吉川一郎兵衞　圓照寺　大野平作

〃

一右に付相拵ら―て、竹內清太郎殿に刑部罷出取結ひ御口上申述之、

一小嶋礒之丞殿始にて、小笠原源次差出、右同斷、

一刑部、竹内殿に罷出候節、左〻趣件書に致差出之、

半脇 猿嶋に新規御臺場御取建に付、委細繪圖面を以、見込〻趣可申上旨、被 仰聞候に付、則麁繪圖面を以申上候事、

一同所に貫目已上〻大筒拾五挺、相備候樣仕度見込に御座候事、

但東〻方、出先拾五間切込、右〻内大筒三挺相備候積に御座候事、

一右に付ゐて、猿嶋高サ五間も切平均不申候ゐて、右〻挺數相備兼ゐ可申見込に御座候事、

一玉除土居幷打方〻者通ひ道等御出來被成下度奉存候事、

但玉除土居、敷三間高サ七尺、馬踏、壹丈長四間裏面石垣〻積〻事、

一遠見番所一ヶ所其外番所大業藏等出來仕度奉存候事、

一猿嶋〻義も、肝要〻御場所に候得ゑ、是非共大筒拾五挺相備申度見込、乍去何分兼〻勝手向不如意に御座候ゐ、迚も難及自力義に付大筒を始都ゐ御出來、御居付〻うへ御渡被成下度奉存候事、

但末件二ヶ條、引拔差出候樣にと被仰聞候に付、引拔差出候、

公儀役人辨當ノコト

御船奉行心得

一明九日五ツ時、浦賀發足にゐ

公御役人猿嶋見分被致候旨、被申聞候段、小笠原源次申出候に付、申合〻上、同所に御越〻上ハ、時分時にも可相成候間、猿嶋にゐ切飯被下可然旨、申合候に付、左〻趣、夫〻に申聞之、

矢頭庄左衞門に

一公御役人、明九日五ツ時、浦賀發足にゐ猿嶋見分被致候に付、同所に御越〻上ハ、御切飯被下候間、手當〻義、宜取計旨申聞之、

但切飯〻義ハ、昨年御目付松平式部少輔殿御越〻節、差出候振合を以、可取計旨申聞之、

一右に付、御領分境に小代官壹人、爲御馳走差出候義、宜取計旨申聞之、

御船奉行

一右同斷に付、船手當〻義、宜取計旨、尤

公御役人渡海〻義も左〻通に有之、其外物頭・御留守居・御作事奉行・小代官幷賄方〻者諸道具等持參罷越候に付、右〻分五六艘手當致、水主〻もの看板等爲着、御船印を建置可申事、

一右〻節、船に敷候毛氈多葉粉盆等、賄方ゟ可相廻候間、見苦敷無之樣取計、尤其節

弘化四年四月二十八日

船手役并船手組等差出候様可致事、

竹内清太郎殿
小嶋礒之丞殿
宮田菅太郎殿
力石勝之助
吉川一郎兵衛

押送り壹艘

鈴木鎌助
上川傳一郎
石川忠之助
齋藤茂八郎
大野平作

同

右〻外、惣供船四五艘用意〻事、

御作事奉行心得

御作事奉行

一右同斷ニ付、猿嶋ニ陣張等出來候様、宜取計事、

猿島臺場檢分

五月九日

一今日、公御役人、猿嶋見分無滞相濟候段、小笠原源次・佐々倉又八郎申出之、

一佐々倉又八郎申出候ゟ、

公御役人ゟ被仰聞候件〻有之ニ付、左〻通り御答申上候旨、申出之、

猿嶋御臺場御取立爲御見分、

大砲据附ノ爲山上切開キノコト

公御役人被參候ニ付、御案内致候處、同所春日社前ゟ縄を張分見被致候ゑ、山上にゟ被參候、夫ゟ岩窟〻方御一見御座候ゑ御戻りニ相成、只今大筒掛居候出先〻方にゟ段〻縄を張分見被致候、又候山上平地に御戻りニ相成、竹内清太郎殿、私に御尋ハ、此邊に大筒掛り候哉ゟ被申候ニ付、此所に四挺掛り候哉ゟ被申候ニ付、此所に四挺掛、圖面ニ御座候通、山上平地に三ケ所四挺ツ、掛候義ゟ申達候所、又候被申聞候ゑ、五間切平均〻義ハ如何〻義ニ有之哉と被申聞候ニ付、御答申達候ニゑ、玉行〻所高キゟ低に打候義、業〻上甚損ニ御座候、桁ニ行候得ゑ、得御座候義ニ候得共、是迄〻御臺場平根・觀音崎等如何〻御存念ニ御座候哉、高地ニ有之候高くゟ打候得ゑ、業付ニゑ宜無御座候趣ニ付、五間切下ケゟ申者何程も低キ方宜御座候、右故此出先低方三挺ゟゑ申上候得共、壹挺も余分ニ相掛申度義ニ御座候、山上平地〻所ゑ一行ニ相掛申度奉存候得共、目當〻所、富津・旗山〻間候得ゑ、此地面ゑ大方其方にゟ向キ長く相成居候得ゑ、三ケ所ニ致候義ニ御座候、切平均〻義ハ大筒業〻上、利分多く御嚴重ニ可相成と奉存候、扨又出先〻方に玉藥等持運ひ〻道無御座候ハゑゑ相成不申候、其所ゑ右〻方海岸付玉除〻土居を築、其内を往來ニ致ゑゑ相成不申旨申達候、山上切平均〻土を以築候ゑも宜御座候ゟ申達候得ゑ、下ハ何ゑ石垣ニゑ組立ゑゑゑ不相成ゟ被申候、私申

火藥庫ノ設置

達候ゝ、左ゝ方岩窟ゝ方へ道付候得ゝ、丁場短く候得共、山上に登候所、道甚急に相成申候ゝ申達候得ゝ、先様にゐ被申候ハ、是ハ中ゝ出來不申、右ゝ方長く不致、中途ゟ登候様にも付可申哉ゝ被申候に付、此所ゝ至ゐ切岸立にゐ、道付候義、六ヶ敷ゝ申、私申達候處、何ゝ御答も無御座候、

一出先ゝ方十五間切込候義、先様にゐハ何程色ゝ御咄も御座候様に候得共、私にゝ何ゝ御尋も無御座候、山上に被登候節、此出先大筒ゝ掛り候處、山上此處に大筒掛り候得ゝ、上へ下相並候ゐ、下ゝ大筒打候うへを玉行候様に相成、ボンベンにゐも割レ候得ゝ、浮雲キ者と被仰候に付、格別ゝ高下に候得ゝ、先ツゝ氣遣ひも無御座候ゝ奉存候ゝ申達候、

一火藥藏ゝ義、先様にゐ土居を築、其中に建候哉ゝ様にも御噂茂御座候に付、山上廣キ所ゝ裏手に少く低キ所御座候、此所切下ケ、火藥藏可然ゝ存居候に付、富田寛太郎殿其近邊に被參候に付、此邊火藥藏建立可然旨申候所、繩を張分見被致候、扨御同人被申候ハ、見張番所ゝ何方ゝ積に有之哉ゝ旨、御尋御座候に付、御答申達候、是春日社近邊可然ゝ奉存候、乍去爰元ゝ義ゝ、渡海にゐ出張ゝ義に候得ゝ、人數始兵糧其外都ゐゝ物、此地に貯置候茂ゝ不相成候得ゝ、見張番所も大く諸品ゝ物置等茂余分相建候茂ゝ不相成候に付、地所も廣く無御座候ゝゐゝ相成不申候處、御見分ゝ通、春日社近邊ゝ地狹に御座候へハ、山上切平均ゝ土を引、同所洲ゝ脇ゝ所にゐも築出候茂ゝ六ヶ敷ゝ奉存候、ゝ申達候得ゝ、寛十郎殿被申聞候ハ、築出ゝ申ゐハ左様にも不參候間、山を切廣ケ候方可然ゝ被申候、其節も圖面御出御咄御座候、皆様御立合にゐ玉除土居掛紙ゝ處ゝ義に御聞被成候、圖面にゝ裏表石垣ゝ様に見へ候、如何に哉ゝ御座候間、被仰聞候通ゝ積に御座候ゝ申候得ゝ、表ゝ方ハ芝土居可然ゝ被申候に付、左様も存候得共、先石垣ゝ積致候ゝ申候得ゝ、表ゝ方ハ芝土居宜ゝ被申候に付、被仰聞候通にゐ宜ゝ御答申候、左候得ゝ、裏ゝ方三方石垣に可被致候旨被申候、高サ厚ゝゝ處ハ御尋も無御座候に付、ケ條書にゐ申達候所、御承知ゝ義ゝ奉存候に付、何ゝも不申述候、其外大筒減候様ゝ義を演、何ゝ御尋も無御座候、此段申上候、

五月九日　　佐々倉又八郎

五月十一日

一小笠原源次申出候ハ、竹内清太郎殿始ゟ猿嶋御臺場ゝ義に付、御談ゝ義有之間、今八ツ時頃清太郎殿旅宿に一同罷出候様、申越候段、申出之、

一右に付申合候所、猿嶋ゝ義に付、御談ゝ義有之に付一同罷出候様にと有之上ハ、佐々倉

又八郎・小笠原源次差出可然共被存候得共、何分一同ら有之上ハ、寂初件書竹内殿ゟ差出候節ゟ、刑部差出候ニ付、同人義も罷出候方と申合〻上、刑部、源次・又八郎同道、清太郎殿旅宿ゟ罷出之、

但清太郎殿被申聞候趣、不相知事、

一佐々倉又八郎・小笠原源次、左〻趣、件書ニ致、竹内清太郎殿へ持參差出之、

一春日明神ゟ向ひ、右〻方石垣を以、突出出來候様仕度奉存候事、

一左〻方、船溜ニ仕度ニ付、波除等出來候様仕度奉存候事、

但右両人勤書調〻上可認事、

松代須坂両藩領震災ノ爲恩貸金ヲ交付ス

幕府、松代藩主眞田幸貫ニ金壹萬両、須坂藩主堀直武（長門守）ニ金千五百両ヲ貸與シ、領邑ノ震災ヲ救恤セシム。

〔愼德院殿御實紀〕（○續德川實紀所載）

四月廿八日、信濃衆一人また參覲す、眞田信濃守所領信濃國松代地震によて城内亭宅大破、家中在町破損、領内出水等により、請ふまゝに金一萬兩の恩貸あり、堀長門守所領信濃國須坂おなじく地震によて、陣屋亭宅其他破損、領内亡所も少からず、よて請ふまゝに金千五百兩の恩貸あり、

松代藩へ金一萬兩拜借被仰付

須坂藩主へ金千五百兩拜借被仰付

〔老中達〕（○内閣記錄課所藏本　弘化年錄所載）

四月廿八日

眞田信濃守（幸貫、松代藩主）

名代　植村出羽守（家興、高取藩主）

領分地震ニ付、城内住居向其外及大破、其上出水等ニ付可爲難儀ら被　思召候、依之金壹万兩拜借被　仰付之、

堀長門守（直武、須坂藩主）

名代　伊丹三郎左衛門

同斷ニ付、陣屋住居向其外及破損、并領内亡所損地等有之、可爲難儀ゟ被　思召候、依之金千五百兩拜借被　仰付之、

右於波〻間、老中列座、同人（○山城守）申渡之、

〔異本〕弘化年錄（○内閣記錄課所藏本）

四月廿八日

領分地震ニ付、城内住居向其外及大破、家中町在共悉破損、其上領内出水等ニ付、拜借〻
儀被相願、達　御聽、可爲難儀と被　思召候、依之金壹万兩拜借被　仰付之、

名代　植村出羽守

同斷ニ付、陣屋住居向其外及破損并領内亡所等不少候ニ付、拜借〻儀被相願、達　御聽、
可爲難儀と被　思召候、依之金千五百兩拜借被　仰付之、

名代　堀長門守
伊丹三郎左衞門

右於波〻間老中列座、同人○山城守申渡之、

○高麗環雜記・聞見錄・野口孝榮弘化三丙午四丁未歲記ニモ略々同一内容ノ記事アリ。

〔弘化年表〕○維新史料編纂會所藏本

四月廿八日、眞田信濃守、金壹万兩拜借被　仰付、領分地震ニ付、住居向其外及大破、其上出水ニ付可爲難儀と被　思召候、依之之、堀長門守、金千五百兩拜借被　仰付、領分地震ニ付、陣屋住居向其外及大破、其上出水ニる可爲難儀と被　思召候、依之也、

○天弘錄・柳營秘書ニモ略々同一内容ノ記事アリ。

〔松代藩主眞田幸貫願書〕○帝國圖書館所藏本　胡路護隣宜所載

○四月十二日幕府へ

震災ノ爲松代藩領内ノ損害多大ナリ

過日御屆申上候通、私在所信州松代、去月廿四日夜、未曾有〻大地震ニる城内櫓壹ヶ所震潰、其外櫓門圍塀并住居向大破損、其上所〻地面震裂、幅七八寸位數間筋立、家中屋敷〻儀と南山手ニ附〻方と破損輕く御坐候得共、潰家或と半潰家其外一統破損所有之、城下町〻義も潰家破損所等死失茂有之、其外領分村〻一統〻義ニる、場所ニ寄七八寸位、或と壹尺二三尺地面震裂數間筋立、右ゟ土砂泥水燒石〻類吹出ー、又と田畑〻中地陸或ハ高く或ハ低く種〻變地致ー、扨亦山中筋と猶更拔覆夥敷、土中ニ相成候村方茂有之、其上兼〻申上候通、更級郡〻内山平林村地内〻高山拔崩、麓〻村〻と盤石一同犀川筋ニ數拾町〻間押埋流水堰留、日〻水嵩相增、凡十七八丈湛溜、水上と六七里〻間湖水〻形勢ニ相成、右ニる川附村〻と數ヶ村倒潰、或と燒失〻上、數十丈〻水底ニ致沈沒居、此上五七日茂水湛增候と、拔崩押埋〻場水乘可申哉〻旨、追〻注進申出候、其外土尻川と申ハ犀川ゟ小川ニ御坐候得共、是又川川拔崩、流水〻切、去ル十日迄湛水ニ相成居候處、同日晝過崩埋〻場押切、壹丈余〻大水俄ニ押出ー候所、暮ニ及ひ追〻減水仕候、尤元來犀川と落合候水筋ニ御坐候處、地震以來干上り〻川筋ニ流落候故ゟ川丈〻流水ニる破損所と御坐候得共、先格段〻儀も無御坐候、然ル處、前申上候犀川上手、數十日〻湛水一時ニ押出候節と、川中島と勿論、下續御料所村〻如何樣〻災害可有之茂難計、殊ニ犀川口小市村渡舟場北、字眞神山、是又犀

潰家及半潰家屋八千七百四十七死傷者三千九百二十四人斃牛馬二百三十五疋

川中に崩落、川巾多分押埋候間、此節湛溜候犀川一時に押出し、眞神山押崩し場に突掛候て、猶更如何樣〻異變茂生シ可申哉難斗、右〻場差向、時〻手當精〻申付候得共、中〻以不容易義に有之、且支配所〻儀も、多く同樣御坐候處、就中善光寺〻儀ハ居家震潰、右に付出火、本堂山門〻外ハ一圓燒失、死傷殊に夥敷趣に付、早速家來差出、米穀人足等當坐〻手當申付候儀に御坐候、一躰領分〻儀ハ飛地無之、城續一纏メに御坐候所、山中筋ハ犀川水湛井道形多分拔覆、往來不相成場も多、委細取調も出來兼候得共、去ル十日迄追〻相糺候分、城下町ハ山里村〻潰家半潰家共八千七百四拾七間程、死人怪我人共三千九百廿四人程、斃牛馬二百三拾五疋程に御坐候、右等〻次第に付死失潰家無之村方等ハ纔〻儀に付可有之、歎息至極奉存候、勿論赦方等手當精〻申付候得共、差向苗代時に茂罷成、麥作取入等肝要〻季節に茂追〻相成候處、震ハ輕くハ相成候得共、鳴動ハ今以數十度有之、百姓共恐怖悲歎に沈ミ、途を失ひ、忙然ハ而已罷在候に付、役人共差出し、撫育爲致候得共、安居仕兼、加之川中嶋手〻儀去、犀川水湛に付流水無之、用水差支、渇に茂及候仕合、絶言語候次第に御坐候、乍然難捨置儀に付、万一心得違〻人氣茂、此節〻儀に付、氣遣敷奉存候間、人心落着、銘〻取復〻手段赦方可成丈可申付儀に御坐候得共、城修復を初、家中城下町領分在〻一統〻義に付、莫大に有之、何分行屆兼申候、其上猶犀川〻變地茂如何可相成哉、心痛當惑至極に奉存候、御時節柄奉恐入候得共、何分難及自力、依之格別〻以御憐愍金貳万兩拜借被仰付被成下候樣仕度奉願候、此段不得止事奉願上候、以上、

金貳萬兩借用ヲ願フ

四月十二日　四月十六日御勝手掛に出ス、　眞田信濃守

〔須坂藩主堀直武願書〕

○維新史料編纂會所藏本聞見錄所載

震災ノ爲須坂藩領内損害多大ナリ

○四月十七日幕府へ

奉願候覺

私勝手向不如意に御座候上、近年領分違作打續、別る難澁罷在候所、昨年居屋敷類燒失仕、以後住居向普譜請〻義茂差支、御暇順年旁以昨夏中在所に〻御暇奉願候所、願〻通被仰出候間、發足用意取懸候折柄、本所下屋敷近年稀成出水に付、同姓内藏頭始立退可申所、上屋敷類燒後住居向も一向無之、急速立退〻手當夫〻申付、其外水防等儀に付、彼是莫太〻臨時物入多、内外殊〻外差支罷在候所、先達る御用番に先御屆申上候通、去月廿四日夜、在所向地震强、陣屋并家來居宅長屋向破損所數ヶ所、町方且又領分村〻百姓家同斷、別る川附村〻潰家破損家夥敷、其外田畑地裂數百ヶ所ハ泥砂吹出し、又ハ地面高低出來、小川何レも川(マヽ)〻方高く相成、水溢、耕地に押入、數日湛居候故、當季作物都る水腐に相成候、殊に領内川附村〻〻内綿内村〻儀ハ、犀川千曲川落合〻場所に御座候所、川上に付る山崩有

之、流水堰留、日増ニ水嵩ニ相成候ニ付、湛水溢水ニ相成候節ハ、右綿内村ヶ勿論、流末川添村〻一体地窪〻場故、押流候哉ニも難斗、老幼ヶ不及申、骨弱〻者共、都る救小屋取立、飲食其外手當仕、村〻にて役人共差出置、精〻防方用意爲仕罷在候所、其後今以強柔ら御座候得共、晝夜何ケ度とふく相震、并犀川上手山崩ニる堰留候流水、日増ニ相嵩、去ル十三日申剋頃ゟ西山邊頻ニ鳴動仕候間、心配仕、尚又家來并助勢人足爲防禦差出、老幼〻者共爲立退等〻儀爲取計罷在候内、右犀川堰留候場所、水勢ニる俄ニ押切、數日相湛候儀ニ付、凡貳丈余〻水嵩暫時ニ押來、領分川附村〻兼る手配用意仕罷在候得共、夜陰殊ニ急流故、流家ヶ勿論、溺死〻者共も有之、田畑亡所損毛も不少樣ニ相聞候得共、未一圓水下ニる取調難行屆、尤山崩堰留候場所貳三ケ所御座候由、追〻押切可申哉、此上如何可有之も難斗、心痛罷在候、右諸向手當猶豫難相成、去月廿四日以來、引續夥敷入用ニる必至ヶ差支、在所表寂寄一圓〻儀ニる金子調達〻手段ゟ無御座候、殊ニ前書〻通、引續莫太〻入用相嵩、困窮差湊候折柄、今般前代未曾有〻大災ニる、急束窮民救方手當申付候得共、前書〻仕合ニる此上〻所難行屆、甚心痛當惑罷在候、依之奉願候ゟ甚以恐入奉存候得共、可相成儀ニ御座候ハヽ、格別〻以御憐愍、何卒金貳千兩當節拜借仕度奉存候、右願〻通被　仰付候ハヽ、諸向急場難澁相救ヶ勿論、數ケ村〻者共不及飢渴樣手當出來可申ヶ、難有仕合奉存候、右

金貳千兩借用ヲ願フ

〻通、上納方〻儀ヶ不容易譯柄ニる、奉願拜借金〻儀ニ付、御差圖次第取斗、返上可仕候間、御慈訴願〻通被　仰付被成下候樣、偏奉願候、以上、

四月十七日　在所日付　　堀長門守

〔老中達〕〇内閣記錄課所藏本　弘化年錄所載

十二月廿八日　　眞田信濃守

松代藩主ノ震災對策ヲ賞ス

當春信濃國地震〻節、領分御預所手當等行屆、一段〻事ニ候、此段家來共にも申聞候樣可被致候、

右於波〻間、列座同前、同人申渡之、（老中）（山城守）

（高麗環雜記）

佐土原藩主島津忠寛淡路守參府ニ依リ、高鍋藩主秋月種殷佐渡守就封ニ依リ、各登營ス。德島藩主蜂須賀齊裕松平阿波守參府、病ノ爲使者ヲ登營セシム。

〔愼德院殿御實紀〕〇續德川實紀所載

四月廿八日、松平阿波守參府す、病によて使してものたてまつる、島津淡路守參覲す、秋月

佐渡守就封のいとま下さる、

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

四月廿八日

一今巳上剋御表に

公方様　右大將様　出御、月次〻御禮相濟、

御白書院

參勤　嶋津淡路守（忠寛、佐土原藩主）

御暇　秋月佐渡守（種殷、高鍋藩主）

松平阿波守（齊裕、德島藩主）

右參勤〻御禮、病氣に付、以使者被差上之、於檜〻間謁戸田淡路守（氏紹、泰者番）、

右御禮畢る　入御、

右大將様へ　銀卷物　五代

御大將様へ　銀馬　五代

太刀馬代　三枚

銀卷物　十枚

同　五

同　銀三十枚

綿五十把

太刀馬代　三枚

島津忠寛

秋月種殷

蜂須賀齊裕

四月廿六日

右就參府、被遣之、

上使青山下野守

松平阿波守

〔泰者番〕牧野康哉日記〕○維新史料編纂會所藏本

四月廿八日、○中略、

一松平河波守參勤〻御禮、病氣に付不罷出、使者差上候間、當番○戸田淡路守、可謁旨、山城守殿以友阿彌御差圖に付、當番於檜〻間被謁候、○中略、

一無間御白書院に

兩上様　御一同　出御、○中略、初口御披露伯者（本莊宗秀、泰者番）にも扣席へ被出候、初口伯者扣席ヲ被立候と、自分其跡扣席へ、手札左〻手に持進と出、島津淡路守出禮、御披露相濟、淡路守引、伯者にも被引、淡路守進物ヲ進物番引に出候と、自分爪立扣居、進物番廻り立候處にて、肝煎自分に會尺有之候間、手札左〻手に持、覗披露席へ罷出候と、肝煎誘引にて、秋月佐渡守御前へ罷出、平伏〻節、秋月佐渡と下司無之御披露、夫にと　上意、少一罷出、在所に〻御暇被下旨

上意、御取合有之る退去、自分脇迄引候節、二ッ程摺り下り、左り廻りニ立、小溜へ復坐、夫々理於御次、老衆御列坐、拜領物被仰渡、老衆復坐被致候と、佐渡守再御前へ罷出、御取合有之る引、

福岡藩主黑田齊溥（美濃守）長崎警備年番タルヲ以テ長崎ニ抵り、番所ヲ巡檢ス。

福岡藩主發駕

〔日　記〕（○福岡藩記錄　侯爵黑田長禮所藏本）

四月廿八日、晴、

△長崎御番所爲御見廻、今朝五時御供揃ニる、四時　御發駕被遊、

○御召服、御馬乘袴被爲　召之、

御道筋、表御門・上ゝ御橋・赤坂御門・養巴丁・岩戸口通り、

御　供

又　之　進　　浦上三郎兵衛

宮内十郎右衛門

△就右、左ゝ面ゝ、御座間ニ被爲　召、御熨斗蚫頂戴被　仰付之、

御家老中　　小河專太夫

御右筆所詰　中老中　　御家老嫡子

小川主計不快引入ニ付、以呈書御機嫌相伺之、

御納戸頭中　　裏判役中

御城代頭中　　同格御小生頭

△御發駕前、於　御座間御熨斗蚫御祝被遊、直ニ　御發駕被遊、

御熨斗蚫差上　　奥頭取

福岡藩主長崎ヲ巡見ス

△御發駕ゝ節、左ゝ通罷出、（○下略、）

〔諸用留〕（○內閣記錄課所藏本）

一長崎御番所、從松平肥前守方、請取候段去、最前申聞候、御番所爲見廻、四月廿八日在所發足、五月三日長崎到着、平賀信濃守遂面談候、彼地別條無之候付、同月六日致出足候、追付從國許使者可差出候得共、先右ゝ段爲可申聞、以飛札申聞之、

松平美濃守

〔日　記〕○福岡藩記録　侯爵黑田長禮所藏本

二月五日、晴、

△平賀信濃守殿（三五郎勝思）長崎御奉行に當月〻次御見廻として、奥膳五六郎御小生長崎に被差立候に付、御用〻趣、御用人方相含、御口上御目錄並聞役に〻御用封箱相渡之、

二月々次見廻

四月三日、晴、

△平賀信濃守殿長崎御奉行に當月〻次爲御見廻、大野清左衞門御小生今日長崎に被差立候付、御用〻趣、御用人方相含、御口上御目錄並聞役に〻御用封箱等相渡之、

四月々次見廻

四月七日、晴、

△中村貞吉小船頭儀、御當番中、御番所御入用〻御武器類、加番船〻内一艘に積込、被指廻候に付、右爲上乘、明後九日乘船被　仰付候に付、持參〻御用狀、御用人方船手頭に相渡之、

武器輸送

△長崎壹番〻加番〻内、左〻面〻、明後九日乘船被　仰付候に付、今日　御館に罷出、月番面謁、

四月十七日、晴、

△長崎御番所　此方樣に被相渡候樣、松平肥前守樣に〻御奉書持參〻御使者安永延助（陸士頭格）奥頭取去三日伏見方御先立に被指立、昨十六日箱崎止宿、今日直に出殿、右肥前守樣に〻御奉書其外御同人樣に〻御使札御口上書並持參〻御用封箱も、御用人に指出之、御家老中にも御意〻趣、延助方相達、右　御意書並御番所御壁書も月番に差出之、

右委ハ長崎記定格〻卷に見る、

○右御奉書持込方〻儀も、前日御用人迄書狀を以相伺候に付、今日四時　御館に持込候樣、返答申入之、

△長崎御番所　此方樣に被相渡候樣、肥前守樣に〻御奉書を初、持參〻御使者安永延助到着に付、今日佐嘉・長崎に左〻面〻、爲御使者被指立候に付、御用〻趣御用人方相含、月番面謁、直に出立、

佐嘉に〻御使者　馬廻頭　根本孫三郎

長崎に〻御使者　使番　花房眞次郎

○長崎に〻御使者廿四時〻歩に候事、

△長崎壹番〻〻面〻、明十八日乘船被　仰付候に付、今日　御館に罷出、月番面謁、　御意

〻趣申聞候上、　御意書御定書類共、月番ゟ中老番頭中ニ相渡之、御奉行所ニ〻御口上書ゟ中老ニ御用人ゟ相渡之、御石火矢大筒玉薬等請取手形・預手形並佐嘉御番手ゟ來居申候受取手形等入居申箱、七ヶ所御臺根木屋地所取替證文等入候箱共、大頭ニ御用人ゟ相渡之、

中老　矢野六太夫　　大組頭　槇惣太夫
大頭　伊丹九郎左衞門　　馬廻頭　毛利長兵衞

○右委ハ明十八日長崎〻部ニ認之、
○惣御番手名充ハ右同、

○例ゟ御番手〻面〻　御着城御當日乘船被　仰付來候得共、文化八年、大頭ゟ依伺、御番頭中ハ御當日、惣御番手中ハ前日乘船被　仰付事ニ候得共、御越座御急〻依御都合、御着城前廣乘船被　仰付候事、

五月十日、雨後晴、

△殿樣長崎御番所御見廻御仕廻、昨晩二日市驛御止宿、今朝六時、御供揃ニゟ同所　御發駕、所所御小休ニゟ、上ノ御橋通、四時過　御歸城被遊、

福岡藩主歸城

△遠見、左〻所〻被付置、
平尾村前　養巴丁
上〻御橋　御入

△御入〻節、御家老中初其外式日出仕〻面〻出方等、　御發〻通、

○尋デ、七月十九日・九月十五日、齊溥、長崎ニ赴クコトアリ。次ニ警備人數派遣ノ史料及ビ之ニ關スル史料ヲ收ム。

〔日　記〕○福岡藩記錄　侯爵黑田長禮所藏本

六月廿八日、雨、

△明石助九郎大頭儀、長崎二番〻之内、先立七月朔日出立被　仰付候ニ付、今廿八日、於小書院　御目見被　仰付、　御意〻趣、月番ゟ申渡之、御直ニも　御意被爲加、

出席　月番
披露　御用人

△右ニ付、於同所御料理一汁三菜被下之、御料理半、　御意〻趣、御用人ゟ相達之、

○例ゟ小書院御圍ニゟ御茶被下候ニ付、御用人より　御意相達候得共、此節ハ引離之、先立御料理被下候ニ付、御圍ニゟ〻御茶被下無之候ニ付、　御意達無之、

△用田傳次小船頭二番〻〻内、先立前條大頭一同乘船被　仰付候ニ付、於御廣間　御目見被仰付、御意〻趣、月番よゟ相達之、

△右ニ付、於同所御料理被下之、御料理半、御意〻趣、御用人よゟ相達之、

六月晦日

△明石助九郎大頭儀、伊丹九郎左衛門同上一番〻爲代二番〻〻内、先立來月朔日長崎ニ被指立候ニ付、今日　御館ニ罷出、月番面謁、畢る平賀信濃守殿在勤長崎御奉行ニ〻御書御口上書並御番頭中ニ御家老中ゟ〻御用狀、桐山市郎太夫在崎開役ニ〻御用封箱御用人ゟ相渡之、

但一番〻大頭伊丹九郎左衛門儀、佐賀御示談筋御番中ニゐて、御用辨不宜候ニ付、同人爲代被指立候ニ付、如本文、

△右出立ニ付、御用人迄御機嫌相伺之、

七月十一日、晴、

△長崎二番〻之面〻、近〻乘船被　仰付候ニ付、小書院ニおゐて番頭中　御目見被　仰付、御意〻趣、月番よゟ申渡之、　御意被爲加、

出席月番

披露御用人

△於同所御料理一汁三菜被下之、御料理半、御意〻趣、御用人よゟ相達候條、被下候段後相達之、

中老　大音六左衛門

長廻頭　根本孫三郎

大組頭　飯田角左衛門

△於御廣間ニ惣御番手中　御目見被　仰付、御意〻趣、月番ゟ申渡之、

七月十八日、晴、

△長崎二番〻〻面〻、明十九日乘船被　仰付候ニ付、今日　御館ニ罷出、月番面謁、畢る御奉行所ニ〻御書御口上書、且御家老中ゟ御番頭中ニ〻御用狀、御用人ゟ大音六左衛門ニ相渡之、

○惣御番手名充ハ去十一日御目見ニ被仰付候處ニ見る、

七月十九日、雨、

△長崎御番所爲御見廻、今朝七時御供揃ニて、六時過　御發駕、佐嘉通被遊　御越座、

御供　彦兵衛

久野四兵衛

七月廿八日、晴後雨、

△左〻面〻長崎表御備増爲御用、明廿九日被指立候ニ付、今日　御館ニ罷出、月番面謁、持參〻御狀五助ニ相渡之、

小川專左衞門

普請奉行　古藤五助

分間方　山本三之丞　御納戸組繪師喜六悴　御雇中無足組　尾形仁兵衞

右委ハ御内用ニ付、御備増記ニ載之、

穴生方　戸波久右衞門

八月朔日、晴、

△殿樣長崎表御番所御見廻御仕廻、昨夜二日市御止宿、今朝七時三寸引上御供揃ニる同所御發駕、所〻御小休被遊、　御馬上ニる上〻御橋通、四時比　御歸城被遊、

八月十七日、晴、

△於奥御射場御玉廻(マヽ)被遊、

△就右、左〻面〻ニ發打方被　仰付之、

播磨　又之進

彦兵衞　久太夫

小河專太夫　小川主計

浦上三郎兵衞　宮内十郎右衞門

竹田助之丞　小川專左衞門

○久野四兵衞・隅田市左衞門儀ゟ不快引入ニ付、不罷出、

大頭　野村勘右衞門　同上　加藤三郎左衞門

九月十五日、曇、

△長崎御番所爲御見廻、今朝七時早〻御供揃ニる、無程　御發駕、唐津通り　御越座被遊、

御供　久太夫　小川主計

宮内十郎右衞門

九月十六日、雨後晴、

△播磨儀、長崎阿蘭陀船帆影爲見隱、今日出立、

九月廿四日、

△殿樣長崎御番所　御見廻御仕廻、昨夜夜(マヽ)肥州濱崎驛　御止宿、今朝七時早〻御供揃ニる

同所　御發駕、前原　御晝休、今宿姪濱御小休ニる、下〻橋通、七半時過被遊　御歸城、

十月八日、雨、

△伊丹九郎左衞門大頭儀、長崎一番〻被差越置候處、交代相濟、以後御内用筋ニる居殘被仰付置候處、右御用相濟、歸路陸路相願、今日歸着、直ニ　御館ニ罷出、月番面謁、

△右ニ付、御用人迄御機嫌相伺之、

△西川勘兵衞石火矢役頭取儀、長崎一番〻被指越置候處、御内用筋有之、直ニ居殘被　仰付、福嶋兵藏石火矢役頭取同所ニ御内用筋ニる被差越置、兩人共右御用相濟、歸路陸路相願、今日歸着、直ニ　御館ニ罷出、月番面謁、

十月十一日、晴、

△今朝八半時御供揃ニる、奈多被遊　御渡海、於同所、砲術打方被　仰付、　御覽被遊、夜五時過被遊　御歸座、

十月十四日、雨、

△播磨儀、於長崎、阿蘭陀船就歸帆、彼地ニ被差越置候處、右船先月廿日出帆、今月七日帆影見隱候ニ付、同八日同所出立、昨十三日歸着、今日出殿、但書略、

福岡藩主奈多砲臺巡視

蘭船歸帆

一右ニ付、　御機嫌相伺之、且在崎中　御尋〻御禮御用人迄申上之、

十月廿六日、曇後晴、

△播磨儀、於長崎、阿蘭陀船帆影爲見隱、被差越置候處、帆影見隱、去十三日歸着ニ付、今日被爲召、御座間ニおゐて、　御目見被　仰付、御熨斗鮑頂戴被　仰付之、

右ゟ歸着當日・翌日間　御目見被　仰付儀ニ候得共、其節少〻　御不例被爲　在候ニ付、本文〻通、

△同人儀、長崎爲土産、左〻通小書院御疊椽ニおゐて奥頭取迄差上之、

緋毛氈　二　枚

△伊丹九郎左衞門大頭儀、長崎一番〻被差越置候處、交代相濟候以後、御内用筋ニる居殘被　仰付置候處、右御用相濟、去八日歸着、今日於小書院、　御目見被　仰付之、

出席　月　番

披露　御用人

△西川勘兵衞石火矢役頭取・上杉作右衞門伊丹九郎左衞門乘船小船頭儀、同斷ニ付、於御弓〻間、　御目見被　仰付之、

△長崎二番〻〻内加番〻面〻歸着ニ付、今日於御廣間　御目見被　仰付之、

十月晦日、晴、

△長崎二番〻〻交代相濟、飯田角左衞門大組頭　御番頭〻内　歸路陸路相願、昨日歸着、今日　御館ニ罷出、月番面謁、

右歸着ニ付、御目見被　仰付候處ハ來八日〻記ニ見る、

十一月三日、雨後晴、

△長崎二番〻〻面〻交代相濟、昨二日着船、今日御館ニ罷出、月番面謁、

中老　大音六左衞門　　大頭　明石助九郎

馬廻頭　根本孫三郎

十一月八日、曇、

△長崎二番〻〻面〻追〻歸着ニ付、今日於小書院　御目見被　仰付之、

中老　大音六左衞門　　大組頭　飯田角左衞門

大頭　明石助九郎　　馬廻頭　根本孫三郎

△右同斷ニ付、表ニ被遊　御出、御目見被　仰付之、

出席月番　披露　御用人　惣御番手中

○參考

〔甲子夜話續編〕○内閣記錄課所藏本　通航一覽續輯附錄所載

一長崎港ヘ異船の入津する所ゝて、山岸三國、たゝ一方通す、其岸ゝ砲場を七處置き大砲を設ゝ、御石火矢臺と稱する是なり、場ニ地形高低をあれどもその設ゝ一なり、ゝの場ゝ昔年吾が天祥院殿忠志の旨を申上給ひ、官の允を承て、ゝの設け始れり、又今年天保辛卯、紅毛の貢物を護〻て長崎の小通詞今村猶次郎なる者出府す、我が莊ゝ識る者あつて訪ふ、其間の話ゝ曰く、長崎ゝ御臺場近頃福岡・佐賀の兩侯より修繕を加へらるゝ迚、石垣を高築上けられて、見分ゝ立派ゝ見ゆれども、此頃入津の蠻長語れるゝ、砲臺高壯なりと雖とも、若砲を發するゝ及むゝ舶ゝゝ中らず〻て、皆上を越べ〻、古昔砲臺の若きゝ悉く舶に的〻て尖鉛なからん、何ゝ〻て今ゝかゝ改修あるゝとやゝ、清因て思ふニ、天祥公の武備ゝ長下給ひ、且つ官家ゝ忠なるゝと、今ゝ至て益〻其遺念の在る所を知れり、恨むらくゝ筑・肥の兩侯見分を專とゝて、實用ゝ及むす、贖へ蠻奴の笑を招ゝ、歎すべ〻、

五月 小盡 朔己卯

朔日己卯 姫路藩主酒井忠實雅樂頭 就封ニ依リ、登營ス。

〔愼德院殿御實紀〕○續德川實紀所載

五月朔日、酒井雅樂頭就封の暇賜ひ、肥前國延吉の御刀・御鷹・馬を下さる、

酒井忠實賜暇

〔弘化年錄〕○內閣記錄課所藏本

五月朔日

御鷹
御馬被下
御刀代金十五枚
右大將樣方
卷物十

御座間

御暇

初る 酒井雅樂頭

〔奏者番〕牧野康哉日記〕○維新史料編纂會所藏本

五月朔日、○中略、

一夫より老衆黑鷲御杉戸際に御列座、酒井雅樂頭罷出、御禮申上、并宗門供連〻義被 仰渡之、

〔諸用留〕○內閣記錄課所藏本

○五月朔日

達〻覺

酒井雅樂頭

右御暇ニ付宗旨〻儀、且參勤〻節供人數少ニ召連候樣、可達事、

忍藩主松平忠國下總守 大房崎安房國平郡ニ新砲臺築造セラルルヲ以テ、富津上總國周淮郡・竹ケ岡上總國天羽郡ノ戍兵ヲ北條安房國安房郡ニ移送センコトヲ幕府ニ上申ス。

〔忍藩主松平忠國屆書〕○內閣記錄課所藏本 諸用留所載

五月朔日

○五月朔日幕府へ

松平下總守（忠國、記事）

（朱書）「領分房州平郡大房崎ゟ新規臺場取立、御備持場ニ被仰付候付、同所寂寄ゟ陣屋致補理、家來爲引移候旨屆」

私領分房州平郡大房崎ゟ新規臺場取建、御備持場ニ被 仰付候付、同所寂寄北條村ゟ陣屋致補理、富津・竹ケ岡ニ差置候家來共爲引移候樣致度奉存候、此段御屆申候、以上、

五月朔日

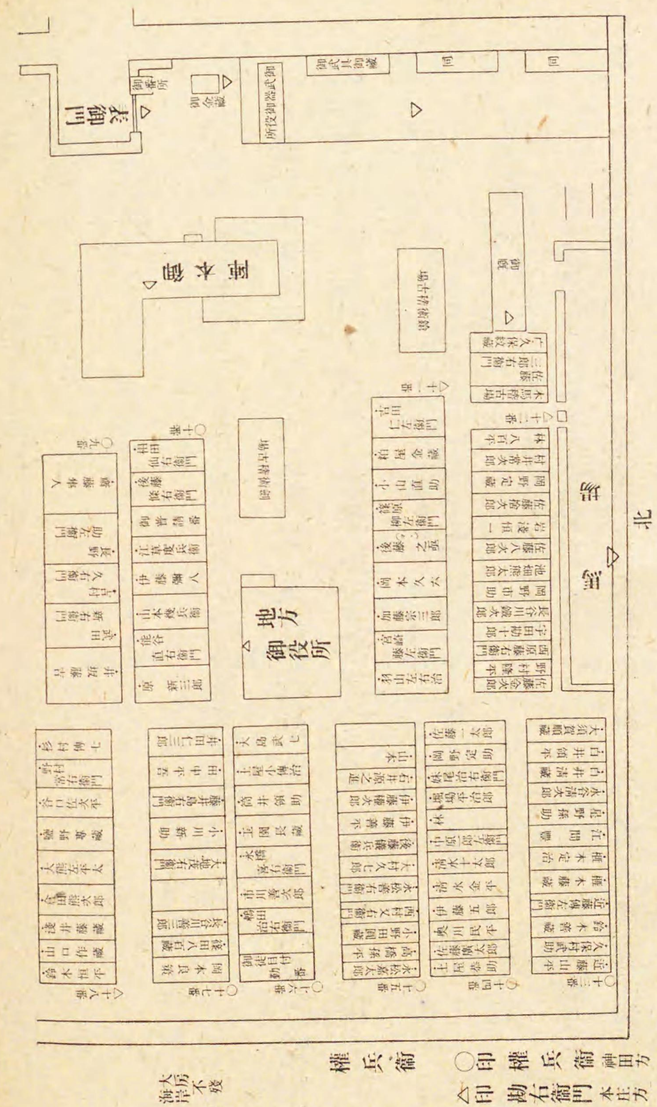
松平下總守

弘化四年五月朔日

弘化四年五月朔日

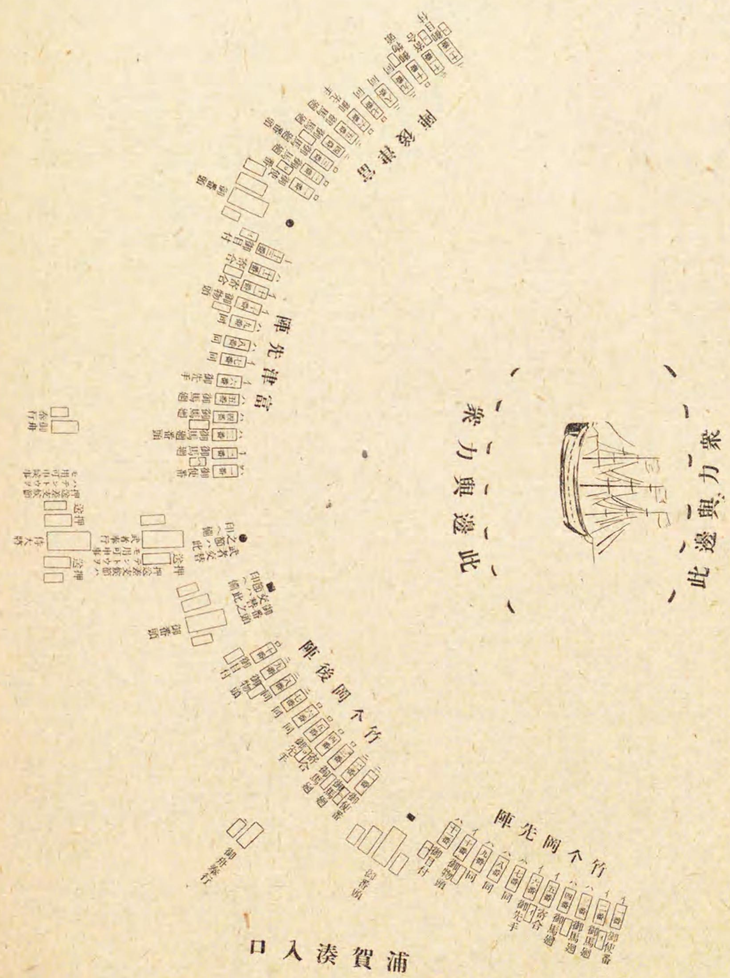
〔弘化四年五月〕忍藩北條陣屋之圖

〇尾崎才兵衛所藏



弘化四年五月朔日

〔弘化四年五月〕忍藩海岸警備之圖〕〇尾崎才兵衛所藏



武器類移送ニ際シ浦賀奉行改役ノ出張ヲ請フ

〔忍藩願書〕〇内閣記錄課所藏本御備場御用留所載

〇六月二十一日幕府へ

（朱書）「未六月廿一日、伊勢守殿、竹村長十郎を以御下ケ、同七月廿六日、御同人ゟ正助を以返上、」

伊（阿部正弘、老中）勢守

松平下總守家來内意

下總守領分安房國大房崎に、新規御臺場取建候樣被　仰付候ニ付、是迄富津・竹ケ岡兩御臺場ニ備置候大銃其外武器類、同所に引移候付ゐて、道路山坂難所多く、運送自在難成御座候付、海上船ニゐ積送り候樣仕度奉存候處、富津・竹ケ岡ゟ安房國に海上通船ハ、浦賀御役所ニて御改を請候儀ニ御座候、右ゝ通御座候ゐて、海上風模樣ニ寄、向地に渡兼候儀も有之、再ゝ場所に積渡候ニも、風順次第ニゐ果敢取兼候内、自然異國船渡來ニゐも御座候得ゐ、急速ゝ間ニ合兼候儀ニ付、此度差送候大銃其外共船積ゟて差送候分ゐ、富津・竹ケ岡兩所共、御改ゝ御役方御差出被下場所ニて御改を請、直ニ大房崎幷夫ゝ場所に差送り申度奉存候、非常御用ゝ儀、出格ゝ

思召を以、申上候通被　仰付被下度段、各樣迄申上候樣被申付候、宜御執成被下度、此段奉願候、以上、

松平下總守家來

六月廿一日　和田孫兵衛

〔海防掛上申書〕（御備場御用留所載）

○七月老中へ

書面〻趣篤と勘辨仕候處、此度場所替被　仰付候ニ付、富津・竹ヶ岡兩御臺場ニ備置候大銃其外武器類、船積ニて安房國大房崎新規御臺場ニ引移候付ゐて、浦賀御番所より改方〻者、其場所ニ罷出候樣仕度趣、申上候次第、無餘儀筋ニも相聞候得とも、御番所〻儀ハ、海上〻御關所、畢竟其要所ニ相構、往返を見改候儀、御取締〻筋ニ有之候得共、他ニ罷出相改候儀可然ちハ難申上、尤異國船渡來も仕、自然〻儀等有之候節ハ、於浦賀奉行方ゑ非常〻取斗方も有之、差支ニ不相成候趣ニ付、願〻趣難被及御沙汰旨、被仰達候方と奉存候、依之申上候、

七月　深谷遠江守（盛胤、大目付）　石河土佐守（政平、勘定奉行）　松平河内守（近直、勘定奉行）　佐々木脩輔（顯綱、勘定吟味役）　松平式部少輔（近親、目付）

忍藩ノ請願ハ聽キ屆ケ難シ

〔御備場御用留〕（内閣記錄課所藏本）

（朱書）「未七月廿三日、伊勢守殿、黑澤正助を以御下ケ、同月廿六日、同人を以返上、」

覺

六月廿一日、松平下總守家來差出候、大房崎陣屋ニ是迄富津・竹ヶ岡ニ差置候大銃等船ニて相廻候節、浦賀改〻儀、出役ニゐ改請度旨〻內意、都合も有之候ニ付、此節差圖有之候樣致一度旨、申出候事、

七月廿三日　稲葉清次郎（正典、目付）　羽田龍助（利見、勘定吟味役）

（朱書）「未八月朝日、伊勢守殿、正助を以上ル、同十三日、御書取添、同人を以御下ケ、翌四日、同人を以返上、」

書面申上候趣、別紙下札を以申上候通、被仰渡候旨承知仕候、

八月三日　深谷遠江守　石河土佐守　松平河内守　佐々木脩輔　松平式部少輔　稲葉清次郎

別紙松平下總守大房崎新規御臺場に鋲炮移替〻儀に付相伺候書面、評議〻趣、下ケ札を以申上候通に御座候處、右ハ此度松平肥後守方におゐて、江戸ゟ上總國竹ケ岡迄鋲炮船積に差遣候節、玉目武器員數等家來ゟ〻印紙を以、浦賀奉行に斷書差出候積可仕旨、申上候處、其通被仰渡、左候得て、下總守方に付是迄上總國富津・竹ケ岡兩御臺場に備置候大銃其外武器類、此度安房國大房崎に海上船に付積送り候儀も、肥後守同樣鉄炮玉目武器員數等、家來ゟ〻印紙を以浦賀奉行に斷書爲差出可然旨、御尋御座候處、浦賀御番所改方御規定〻儀て、江戸ゟ上總國竹ケ岡村に相廻候分て、鉄炮玉目武器員數等、家來ゟ〻印紙を以、浦賀奉行に斷書差出、竹ケ岡隣村荻野村ヨリ安房國〻分陣屋往返〻儀て、浦賀御番所に付相改候御規定に有之、松平下總守方富津・竹ケ岡兩所ゟ、鉄炮其外武器類、大房崎に相廻候儀て、浦賀御番所打越候儀に付、御規定〻通相改候儀有之候旨、浦賀奉行申聞候、肥後守方ちて、聊場所〻相違に付改方差別有之候儀に付、右〻趣を以取調、別帋下ケ札〻通評義仕、申上候儀に御座候、御尋に付此段申上候、以上、

江戸ヨリ上總竹ケ岡迄武器輸送ノ場合ハ家來ヨリ印紙ヲ以テ浦賀奉行ニ屆出ヅ

竹ケ岡ヨリ安房分陣ヘ武器等往返ノ儀ハ浦賀奉行所ノ改印ヲ要ス

七月

一

深谷遠江守
石河土佐守

扣

伊勢守

松平下總守に達

書面〻趣て難被及御沙汰候事、

松平河内守
佐々木脩輔
松平式部少輔
稲葉清次郎
羽田龍助

深谷遠江守
石河土佐守
松平河内守
佐々木脩輔 承之
松平式部少輔
稲葉清次郎
羽田龍助

一日庚辰　睦宮伏見宮卿○後兵部○貞敎親王ヲ仁孝天皇猶子ト爲ス。

〔議奏東坊城聰長通達書〕○東京帝國大學所藏本 德大寺實堅武家傳奏記錄（議奏往來）所載

○五月二日武家傳奏へ

伏見睦宮、

仁孝天皇御猶子被

仰出候、仍申入候也、

五月二日

徳大寺（大納言殿）

坊　城（前大納言殿）

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○五月二日京都所司代へ

伏見睦宮、

仁孝天皇御猶子〻儀、今日被

仰出候、爲御心得申入候、以上、

五月二日

酒　井（若狹守殿）

聰　長

坊　城

徳大寺

睦宮仁孝天皇猶子ニ内定

〔伏見宮使者口上書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用懇）所載

○三月二十四日武家傳奏雜掌へ

御口上覺

睦宮御方

先帝樣御猶子〻儀、御願被成度思召候間、可然被及御沙汰候樣、宜賴思召候、以上、

伏見宮御使

後藤縫殿頭

三月廿四日

徳大寺（大納言殿）

坊　城（前大納言殿）（御難祭御中）

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

○三月二十五日京都所司代へ

今廿五日於宮中所司代ゟ御直達

伏見睦宮

仁孝天皇御猶子〻儀被相願候、則及言上候處、願〻通被

仰出度　思召候、

弘化四年五月二日

御内慮〻趣關東ニ宜敷被申入候事、

三　月

〔京都所司代通達書〕〇德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

〇四月武家傳奏へ

伏見睦宮

仁孝天皇御猶子〻儀被相願、被及言上候處、願〻通被

仰出度

思召候、

御内慮〻趣則關東ニ相達、及言上候處、可爲

御内慮〻通旨被

仰出候間、此段御兩卿ニ御達可申旨、年寄共ゟ申來候事、

四　月

〔武家傳奏達〕〇德大寺實堅武家傳奏記錄（二條往來）所載

〇四月二十九日京都所司代へ

伏見睦宮

仁孝天皇御猶子〻儀被相願、及言上候處、願〻通被

仰出度　思召候、

御内慮〻趣則關東ニ被相達、被及言上候處、可爲

御内慮〻通旨被

仰出候段、老中方より申來候由、被示聞〻趣令承知、及言上候處、

御機嫌〻御事候、猶追ゝ可被

仰出御沙汰ニ候、以上、

四月廿九日

酒井——坊城——

德大寺——

〔伏見宮使者上申書〕〇德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

〇四月二十九日武家傳奏へ

睦宮御方

仁孝天皇樣御猶子、御願〻通來ル二日、女房奉書を以可被　仰出旨被仰達、被成御承知畏

思召候、尤日限御差支無御座候、以上、

四月廿九日

伏見宮御使

後藤攝津守

〔所司代日記〕○子爵稲葉正凱所藏本

七月朔日

一月次〻禮、例〻通請之、

一伏見殿

御猶子被　仰出候付、從

公方樣　右大將樣

御簾中樣、伏見殿・伏見入道宮に被遣物、家司に相達候ニ付、自分平服式日ニ付麻上下〻儘、大書院例、

席正面着座、家司取次引披露、是にと及會釋、近く進ミ候間、

伏見殿　御猶子被

仰出候付、御目錄〻通被遣候段申達、御目錄相渡之、

但伏見殿・伏見入道宮相兼家司壹人罷出候ニ付、右〻通ニ〆相濟、

〔菅　葉〕○五條爲定日記宮內省圖書寮所藏本

八月十一日、戊午、時〻小雨、○中略、伏見宮御家來吉田式部、贈書札于雜掌云、睦宮御方、先

帝御猶子〻義、先達御願〻通被　仰出、右御弘、來廿三日御催〻旨、爲御知云〻、

八月廿三日、庚午、晴、伏見睦宮、先帝御猶子先達御願〻通被　仰出、今日御弘メ〻由、過日有爲御知、仍今日可參賀〻處、依所勞以使申御悅了、

〔纂輯御系圖〕

第十九
邦家親王　○中略、

第廿
—貞敎親王　母藤原景子、左大臣政熙女、天保七年九月十七日生、稱睦宮（ヨリ）、弘化四年爲仁孝天皇猶子、嘉永元年爲親王、文久二年十月廿五日薨、廿七、（執系）

幕府、西丸留守居筒井政憲紀伊守○後肥前守・大目付深谷盛房遠江守・目付松平近韶式部少輔等ノ海防鞅掌ノ勞ヲ賞シ、物ヲ賜フ。

〔老中達〕○內閣記錄課所藏本諸用留所載

○五月二日西丸留守居筒井政憲へ

扣　廻ー

申渡候書付、列座、

弘化四年五月二日

五月二日

金三枚
時服二

筒井政憲ノ海防鞅掌ノ勞ヲ賞ス

御備場筋〻儀ニ付、去年以來取調物等をも仕、彼是骨折候ニ付、拜領物被
仰付之、

右於芙蓉間、伊勢守申渡、老中列座、若年寄中侍座、

（朱書）「二日持歸、爲廻〻備前殿ゟ遣之、」

西丸御留守居
筒井紀伊守（政憲）

伊勢守

○五月二日大目付深谷盛房等へ
扣　廻〻
申渡候書付、芙蓉間ニ列座、

五月二日

金三枚
時服三充

深谷盛房
石河政平

大目付
深谷遠江守（盛房）
御勘定奉行
石河土佐守（政平）

松平近直

金二枚
時服二

松平近韶

小出英美

金三枚
時服二充

御備場向〻御用相勤、骨折候ニ付、拜領物被
仰付之、

右於芙蓉間、伊勢守申渡、老中列座、若年寄中侍座、

金貳枚

同一枚

弘化四年五月二日

松平河内守（近直）
御留守居番次席
御勘定吟味役
佐々木脩輔

御目付
松平式部少輔（近韶）
小出織部（英美）
西丸御裏門番〻頭次席
御勘定吟味役
羽田龍助

御勘定組頭
後藤一兵衛
同
内藤茂之助

四月廿九日

○五月朔日禁裏附へ

明樂大隅守殿　　德大寺大納言

內藤安房守殿　　坊城前大納言

明後三日午剋、酒井若狹守可有參　內〻旨被仰出、則若狹守ニ申入候、仍申達候、以上、

五月朔日　　承知〻旨返書來ル、

追ゟ明後三日午剋、伊奈遠江守・小堀勝太郎・中井岡次郎御所ヶ可致參上由、若狹守ヶ相達候、爲心得申達候、以上、

○京都所司代等參內ノ日、屢々苒延ス。次ニ之ニ關スル史料ヲ收ム。

〔禁裏附上申書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月四日武家傳奏へ

德大寺――　　明樂――

坊城――　　內藤――

以手紙啓上仕候、然ゟ來七日、清涼殿　常御殿御普請濟ニ付、酒井若狹守參內、拜領物御座候ゟ茂差支無御座候哉、內〻承合候處、何等〻差支無御座候段申越候、依之此段申上候、以上、

四月四日

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月七日禁裏附明樂茂正へ

明樂――　　德大寺――

坊城――

預示令披見候、然ゟ

兩御殿御普請御修復出來ニ付、酒井若狹守拜領物且御料理等被下候節手續書幷伊奈遠江守以下同斷手續書共貳通、被差越之、遂一覽候、右手續書〻通ニゟ相振候儀無之候、且被差越候兩通ゟ留置候、以上、

四月七日

○四月二十二日禁裏附へ

賀六左衞門・同出役山本庄右衞門銀拾五枚ッヽ、御勘定吟味方改役並山口小一郎・力石勝之助同斷、支配勘定松野三平次銀拾枚、御徒目付組頭格御徒目付吉川一郎兵衞銀拾五枚、御徒目付田中甚左衞門銀拾枚、以下小役人名前略、房・總御備場〻儀取調仕、骨折候ニ付、拜領物被　仰付之、

前水戸藩主德川齊昭（前權中納言）書ヲ老中阿部正弘（伊勢守○福山藩主）ニ寄セ、藩士ニ調練ヲ奬勵シ、且醫師・僧侶ニ俗體ヲ許可スベキヲ後見三連枝（高松・守山・常陸府中）ニ諭旨センコトヲ囑ス。正弘、復書シテ藩主自ラ處置スベキヲ答フ。

〔德川齊昭書翰〕（○公爵德川圓順所藏本　新伊勢物語所載）

○五月二日阿部正弘宛

日〻不定〻候候へ共、先以萬福勇猛雀躍〻至ニ存候、扨ハ下官、去ル辰年（弘化元年）御咎〻節、下官了簡ニて扱候義不用、前〻〻通りとの御達有之候處、右ハ大意の御達ニて、下官方申ハ如何ニ候へ共、國家の爲都合宜敷義ハ、下官とても先ッハ改不申候へハ、譬右樣の御達有之とても三連枝初有志ニ候へハ、是非嚙分、是非ニ不拘、以前〻通りニさへ改候へハ、宜敷と申義、實は如何況共被存候、外〻の義ハ暫指置、追〻御〻通有之、夷狄の模樣も日夜心配致候

西洋諸國ノ戰鬪法ハ和漢ノ仕組ト異レリ

調練出精スベキ旨下命セラレタシ

醫師僧侶ノ俗體許可ノ旨ヲ下命セラレタシ

處、連打の義ニ付てハ七ヶ條の御尋の中ニものり候へ共、尤御尋のミまて止候樣ニとの御達ニも無之、前〻〻義初申候ハ、天保寅年（天保十三年）海防掛土井大炊頭（利位）方の御達ニ、平常大炮等の用意可被申付置、蠻夷〻諸國戰鬪〻仕組、和漢〻制度とハ相違ニ付、利方〻軍器別段用意も可有之、參勤〻面〻其覺悟ニ成防禦〻仕方兼て心懸置可被申云〻等の御達ニよりて初候義、且諸侯ニても追〻致、貴兄方ニ成るも西洋〻仕組其善ふる所ハ被取用候況ニ薄〻承り及申候へハ、下官方ニて致候ゑも不苦義ニ可有之哉、尤小祿無人の拙家御足り合ニハ相成間敷候得共、一人ッヽも非常〻節ハ　公邊御爲ニ相成候者多致置度候へハ、宜敷事ニ候ハヽ陣立其外下官代〻通りニ致シ、素拂調練出精稽古致サセ候樣致度候、日〻稽古致サセ候てさへ行屆兼候義、相止候てハ非常〻節、迚も御間ニ合兼申候故、連枝共へ御達ニ致度候、尙又緣家土屋采女屋敷ニてハ、毎〻方八百目迄打候由故、下官屋敷ニても一〻日迄ハ矢場打素拂等打候義、是亦御免ニ致度候、尤矢場のミニ候、調練等の節ハ、大小筒何レも素拂斗ニ候、一醫師俗躰俗名等〻義に付、先達御問合申候所、

京師を初　公邊ニも有之、其他ニも有之醫師ハ剃髮ニ無之候てハ不相成と申義決て無之、尙又下官醫師の義、於　公邊彼是御沙汰可有之筋、且て無之よし御申聞有之候故、右〻段三連枝共へ申聞候處、老中方達無之候てハ直兼候故、老中方達有之樣致度との義、讃州（松平頼焉、高松藩主）方申聞有之候所、ヶ樣の瑣細〻義、各方へ御咄申候も如何ニ候へ共、不肖の者共、ヶ

醫師ニシテ僧官ヲ用ヰザル所ハ剃髪ノ要ナシ

様存候も尤ニ候へハ、無已御咄申候故、是亦御序の節、讃岐守へ醫師并坊主等俗名俗体ニ致候様、御申付可給候事、

但登　城等の供ニ召連候者とても、親攝方俗躰俗名の醫師被召連候へハ、勿論不苦事と存候、長刀さへ不持、槍爲持候へハ不苦事と存候、　公邊御醫師の義ハ、僧官を望候者故、剃髪の義尤ニ候へ共、僧官を不用所ニてハ、剃髪ハ相當不致候、僧官ハ、五山の僧亂國ニ醫師を致候より初候義と被存候、僧官らけニふらハ剃髪ニて宜敷候へ共、迚も下官の醫師抔、僧官らけ五位ニ相成候へハ家老の上席ニも相成、さらニ用ニ立不申故、古へハ有之候へ共、近頃ハ一切止候上ハ、剃髪ハ相當無之候、

前々ニ認候義、ゐまりおさ〳〵致候て、御分り如何と、左ニ認申候、

一陣立等の義、統て中納言代の通り改不申、且於江戸水戸素拂調練の義も出精致サセ候様ニと申趣、

竝中納言ゟ問合有之處、於屋敷一〻目筒目當打、并調練の節素拂不苦、但不相成事ニ候ハヽ、此ケ條御削、

一醫師并坊主共俗体俗名ゝ義、中納言ゟ問合有之處、不苦候、并登　城節召連候義、勝手次第の事と申趣候、

御書取讃州へ御達可被下候、ケ様の事老中抔へ御賴申候も無埒も事に候へ共、當節無已故御賴申候也、

綿服著用ノコト

五月二日

勢州殿參　　齊昭

別紙、先年登　城節、供の者綿服着用ゝ義、老中へ相達候處、太田備後守ゟ勝手次第致候様指圖有之、其後ハ登　城の節も一統綿服用サセ候程の義ニて、國許ゟ其以前ゟ不殘綿服ニ限り、近頃漸〻家中も勝手相直り申候處、此春又〻絹布指ゆるし候ゟニて、勝手宜敷者ハ大ニ悦ひ、婦人抔ハ別て悦候由ニ候へ共、押あへてハ難義致候人多相聞え、是ハ上へ立候役方好ゟ出候義との由ニ候處、登　城の節の供ニてさへ綿服不苦よしニて、追〻綿服用サセ候義ニ候へハ、此義も御書添ニて、江・水共綿服ニ限候やう致度候、勝手宜敷者の絹布着用不相成候てゐまると申ハ、只美麗ニ不相成迄ゐて、勝手悪敷者又下〻迄の難義ハ、今日の暮ニかゝハり候義ニ候へハ、江・水とも綿服ニ致候様御達ニ致度候、勝手次第と申言葉ハ宜敷様ニ候へ共、勝手次第と相成候へハ、誰も勝手悪〳〵く見え候ハ迷惑故、難義ゐろ〻も絹布を用候様相成申候、尚此節の沙汰承り申候へハ、絹布を不用者ハ天狗のよし申候故、尚〻絹布を用候様相成申候て、人の痛ニ相成申候由故、御書添御達ニ致度事ニ候、尚勝手不宜家中ゟ借上等も不相成ニ付、時〻内願等致候處へも相當致不申候ゑ、

〔阿部正弘書翰〕〇新伊勢物語所載

〇五月十四日徳川齊昭宛

過日ゟ貴翰被成下、拜見仕候、殊〻外不順〻候御坐候得共、倍御清榮奉賀壽候、陳ゝ夷狄〻儀ニ付、日夜被成御心配候處、去ル辰年(弘化元年)御退隱之節、申達候義も有之候付、於御家近來調練等相止居候趣ニゟ、縷〻被仰下、陣立其外尊君御代〻通り幷素拂ゟ稽古〻儀等、御連枝方へ達ニ相成候樣ニと思召、且御醫師俗体俗名等〻儀ニ付、先達ゟ御請申上候趣を以、讃州へ被仰示候處、同列共ゟ達有之候樣致度旨、同人ゟ申上候ニ付、是又讃州へ申達候樣縷〻被仰下候趣、拜承仕候、調練等〻義ハ、如仰、日〻稽古候てさへ行屆兼候義ニ候處、其儘相止居候ゟハ、非常〻節、御間ニ合兼可申ゟ〻義、實ニ御尤ニ奉存候間、御陣立其外御代中〻通、有之度御儀ニ存候、乍併此儀表向御問合も無之處、唯今廉立私共ゟ申達候ゟ如何ニ候間、尊君より讃州初へ御示談被爲在候上ニゟ、御代中〻通被成可然御儀ゟ奉存候、尤御退隱後暫御中絶〻事故、當節一ト通り御屆有之候上、御始ニ相成候ゟ可然哉と奉存候、御醫師俗躰俗名等〻儀ハ、過日も申上候通、聊不苦儀ニ御坐候得共、是亦表向御問合も無之事故、同列共ゟ直ゟ申達候事も難仕、一躰讃州場合ニても、老中ゟ達有之樣致度旨申上候段ハ、不相當〻樣ニ奉存候間、如何樣ニも御示談被爲在、同人始家老共承伏〻上ハ、公邊

調練ノコトハ自ラ三連枝ヘ直接示談セラレタシ

醫師俗體俗名ノコト老中ヨリ示達スルハ不當ナリ

ニゟ御差構無之事ニ候間、改て御問合等ニ不及、御勝手次第俗体俗名被仰付候樣奉存候、且又御別紙ニ綿服〻義、縷〻被仰下候御趣意、御尤〻御儀奉存候間、是又御趣意〻通、御連枝方へゟ得御示談被爲在可然御義と存候、右等〻處ハ御家政向〻事故、私共ゟ容易ニ達〻等致候義ハ難相成候間、如何樣ニも御連枝方幷御家老共へ被仰示候樣存候、將又於御屋敷一貫目御筒矢場打素拂〻儀、御免ニ相成候樣蒙　仰候處、此儀ハ　公邊御規矩も有之候事ニて、何レ取調〻上跡ゟ否可申上候、左樣思召可被下候、多忙ニ取紛毎〻御請延引仕候段、御容恕可被成下候、御請迄如斯御座候、草〻以上、

五月十四日

阿部伊勢守

御請

〔徳川齊昭書翰〕〇新伊勢物語所載

〇六月十五日阿部正弘宛

過日ハ貴書忝令披閲候、先以大暑〻節候へ共、無御恙御精勤雀躍いと〻候、扨ハ御申聞ニて不苦候へハ早速三連枝共へも相達可然處、當世態無益の樣ニも被存候故、又とくと了簡の上三連枝共へ咄可申存候、何ニ致候ても、於　幕府不苦との御申聞有之上ハ、いつニても改候義ハ相成義、右御答を取置不申候へハ、追て奸臣共自分〻〻勝手ニて致候樣ニハ不

綿服著用ノコト右同斷

申、是もいれ共　公邊ゟ御指圖故無已云〻、自分をのゞれ　公邊へ押付候ハ指見えニ有之候處、右〻御答有之上ハ、左樣の口ハきらセ不申、何分ニも　公邊御不德ゟ不相成樣致候心得ニ候、扨又其節御問合申候一貫目筒〻義ハ、追て御挨拶可有之よしの處、今以御分りニ相成不申候哉、土屋方の義も、先日御咄申候へき上中下屋敷の次第ニて、成不成の譯ハ無之、御郭の內外ニて不相成ゟとも存候、土屋ニて八百目相濟候程ニ候ハヽ、礫川屋敷の義ハ、御郭外ニ候へハ、相濟可申哉と存、御問合申候事ニ候、

一○中略、

六月十五日

二白、○中略、

勢　州　殿　參

齊　昭

酒井忠義參

三日辛巳　京都所司代酒井忠義若狹守○小濱藩主・京都町奉行伊奈忠告遠江守等ノ常御殿修營ノ勞ヲ賞シ、物ヲ賜フ。

〔橋本實久日記〕○東京帝國大學所藏本

五月三日、辛巳、晴、○中略、次參內、依番之、今日、若狹侍從忠義朝臣參內、於小御所御對面、候詰、昨年以來中殿・常御所等御修理或造替〻御所有之、申沙汰被賞之、其後於候所賜酒饌、亦賜物有之、酉剋退出、

內酒饌並物ヲ賜フ

〔御用日次〕○德大寺實堅武家傳奏記錄東京帝國大學所藏本

五月三日、巳、晴、

一　御取締御用掛被　仰付候、右御吹聽申上候、　伊奈（忠告、京都町奉行）遠江守入來

別段

清涼殿　御常御殿御普請御用相濟候ニ付、御褒美拜領仕、難有仕合奉存候、右御禮申上候、

伊奈忠告拜領物御禮

右同樣、掛り一同〻者共ニ茂拜領物仕、右御禮申上候、　小堀（京都郡代）勝太郎入來

一　中井（禁裏六工頭）岡次郎同

一　兩御殿御普請御修復ニ付、拜領物仕、難有仕合奉存候、右御禮申上候、

京都所司代與力以下拜領物御禮

下役一同ニ茂拜領物仕、難有仕合奉存候、右御禮も申上候、

酒井若狹守（忠義、京都所司代）殿與力

大塚祐左衞門

一

一　加藤三郎
一　酒井若狭守殿同心
一　上田與作
一　三浦廉之助
一　御入用取調役
一　猪俣英次郎
一　御扶持人棟梁
一　辨慶良次郎
一　棟梁
一　大東相摸掾
一　岡嶋彌太郎
一　平岡勝之助
一　今村嘉作
一　山本岩三郎
一　明樂大隅守組與力（浅正、禁裏附）

一　窪田平右衛門
一　佐和善十郎
一　内藤安房守組與力（思明、同）
一　村上百助
一　黒田小左衛門
一　伊奈遠江守組與力
一　上田鉄之助
一　石嶋五三郎
一　田中寛次郎
一　水野下總守組與力（重明、京都町奉行）
一　本多順之助
一　御普請役
一　中村運八郎
一　明樂大隅守組同心
一　八木庄之進

一　黒田又市

一　内藤安房守組同心
　　井上總右衛門
　　平井林右衛門

一　伊奈遠江守組同心
　　大嶋勝五郎
　　森　孫六
　　上林平兵衛
　　笹井作次郎

一　水野下總守組同心
　　平川鉄藏

一　小堀勝太郎元〆
　　小田彦兵衛

一　小堀勝太郎手代
　　林覺兵衛

右〻輩

一　鷹屋熊八郎
　　中川庄次郎
　　穂積嘉作
　　塚原半助
　　山本純藏
　　武富幸作

兩御殿御普請御修復ニ付、拜領物仕、難有仕合奉存候、右御禮申上候、

一　明樂大隅守　入來
　　内藤安房守　同

清涼殿　御常御殿御普請御用相濟候ニ付、御褒美拜領仕、難有仕合奉存候、右御禮申上候、

一　右同樣、掛り一同〻者共ニ茂拜領物仕候御禮茂申上候、

酒井若狭守殿　入來

手控ニ

弘化四年五月三日

弘化四年五月三日

今日被爲
召、參
内仕候處、於
小御所奉拜
龍顔、眞御太刀御手鑑拜領被　仰付、
御膳〻御下頂戴之、其上別段拜領物仕、誠以重疊難有仕合奉存候、右爲御禮致伺公候、

酒井若狹守

五月三日

〔酒井家御代記〕○伯爵酒井忠博所藏本

五月三日、依召參内、拜龍顔、兩御殿御修復出來ニ付、眞御太刀肥前忠吉一腰・三十六人歌合御手鑑一帖・御絹五匹拜領、且御膳下頂戴、

〔御用帳〕○德大寺實堅武家傳奏記錄　東京帝國大學所藏本

○四月

清涼殿　常御殿御普請御修復出來ニ付、依　召酒井若狹守參　内、拜領物且御

見返ニ

明樂（天隅守）

料理被下候節手續

一若狹守役亭ゟ直參
内仕候付、御時剋宜節、私共ゟ案内申遣、衣冠着用、卽剋出宅、唐御門より參　内、御車寄ゟ昇殿、鶴間着座、
一御兩卿御出會、若狹守
御機嫌相伺、今日被爲
召候御禮申述、御挨拶有之、御兩卿御退入、
一議　奏衆御出會有之、其後更ニ御兩卿御出席、御誘引、於　小御所
御對面、
但　天盃頂戴之無之候事、
一鶴〻間ニ御誘引、清涼殿　常御殿御普請御修復出來ニ付、拜領物被　仰付候旨被仰渡、眞
御太刀六位藏人持出、座上ニ置、御兩卿御授之、若狹守謹ゐ頂戴之仕、非藏人引之、尙又
御手鑑六位藏人持出、置中央、進寄頂戴、畢ゐ非藏人引之、家來ニ相渡、御兩卿ニ御禮申
上、夫ゟ御誘引ニゐ伺公〻間ニ罷越、
一大御乳人被出、口祝有之、御内儀より拜領物被　仰付候旨申達、御絹表使持出置之、若狹

守頂戴、畢る取次引之、大御乳人退入、

一御料理三汁九菜御燒物御附持出、傳　奏衆御相伴、御酒吸物臺肴重肴、御各盃、御盃事無之、御料理畢る口取菓子濃茶、畢る後菓子薄茶等出ル、頂戴相濟、今日被爲召、拜領物并御料理頂戴仕候御禮申上、御兩卿御退入、

一休息所ニ引、熨斗目半袴着替、御内玄關ゟ御臺所御門ニ退散、

一關白殿・御兩卿ニ右御禮廻勤仕候事、

右〻通相心得可申候哉、安永度兩御殿御普請并近例御修復等〻節〻振合を以、此段相伺候事、

伊奈忠告以下參内手續

四　月

御所ゟ御褒美被下候節手續

一　於休息所上間、御料理二汁七菜御菓子御酒御吸物重肴臺肴被下之、中詰給仕、

右拜領物、傳　奏衆休息所上〻間東〻方ニ着座、御附袞出席、拜領物取次持參、中央西寄ニ置、遠江守口〻間ゟ同間ニ進寄頂戴、畢る中詰引之、再出席、御禮申上、

一　於休息所中間、御料理前同斷、御酒御吸物臺肴被下之、詰番給仕、

右拜領物、傳　奏衆前同樣着座、御附袞出席、中詰持出、中間東寄敷居際ニ置之、勝太郎罷出頂戴、畢る中詰引之、再出席、御禮申上、

伊奈遠江守　小堀勝太郎　中井岡次郎　猪俣弄次郎

但取次〻間ニ罷出、出席〻儀取合ニ候積り、

一右同斷、

右同斷、

但前同斷、

一右同斷、

右拜領物、御附休息所上〻間西敷居際ニ着座、詰番持出、休息所中〻間ニ差置、下〻間ゟ中〻間ニ進寄、頂戴拜領物、隨身ニる退、再罷出、御禮申上、

但前同斷、

一　於溜り〻間、御酒御吸物臺肴被下之、給仕前同斷、

右拜領物、御附休息所中〻間南向ニ着座、詰番持出、敷居外廊下ニ差置、溜〻間ゟ進出頂戴、退再罷出、御禮申上、

但其組限進出、其節取次御賄頭御廊下東〻方ニ着座、御使番呼出、尤御禮罷出候節去、與力御普請役共一同罷出

所司代町奉行御附組　與力　御普請役

候積、

一於御臺所、御酒臺者被下之、

右被下物、書付を以御附ゟ與力に申渡、與力退座、溜〻間に同心呼寄相達、再罷出、同心に相達候御禮申上、其節諸組同心一紗出席、御禮申上、

但被下銀ハ、於勘使所與力ゟ相渡、

所司代町奉行御附　組　同心

一右同斷、

小堀勝太郎　手代

中井岡次郎支配　棟梁

右被下物、書付を以御附ゟ勝太郎・岡次郎に相達、勝太郎・岡次郎退座、溜〻間に手代棟梁等呼寄申渡、再罷出、手代棟梁に申渡候御屆御禮申上、

但被下銀ハ、勘使所ゟ相渡、

右ハ先格〻振合を以、御打合申候事、

四月

〔禁裏附上申書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月二十九日武家傳奏へ

德大寺（大納言殿）　明樂（大隅守）

坊城（前大納言殿）　內藤（安房守）

以手紙啓上仕候、然ハ來月三日、清涼殿　常御殿御修復濟ニ付、酒井若狹守參內、拜領物御座候ゟ差支無御座候哉、內〻承合候處、何等〻差支無御座候旨申越候、依之此段申上候、以上、

四月廿九日

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月二十九日禁裏附へ

明樂——　德大寺——

內藤——　坊城——

預示令披見候、然ハ來月三日、清涼殿　常御殿御修復濟ニ付、酒井若狹守參內、拜領物有之候ゟ差支無之候哉、內〻被承合候處、何等〻差支無之候旨申來候由、示〻趣令承知候、以上、

弘化四年五月三日

四月廿九日

○五月朔日禁裏附へ

明樂大隅守殿　　德大寺大納言

內藤安房守殿　　坊城前大納言

明後三日午剋、酒井若狹守可有參　內〻旨被仰出、則若狹守ニ申入候、仍申達候、以上、

五月朔日　　承知〻旨返書來ル、

追ゝ明後三日午剋、伊奈遠江守・小堀勝太郎・中井岡次郎御所ニ可致參上由、若狹守ニ相達候、爲心得申達候、以上、

○京都所司代等參內ノ日、屢々苛延ス。次ニ之ニ關スル史料ヲ收ム。

〔禁裏附上申書〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月四日武家傳奏へ

德大寺——　　明樂——

坊城——　　內藤——

以手紙啓上仕候、然ニ來七日、清涼殿　常御殿御普請濟ニ付、酒井若狹守參內、拜領物御座候ゟ後差支無御座候哉、內〻承合候處、何等〻差支無御座候段申越候、依之此段申上候、以上、

四月四日

德大寺——

坊城——

〔武家傳奏達〕○德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載

○四月七日禁裏附明樂茂正へ

明樂——

預示令披見候、然ニ

兩御殿御普請御修復出來ニ付、酒井若狹守拜領物且御料理等被下候節手續書幷伊奈遠江守以下同斷手續書共貳通、被差越之、遂一覽候、右手續書〻通ニゟ相振候儀無之候、且被差越候兩通ニ留置候、以上、

四月七日

○四月二十二日禁裏附へ

明樂――　　德大寺――
内藤――　　坊城――

來廿七日午剋、酒井若狭守可有參
内〻旨、被　仰出、則若狭守に申入候、仍申達候、以上、

四月廿二日

追る來廿七日午剋、伊奈遠江守・小堀勝太郎・中井岡次郎
御所に可致參上由、若狭守に相達候、爲心得申達候、以上、

〔禁裏附上申書〕（德大寺實堅武家傳奏記錄（御用帳）所載）

○四月二十二日武家傳奏へ

德大寺――　　明樂――
坊城――　　内藤――

御手翰拜見仕候、然ゑ來廿七日午剋、酒井若狭守可有參
内〻旨、被　仰出、則若狭守に被仰入候旨被仰下、承知仕候、以上、

四月廿二日

猶以、來廿七日午剋、伊奈遠江守・小堀勝太郎・中井岡次郎
御所に可致參上由、若狭守に被仰達候旨、爲心得被仰下、承知仕候、以上、

彦根藩主井伊直亮（掃部頭）千駄崎（相模國三浦郡）砲臺守衛ノ爲、野比（相模國三浦郡）・長澤（同上）二村ヲ管センコトヲ請フ。幕府、批シテ勘定奉行ト協議セシム。

〔彦根藩備場記錄〕（○伯爵井伊直忠所藏本）

五月三日

一書　付　壹　通

阿部伊勢守御勝手に持參仕、御用人山岡衞士に、相州野比・長澤〻邊浦賀御奉行御支配所に有之由、千駄崎御臺場
御方樣御持場に相成候に付ると、右〻邊初、都る海岸附御領分に相成候樣、被遊度に付る〻書付〻趣申達、相渡候處、委細伊勢樣に可申上旨被申聞候、此段申上候、以上、

五月三日　　安中半右衞門（彦根藩留守居）

土（木俣長門、彦根藩家老）佐　樣

書付左〻通、

相州野比長澤海岸地方ヲ彦根藩領ニセラレタシ

井伊掃部頭樣御持場相模國御備場地理爲見分、御役人共罷越候處、野比・長澤邊と浦